

38-2117

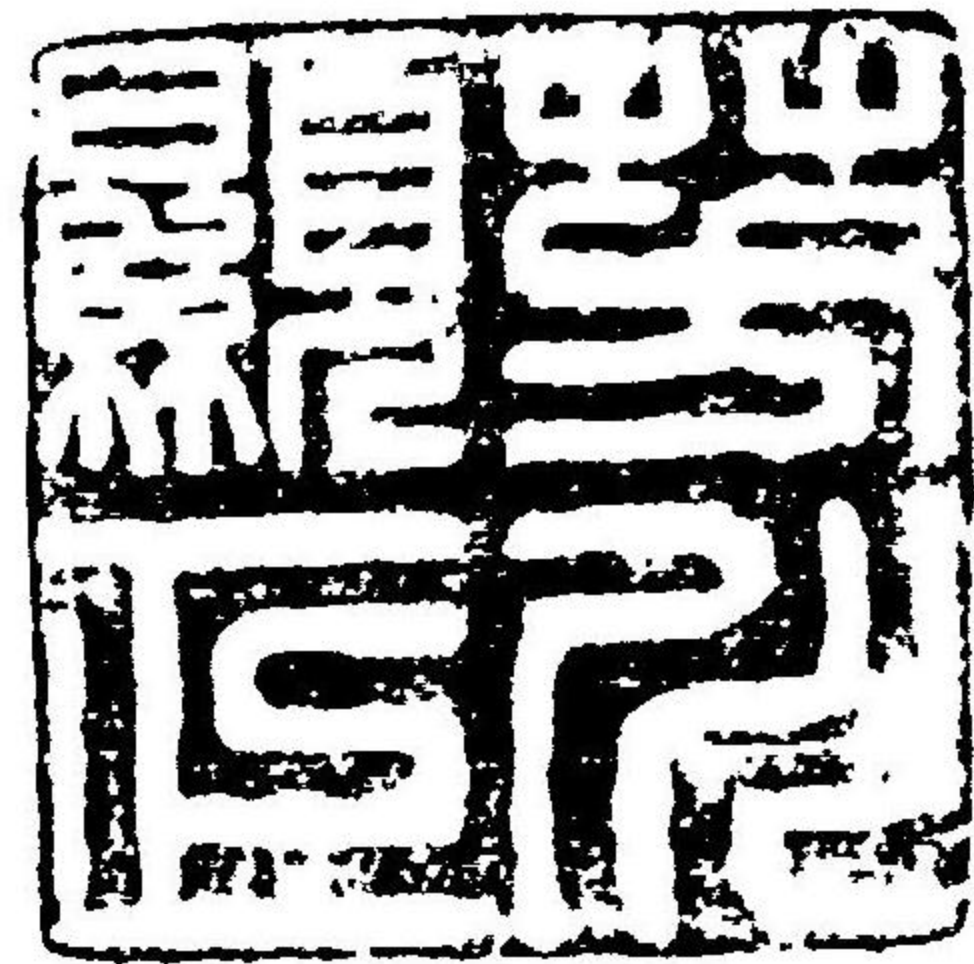
W. 2212/RTV.

學

財

利
用

越山人題



財政原論第二版序

曩ニ余財政原論ノ第一版ヲ上梓セシヨリ以來我カ獨國
ニ於テ諸家ノ財政ニ關シタル善良ノ書ヲ着セルモノ一
ニシテ足ラス中ニ就キロシエルフチケノイマンザクス諸
氏ノ著書ノ如キフアン、ス、インア、ワグ子ルウンペンバ、ハ諸
氏ノ財政學新版及シヨーンベルヒ氏ノ理財學ノ諸書ノ
如キ最拔群絶倫ナルモノナリ乃其ノ財政學ニ於テハ陳
腐ヲ祛除シ新意ヲ開造セシモノ指屈スルニ違マアラズ
尙部ヲ分子門ヲ設ケ精研細究以テ益我カ大陸諸國ニ於
ケル財政ノ進歩時代ノ區分ヲ明晰ニシ更ニ其ノ國家經
濟ト文化ノ狀態トノ關係ヲ詳示シ以テ世人ヲシテ歴史

的ノ攻究及解知ハ此ノ財政學ニ於テモ亦大ヒニ其ノ利益アルコトヲ覺悟セシムルニ至レリ

余ハ本書即此ノ第二版ヲ以テ學術的觀念ノ此ノ大進歩ニ伴ハンコトヲ要スルニ當タリ第一版伊太利ノ原本ニ拘泥セス其ノ編成ヲ一變シ大ヒニ之ヲ改正増補スルニアラスンハ此ノ目的ヲ達スヘカラサルコトヲ知ルヤ輒チ二點ニ向ヒ之ヲ實行セリ二點トハ何ソヤ曰ハク此ノ學ニ從事シ益其ノ蘊奧ヲ窮メタルニ由リ緊要ナル問題ニ對シ其ノ持論ヲ變更シタルモノ多キコト曰ハク本書編成ノ區分秩序ヲ改良シ大ヒニ其ノ不足ヲ補ヒ紙數殆ト前版ニ倍セルニ至ルコト是レナリ蓋第一版ハ初學者

ノ爲此ノ學ノ要綱ヲ示スニスラ且未タ充分ナラサルコトハ余ノ曾テ自認シタル所ニシテ世評モ亦此ノ點ニアリシヲ以テナリ故ニ本版ニ於テハ第一版ニ畧論セシ國家私有財産ノ收入及間稅ハ其ノ最モ緊要ナル種類ヲ分チテ之ヲ細論シ且其ノ得失論ヲ敷衍シタルカ如キ其ノ歷史上ノ發達ヲ畧言シテ注意ヲ促シタルカ如キ國家ノ財政ト市町村ノ財政トヲ分チ特ニ之ヲ論シタルカ如キ是其ノ増補改正ノ最著シキモノナリ

斯ノ如ク之ヲ増補改正シタルニモ拘ラス曩ニ第一版ヲ編輯セシ時ニ基礎トナシタル「エレメンチ、ジ、スチエンツ、マ、デルレ、ブヒナンツ」(財政原論)ノ書名及著者ノ姓名ハ尙依

然之ヲ存シ置カサルヲ得サルヲ信ス何トナレハ余ハ該
原書ノ開導刺撃ニヨリテ曾テ此ノ書ヲ著ハスヲ得タル
ノミナラス此ノ第二版ニ於テモ其ノ緊要ノ原則舉証ノ
法及立論ノ順序ニ至リテハ該書ニ依據センモノ尙尠少
ニアラス加フルニ伊國及其ノ他諸邦人ニシテ財政學ニ
關スル著書アルコトヲ知リ之ヲ本書ニ指摘スルコトヲ
得ルニ至リシモ亦實ニコッサ氏ノ賜モノナルヲ以テナリ
其ノ功德豈之ヲ没ス可ケンヤ

本書其ノ目的トスル所亦第一版ニ異ルコトナシ要スル
ニ初學者ノ爲更ニ論次ヲ整齊シ以テ學術的ニ財政學ノ
要綱ヲ修得スルノ便ヲ與ヘント欲スルニ在ルノミ若夫

書外ノ委曲ニ至リテハ學者宜シク諸家ノ講演ヲ聽キ或
ハ諸書ニ涉獵シ以テ能ク之ヲ補全スル所アルヘシ
千八百八十八年六月十二日「エルランゲン」ニ於テ

編者識

財政原論例言

一本書ハエーベルヒ先生ノ新タニ著ハス所ナリ原著者
曾テ彼ノ有名ナル伊國人コッサ氏著ス所ノ財政原論ヲ
譯述セリ爾後雋絶ノ學者漸次輩出財政學ノ面目茲一
一變セシヲ以テ今ヤ大ニ其ノ舊本ヲ増補改正シテ更
ニ此ノ一新書ヲ著シ以テ學說ノ進歩ニ並行センコト
ヲ期セシモノナリ

一財務行政ノ事タル財政學上須要ノ一部タリ而シテ原
本ノ之ヲ闕クハ白璧ノ微瑕ト謂フヘシ故ニ余敢テ
ツシエル氏財政學中ノ要點ヲ抄譯シ以テ之ヲ補ヒタリ
其ノ原文ニ對シ字句ノ往々緊當確符セサルモノアル

ハ蓋彼此前後ノ接續ヲシテ流暢ナラシメントスルニ由ルナリ

二書中ノ譯字ハカメテ從來慣行ノ語ヲ用ヒ濫リニ新奇ヲ弄セス譯文亦カメテ原文ノ字句ニ對據セリト雖其ノ行文ノ梗險ナルモノアルニ當タリテハ或ハ之ヲ敷衍シ或ハ之ヲ收縮セシモノアリ蓋其ノ意義ヲシテ最通解シ易カラシメンカ爲ナリ

一行文ノ流暢ナラサル語辭ノ妥當ナラサルハ或ハ意外ノ誤解ヲ生スルノ恐アルモノナリ是ヲ以テ同寅水谷弓夫君ニ乞ヒ校閱ノ勞ヲ托シ以テ其ノ過少ナカラシコトヲ期シタリ然レトモ財政學ハ余輩ノ未々專修セ

サル所ナルヲ以テ尙原文ノ解釋ヲ誤ルモノ無キヲ保
セス覽者幸ニ焉ヲ諒セヨ

明治二十四年十月

譯者 識

財政原論目錄

總論

- 一 財政(自第一章至第三章) 一
 - 二 財政ノ特性(第四章) 四
 - 三 財政學(自第五章至第七章) 八
 - 四 財政學ト他ノ學問及實際トノ關係(自第八章至第十章) 一
 - 五 財政學ノ歴史(自第十一章至第十五章) 一四
- 第一編 歲出論
- 一 財政學ノ順序ニ於ケル歲出論(第十六章) 二七
 - 二 國家歲出ノ定義及其ノ額(自第十七章至第十八章) 二九
 - 三 法律政治及經濟ノ關係ニ於ケル國家ノ歲出(自第十

章至第九二十一章

三〇

四 歲出ノ類別(自第二十二章至第二十九章)

四〇

第二編 歲入論

國家歲入ノ定義及類別(自第三十章至第三十一章)

五三

第一款 營業收入

營業收入ノ定義及類別(自第三十二章至第三十三章)

五五

第一節 官領地(農地及森林)

一 農地ノ管理(自第三十四章至第三十七章)

五七

二 農地ノ賣却(自第三十八章至第三十九章)

六四

三 森林(自第四十章至第四十二章)

七〇

第二節 作業及商業

一 採鑛及熔鑛(第四十三章)

七五

二 製造場、銀行等(自第四十四章至第四十五章)

七七

三 運輸交通事業(自第四十六章至第四十九章)

七九

第二款 貢納

貢納ノ定義及類別(第五十章)

九四

第一項 手數料

一 手數料ノ定義(自第五十一章至第五十二章)

九五

二 手數料總論(自第五十三章至第五十七章)

九九

三 手數料各論(第五十八章)

一〇五

甲 司法手數料(自第五十九章至第六十章)

一〇六

乙 內務行政手數料(自第六十一章至第六十二章)

一一〇

四 手數料徵收法(第六十三章)

一一四

第二項 租稅

一 租税ノ定義及其ノ理由(自第六十四章至第六十五章)	一一六
二 租税ニ關スル術語ノ解(第六十六章)	一一九
三 納税移轉(第六十七章)	一二一
四 租税ニ關スル普通ノ主義(第六十八章)	一二六
五 公正ノ主義(自第六十九章至第七十四章)	一二九
六 經濟ノ主義(自第七十五章至第七十六章)	一四〇
七 財政ノ主義(自第七十七章至第七十九章)	一四三
八 普通ノ所得稅及課稅法(自第八十章至第八十二章)	一五一
九 租税ノ類別(自第八十三章至第八十八章)	一五六

第一節 收獲稅(直稅)

一 定義及類別(第八十九章)	一六五
二 地稅(自第九十章至第九十五章)	一六七
三 家屋稅(自第九十六章至第九十九章)	一八一
四 金利稅(自第一百章至第一百二章)	一八八
五 營業稅(自第一百三章至第一百七章)	一九七
六 勞銀稅(自第一百八章至第一百十章)	二〇八
七 收獲稅ノ得失(自第一百一章至第一百五章)	二一五

第二節 財產移轉稅

一 定義及類別(第一百十六章)	二二六
二 生存者相互間ノ財產移轉稅(自第一百七章至第一百十九章)	三三〇
三 死亡ノ爲ニスル財產移轉稅即相續稅(自第一百二十章)	

十章至第二百二十四章)

二三八

四 移轉不能財產ノ稅(第二百二十五章)

二四八

五 財產移轉稅ノ得失(自第二百二十六章至第二百二十九章)

二五〇

第三節 消費稅

一 定義及類別(自第三十章至第三十六章)

二六〇

二 穀粉、獸肉、及食鹽稅(自第三十七章至第三十九章)

二七四

三 麥酒、葡萄酒及火酒稅(自第四十章至第四十四

四章)

二八二

四 甜菜糖稅(第一百四十五章)

二九七

五 煙草稅(自第四十六章至第四十七章)

三〇〇

六 直接消費稅(第一百四十八章)

三〇八

七 國境稅(自第一百四十九章至第一百五十三章)

三一—

八 消費稅ノ得失(自第一百五十四章至第一百五十五章)

三二—

第四節 人稅所得稅及財產所得稅

一 人稅(第一百五十六章)

三二九

二 分等稅(第一百五十七章)

三三一

三 普通所得稅(自第一百五十八章至章百六十一章)

三三四

四 財產所有稅(第一百六十二章)

三四五

第三編 歲入歲出關係論(國債論)

一 財政ノ秩序(自第六十三章至第六十四章)

三四九

二 過剩及不足(自第六十五章至第六十七章)

三五三

三 國債(自第六十八章至第七十二章)

三六二

第一節 流動國債

一 流動國債ノ定義及種類(自第七十三章至第七十五章)

三七三

二 紙幣(自第七十六章至第七十八章)

三八〇

第二節 固定國債

一 固定國債ノ定義及種類(自第七十九章至第八十章)

三八八

二 定時償還國債(自第八十一章至第八十三章)

三九二

三 隨時償還國債(第八十四章)

三九七

第三節 國債管理

一 國債ノ募集(自第八十五章至第八十八章)

三九九

二 利子低減種額變更及整理(自第八十九章至第

百九十章)

四〇八

三 償還(自第九十一章至第九十三章)

四一一

第四編 財務行政(第九十四章)

四一七

第一項

財務官廳(自第九十五章至第九十六章)

四二〇

第二項

豫算、出納、決算及監督法(自第九十七章至第二百二章)

四三一

附錄 市町村財政

一 市町村ノ財政ト國家ノ財政トノ關係(自第一章至第四章)

四三七

二 市町村ノ歲出(自第五章至第六章)

四六二

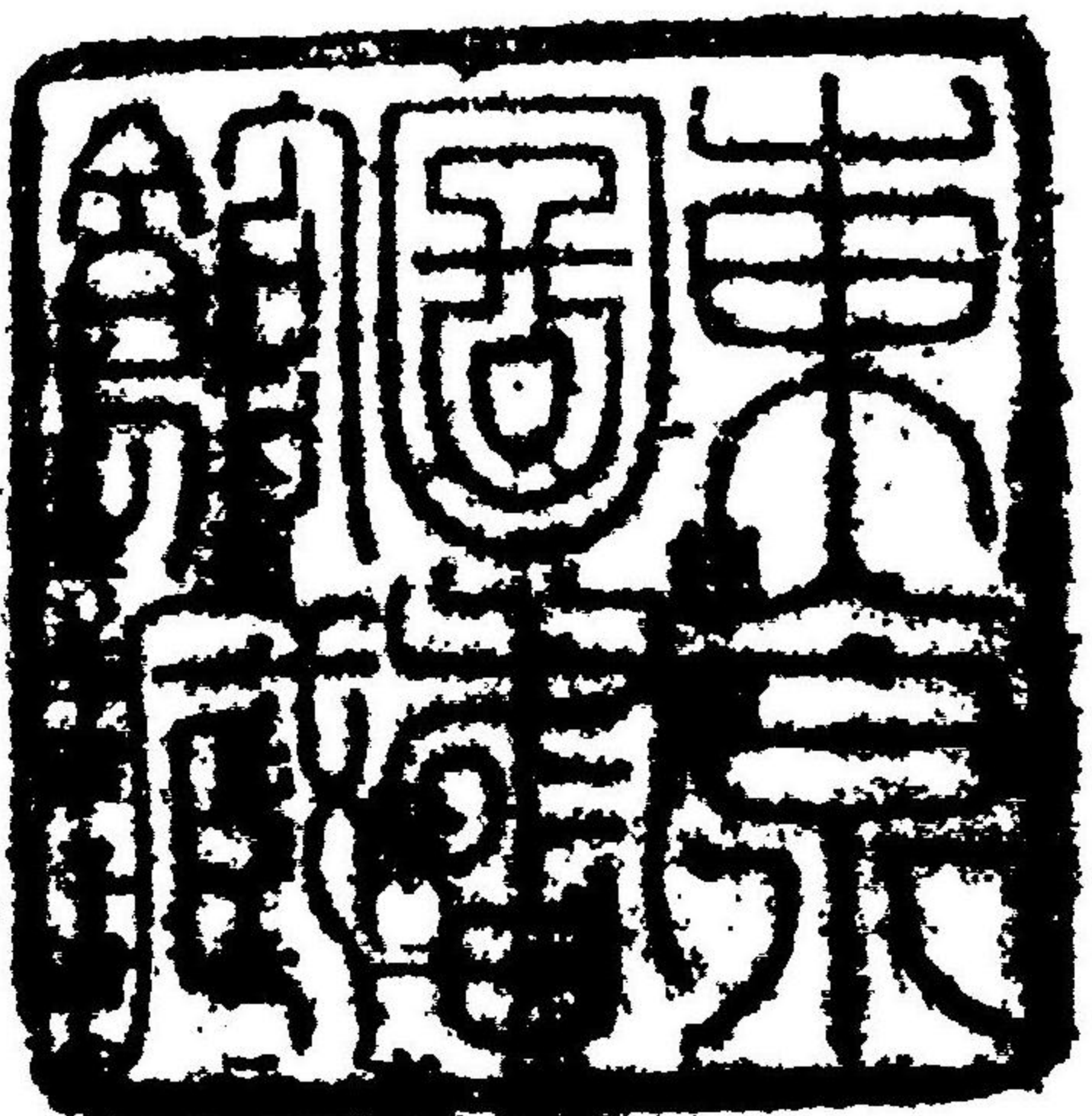
三	市町村營利業ノ歳入(第七章)	四六六
四	手数料及租税(自第八章至第十四章)	四七〇
五	國家ノ財源讓與及補助金(第十五章)	四九一
六	市町村債(第十六章)	四九三

十

財政原論

獨逸 カフ、エー、ヘルヒ 原著

日本 寺田 勇吉 共譯
平塚 定二郎



生活スルヤ肉體智識及道德ノ力ヲ保持シ之ヲ大成
ニセントスルノ目的ヲ達センカ爲ニ相結合シテ家
族的國家的政治的ノ團體ヲ爲スモノナリ

政治的團體ノ最重要ナル形状ハ市町村郡州及國家ニシテ皆各之ヲ

總論

一

統治スル所ノ官衙ヲ設ケ以テ其ノ固有ナル權利義務上ノ秩序ヲ立ツルモノナリ故ニ此ノ政治的ノ團體ハ其ノ所属各個人ノ公共ナル需用ヲ満足スルコトヲ務メ以テ其ノ利益ヲ保護シ且其ノ利益ヲ得ルコトヲ冀メス

第二章

此ノ需用ハ何ヲ爲スルヲ要ス夫國家若シ官衙ヲ維持セントスルニハ其ノ權利勢力及威嚴ヲ代表スヘキ官衙ヲ設ケ官衙ヲ任スル爲業ニ既ニ其ノ貨財ヲ要スヘシ況ンヤ此ノ貨財ハ國庫ヲ防守シ内ハ生命財產ヲ安全ナラシメ民衆ノ衛生教育及經濟上ノ福利ヲ獎勵スル等ノ數事モ亦國家及自治體ノ義務タルヲヤ蓋此ノ義務ヲ全クセント欲セバ尙餘ニ官衙設備ヲ置キ以テ之ヲ措辦セサルヲ得ス

公共ノ各團體ハ經濟上ノ貨財ヲ費スヘキコト斯ノ如シ故ニ其ノ團體ハ各皆固有ノ資産ヲ有スヘキコト最必要ナリトス此ノ資産トハ即法律ヲ以テ國家及其ノ以下ナル政治的團體ノ需費ヲ充足スル爲ニ定メアル國民ノ資産ノ一部分ヲ指スモノトス左レハ右公共ノ資産ニ在リテハ國家及其ノ他ノ政治的團體カ一私人タルノ資格ヲ以テ所有スル金錢物件ハ勿論民衆カ國家州郡又ハ市町村ニ仕拂フ所ノ貢納就中租稅買納租稅ノ別部ヲモ悉此ニ包含スルモノナリ故ニ此ノ公共ノ資産ナルモノハ固ヨリ各個人及君主私有ノ資産ト別異ナルコト勿論ナリ

此ノ公共資産ノ徵收及使用ハ一私人ノ經濟ニ於ケルカ如ク豫メ充分確實ノ計畫ヲナシ之ニ據リテ實行スルモノニシテ其ノ徵收使用等凡テ之ニ關スル行爲ノ總體ヲ稱シテ財政又ハ國家ノ經濟政府ノ經濟若

ハ市町村ノ經濟等ト云フ

第三章

公共團體ノ數及其ノ團體ノ主宰スル經濟ノ多寡ハ各國其ノ版圖ノ廣狹ニ隨ヒ一樣ナラス又公共ノ需用ハ國土及國民自然ノ狀態及性質ニ其ノ歷史上、政治上及經濟上ノ有様如何ニ由リテ定マルモノナレハ時ト場所ト既ニ異ナル上ハ隨ヒテ其ノ需用モ亦自ラ異ナラサルヲ待ス是レ其ノ各個ノ政治的團體ニ於テ諸般ノ概テ一樣ナル能ハサル所以ナリ且其ノ需用ヲ各團體ニ區分スル方法如何ノ如キモ亦其ノ一樣ナラサル理由ノ一ナリトス

二 財政ノ特性

第四章

財政ハ政治的團體ノ經濟ナルカ故ニ一私人ノ經濟ト全ク異ナリタル

目的ヲ有シ且全ク異ナリタル手段ヲ用ユルヲ以テ既ニ其ノ特異ナル性格ヲ有スルヲ知ルヘシ但一私人ノ經濟ト此ノ財政ト其ノ目的手段ヲ同クスル場合ナキニ非ス例ヘハ國家所有ノ農用地及作業場ノ營業ニ於テハ其ノ目的手段既ニ同シ故ニ彼此共ニ同一ノ規矩ヲ以テ之レヲナスヲ得ヘシ然レトモ是レ唯一小部分ニ過キサルノミ其ノ最大部分ニ至リテハ其ノ事體ヲ異ニス今其ノ異ナル所ヲ指點スレハ左ノ如シ

(一) 私人ノ經濟ニ於テ勞力及貨財ハ固有ノ生産若ハ買得ニ由リテスルニアラサレハ之ヲ取得スヘカラサルコト常ナリ之ニ反シ公共ノ團體ニ於テハ勞力及貨財ヲ取得スルニ最重要ニシテ且其ノ本性ニ最適當ナル方法ハ則強制取得ニ在リトス之ヲ別言スレハ團體ハ強制的ニ民衆ヨリ貢納及勞力ヲ徵スルノ權カヲ存有ス(例ヘハ租稅、兵

(二)強制收得ノ外團體ハ復一定ノ行爲ニ對シ一種ノ專收權ヲ有ス(例ハ司法事務及陸軍志願兵ニ關スル收得)

(三)團體ハ己レカ主權ノ力ニ據リテ或ル事物ヲ何々ノ貨財及勞力幾何ニ代ヘテ利用スヘシト命スルコトヲ得故ニ其ノ一定ノ特有權ヲ有ス(例ハ人民カ詞訟ニ付キ裁判所及學事ニ付キ學校ヲ利用スルトキハ手数料ヲ仕拂ハシムルノ制)

(四)團體殊ニ國家ノ生存ハ無限ナルヲ以テ財政ハ其ノ手段及目的ニ於テ當ニ現在ノ爲ニスルノミナラス復永遠未來ノ爲ニ計ルヲ要シ且其ノ爲ニ計ルコトヲ得ヘキナリ

(五)至高權ハ公共ノ需用ヲ給足スルニ須要ト認ムル貨財ニアラサルハ民衆ヨリ徵收スルヲ得ヘカラス故ニ其ノ收得ハ需用ヲ限トスヘシ

蓋一私人ノ經濟ニ於テハ收入ニ據リテ支出ヲ定ムト雖財政ニ在リテハ支出ヲ計リテ收入ヲ定限スルモノナリ

(六)凡秩序アル一私人ノ經濟ニ於テハ生産費ト生産物ノ價值トヲ比較スルコト最緊要ナリト雖國家ノ利行ハ概テ無形ニ屬シ多クハ賣買ノ總ナク隨ヒテ其ノ價值ヲ計算シ得ヘキニアラサルヲ以テ其ノ生産費ト生産物ノ價值トヲ比較スルコト極メテ難ク或ハ全ク之ヲ比較スルニ由ナシ例ハ民衆カ租稅トシテ仕拂フモノハ計數上確知スルヲ得ヘシト雖之ニ對スル國家ノ報價ハ固ヨリ原價ヲ以テ之ヲ算定スヘカラス而シテ此ノ缺典ヲ補フニハ公正無私ニシテ且思慮深遠ナル所ノ代議院カ最之ヲ能スルカ如ク專ラ其ノ注意ヲ以テ民衆ノ仕拂フ貨財ト國民ノ需用トヲ相對比スルノ一術アルノミ但此ノ點ヲ講究スルハ財政及其ノ學ノ範圍ニアラサルナリ

三 財政學

第五章

凡公共ノ財ヲ理ムルノ教ヘテ財政學ト云フ
財政學トハ國家郡市町村等カ其ノ目的ヲ達スルニ須要ナル貨財ヲ取
得シテ之ヲ使用スルニ標準トナルヘキ原則即財政ヲ施スノ原則
ヲ以テ之ヲ整然タル順序ニ結構シ其ノ適當ノ所ニ於テ一定ノ組織ヲ
具ヘテ運動シテ固有ノ形狀アル一全體ヲナス所ノ經濟上ノ生活
ヲ詮索シ且之ヲ他ノ場所及他ノ時ニ於テ生スル同種ノ現象ニ比較シ
以テ其ノ生活アルヲ曉ラシムルコトヲ務ムルモノナリ故ニ國家カ須
要トナス貨財ノ取得及使用ニ關スル事實ヲ研究シテ之ヲ記述スルヲ
以テ此ノ學ノ第一ノ目的トシ尋キテ之ヲ概括シテ普通ノ原則ヲ定メ
且財政ノ問題ニシテ未タ歸着スル所アラサル件ニ對シテ學術上解答

スルヲ期スルモノナリ

財政學ハ財政ノ區分ニ隨ヒ歲出論(第一)及歲入論(第二)ノ二ニ大別セテ
ニ加ルニ歲入歲出關係論(第三)ヲ以テス而シテ歲入歲出關係論ノ中ニ
於テ最緊要ナルハ國債ノコトナリ故ニ此ノ論ヲ稱セテ亦國債論ト云
フ

第六章

種々ナル公共團體ノ財政ハ全ク同一若ハ相類似シタル制度在々其ノ
多キヲ見サルコトナキニ非スト雖細カニ各其ノ内部ニ立入りテ之ヲ
見レハ其ノ自然ノ性質其ノ圍範權限ハ勿論其ノ使用スヘキ所ノ手段
等ノ如キ財政ノ施行法ニ於テモ頗ル別異アルモノニシテ到底之ヲ同
一視スヘキモノニアラス就中國家ト自治體ノ間ニハ最著シキ懸隔ア
ルモノナリ

凡公共ノ團體中國家ハ最重要ナルモノニシテ其ノ著大ナル普及ノ權カト職分トヲ有シ又其ノ文化開進ノ力ヲ具ヘテ他ニ抽出スルモノナリ是ヲ以テ從來財政學ハ單ニ國家ノ財政ノミヲ講究シタリシカ故ニ世間ニ於テハ財政學ト云ヘハ即國家ノ財政學ノミヲ指稱スルノ思ヲナシタルコト通例ナリ

去リナカラ爾餘ノ政治的團體殊ニ市町村ノ如キ亦公共ノ需用ヲ給足スルニ頗ル著大ナル効驗アルモノナリ故ニ其ノ財政學ニ於テ全ク之ヲ度外視シテ顧ミサル如キハ未タ其ノ學ヲ完全シタリト謂フヲ得ス但自治體ノ財政タル國家ノ財政ニ混シテ之ヲ論スルハ便宜ニ適セス故ニ特別ニ之ヲ説クヲ良シトス此ノ主意ニヨリ本書ニ於テモ先ツ國家ノ財政ヲ論シ而ル後附録ヲ設ケ以テ自治體ノ財政ヲ説述セントス

第七章

抑財政學ナルモノハ一ハ理論上一般ノ學術殊ニ法律及政治ノ學科ニ緊密ノ關係アルト一ハ實際ニ於テ此ノ學ノ効用大ナルトヲ以テ最級密ノ研究ヲ要スヘキ一科ノ學問ナリトス故ニ官吏又ハ立法體ノ議員トナリ否ラサレハ選舉權若ハ結社及請願ノ權ヲ使用シ或ハ出版ノ自由ヲ利用シテ直接間接ニ國家及其ノ他政治的團體ノ統治ニ與カル者ニ取リテハ殊更必要ナルモノナリ

四 財政學ト他ノ學問及實際トノ關係

第八章

財政學ハ國家學ノ一部分タリ而シテ其ノ目的ヨリ之ヲ觀レハ行政學ニ屬シ其ノ使用スル所ノ手段ヨリ之ヲ觀レハ重モニ經濟學ニ屬ス左レハ財政學ハ行政學及經濟學ニ最親密ノ關係ヲ有シ之ヲ討究スルニ此ノ二學ヲ兼修スルヲ必要トスル所ノ一種固有ノ學問ナリト云フコ

ト至當ナルヘシ且夫法律及政治ノ普通原則モ亦財政學ノ泉源トナル
 コト彼ノ經濟ノ原則ニ異ナルコトナシ故ニ財政ニ關スル總テノ問題
 ハ法律行政及經濟ノ三點ヨリ之ヲ講究セサルヲ得ス
 其ノ之ヲ一種ノ獨立ナル學問トシテ講究スヘキ理由ハ則大ナル政治
 的團體ノ經濟上ノ生活ヲ究理スヘキ學術ノ緊要ナル一點ニ徴シテ既
 ニ明白ナリト雖其ノ他此ノ學術ノ根底タル泉源ノ異別ナル及殊ニ近
 世此ノ事項ニ關スル探理ノ頻繁ナル皆其ノ理由ナラサルハナシ

第九章

又財政學ノ外ニ於テ財政學ト全ク其ノ注目ノ點ヲ異ニスルモ齊シク
 國家ノ資産ニ就キテ講究シテ財政學ト間、其ノ主體ヲ同クスル所ノ學問
 アリ財政史、財政統計及財政法律即是ナリ是等ノ學科ハ國家ノ資産ニ
 就キテ時々ノ變遷時ト場所トニ由リテ定マル所ノ實際ノ事實若ハ之

ニ關スル法律ヲ講究スルモノナリ故ニ國家資産ノ時ト場所トヲ異ニ
 スルニ從ヒ生スル所ノ種々ノ實況ヲ説明シテ財政學ノ最有益ナル補助
 トナリ其ノ理由ヲ表明シ且其ノ奥蘊ヲ探クルコトニ於テ須臾モ缺ク
 ヘカラサルモノトス財政學ハ之ニ相對シテ財政上ノ顯象ニ於ケル普
 通ノコト永續ノコト及必要ノコトヲ詮索シ汎ク現在、過去、未來ニ關シ
 スルモノナリ

凡財政學ノ補助トナル學科中最重要ナルモノハ普通ノ歴史(經濟史又
 明史及法學史)統計學藝術學及一家經濟學及會計學ナリトス

第十章

財政學ノ補足ニ最必要ナルモノハ財政ノ施行ニ要スル規定ノ實用ニ
 由リテ生スル所ノ實際ニアリ此ノ實際ノ行爲ハ學術上ノ理論ト各個
 經驗ノ成績トニ依リテ導カル、モノナリ

夫學術ト實際トハ車ノ兩輪ノ如シ單ニ其ノ一方ノミヲ以テ全キヲ得ヘシト云フカ如キハ是レ謬見ノミ學術ハ普通ノ理ヲ究メ實際ハ之ヲ應用ス二若相須チテ始メテ財政上ニ於ケル諸考案ヲ活用スルヲ得ヘシ二者若其ノ一方ヲ欲クコトアラハ則架空ノ論ニ失セサレハ恐ラクハ偏執ノ弊ニ陷ラン慎マサルヘケンヤ

五 財政學歷史

第十一章

財政ニ關スル學術上ノ著書ノ世ニ出テタルハ全ク十六世紀以後ニアリ
 在昔各國ハ頗ル著シキ功績ヲ財政上ニ顯ハシ且財政ノ價值ヲ識別シ居タルコトハ爭フヘカラサルノ事實ナリト雖是皆必竟實驗ノ効果ナルノミ其ノ學術的ニ順序立チタル研究ヲナシタルノ結果ト看做ス

キモノ一モ之レアルヲ見ス經濟ニ關スル普通ノ思想ハ大古ニ於テハクセノフアン及アリストテレス等ノ著書ニ於テ之ヲ散見スルニ過キハ中古ニ至リテモ神道學哲學政治學及法律學ニ關スル能辨學講師ノ著書中僅カニ之ヲ見ルモ概チ實際ノ弊害ヲ矯正スルノ目的ニ出タル財政上ノ德義ニ關スル二三ノ通則中ニ於テ存スルノミ
 尋キテ中古ヨリ近世ニ移ルノ時ニ當リテハ財政殊ニ先ツ國家ノ財政ニ關スル問題ニ就キ注目ヲ要スルノ理由トナリタルモノ多シ今其ノ最重モナルモノヲ舉クレハ左ノ如シ

(一) 國家ノ定義ヲシテ崇祖國的解释ノ範圍ヲ脱セシメ且君主專制ノ制度ヲ興起シ以テ眞ニ國家ノ生活ヲ始ムルヲ得ルニ至リシコト
 (二) 等族兵ヲ變シテ常備受給兵トナシ舊獨逸法ヲ廢シテ羅馬法ヲ用ヒ之カ爲ニ速カニ歳出ヲ増加シ新タニ財源ヲ索ムルノ必要アルニ至

リタルコト

(三)現物經濟ヲ變シテ金銀經濟トナシ是ニ依リテ國家ハ財源ヲ得且夥然タル出納及決算法ヲ設クルヲ得ルニ至リシコト

(四)文化漸ク進ミ事々物々學理上ノ觀察ヲ用ヒ其ノ事ヲ判斷スルニ普通ノ理ヲ知ルノ域ニ達シタルコト

第十一章

従前王侯所領地ノ外ニ於テ殆ト財源ナカリシモノニシテ十六世紀及ヒ此ノ財源ヨリ生スル收入ハ以テ公共ノ需費ヲ給足スルニ足ラサルヲ知ルノ感觸愈多キヲ加ヘ又之ヲ給足スルノ資料ハ其ノ王侯特有權關稅及租稅ニ仰カサルヲ得サルコト愈繁キヲ加フルニ隨ヒ當時ノ國家學ヲ論スル者ハ益々多クノ注意ヲ財政ニ加フヘキノ刺戟ヲ受ケテリ面シテ當時既ニ之ヲ論述シタル著述家中特ニ稱揚スヘキ者ハ佛國

人シヤンボダン(千五百三十年乃至千五百九十六年)伊國人ギラバニール(千五百四十年乃至千六百十七年)及英國人ボッペスベッチ并ニロツクノ諸氏ナリ

十七世紀ヨリ十八世紀ニ亘リ世ニ出テタル財政學ノ諸書ハ殆皆獨逸人ノ著ハス所ナリ而シテ其ノ獨逸人ハ概テ王侯所領地及王侯特有權ノ論ヲ主トナシ財政學ヲ所謂王侯財產管理學ノ一部分トシテ論セリ例ヘハヤコープ、ホルニッツリストーフ、ベグルドカスパー、クロックノ如シ是等ノ著述家ニ比シテ最有名ナルハルードウ、ヒ、フタン、セッケンドル(千六百二十六年乃至千六百九十二年)ナリ同氏及コンリングスシヒ、イザルニ氏ノ著書中ニハ國民ノ經濟及國民ノ貧富ト其ノ納稅力トノ關係ヲ曉ルヘキ端緒ヲ開キタルモノ少ナシトセス尋キテフタン、ユスチ、及アンチンフェルス(千七百三十三年乃至千八百十七年)ノ如キ著述家

ニ在リテハ彼ノモンテスキューノ説ニ制セラレタルモ尙其ノ先輩ノキ
義トセシ所ハ全ク之ヲ廢棄スルニ至ラス以テ現今行ハル、所ノ財政
學ノ理論ヲ順序立ツルノ結果ヲ致セリ

之ニ反シテ外國ニ於テハ多ク財政ニ關スル一局部ノ問題ヲ研究シタ
リ例ヘハ佛國人ポアギルベール及ボーバー并ニ伊國人プロキアーハ
租税ノコトヲ論述シテ有名ナリ英國人ダウエナントユッチェン及ベルナ
ルド并ニ佛國人ムロン及ヴォートノ如キハ既ニ國家ノ信用ニ關スル問
題ヲ説キタルカ如シ

第十三章

學術ノ名ヲ冠ラシムルニ足ルヘキ財政學ノ研究ハ前世紀ノ終リヨリ
始マレリ而シテ之ヲ始ムルニ至ラシメタル理由ニアリ曰ハク第一
シテスキュールーツー及カントカ其ノ有名ナル著書ヲ以テ創立セル法理

及國理ノ新説第二(フヒオクラット)重農學派及殊ニアダム、スミス學派ノ
新經濟學ノ興起及其ノ大成第三佛國ノ革命ニ起因セル政治經濟及社
會ニ於ケル急激ノ變遷及技術ノ進歩是ナリ

重農學派ノ未タ普ク傳播セサル前既ニ英國ニ於テ徐ロニ之ヲ準備シ
タル同國人ヒュームハ財政ニ取リテモ大功アリ佛國ニ於テ重農説ヲ唱
ヘタル學者中殊ニ屈指スヘキ者ハクエステーミラボー(佛國革命時代
ノミラボー)父ナリ)チュルゴー及順序立タル決算法ヲ財政ニ用ユルコ
トヲ務メタル子ケルナリトス抑重農説ノ教義及此ノ説ヲ奉スル者ノ
創立ニ係ル純益論ノ結果タル單獨税ノ學理ハ謬説タルヲ免レスト雖
財政ト經濟トハ相須テ離ルヘカラスト説キタルハ全ク其ノ道ニ功
ナル者ト云フヘシ然レトモ其ノ功アル者ヨリ論スルトキハ真正ナル
經濟學ノ開祖タルアダム、スミスハ固ヨリ此ノ比ニアラス蓋氏ハ管ニ

充分鞏固ナル經濟的ノ基礎ヲ財政學ニ得セシメタルノミナラス復共
ノ著富國論第五編中ニ於テ當時ノ事情ニ適セル財政ノ教義ヲ立テタ
ルヲ以テナリ

第十四章

其ノ後ニ至リ英國人佛國人及間、亦伊國人ニシテアダム、スミスノ流
ヲ酌ミ其ノ財政學上ノ教義ヲ經濟學ノ教科書中ニ講述シタルモノ、シ
ナカラスカナルドイ、ペー、セージモンド、ブ、ジスモンジシエルブリエー、
スト、ミルファーターセットウ、セリング及ナツアニーノ如キ即是ナタ

獨逸國ニ於テハ夙ニ財政學ヲ獨立ナル一科ノ學問トシテ講究シ居リ
ルモノナリスミスノ經濟學ノ始メテ獨逸財政學ニ影響ヲ來シタルハ
當世紀二十年代ノコトナリ即其ノ影響ヲ被リテ成タルハヤコーブノ
ルダ及マルクトース諸氏ノ著書ニシテ就中著名ナルハカ、ハ、ラウノ財政

學ナリトス是等ノ財政學者殊ニラウハ財政學ヲ高尚ニシ之ヲ一科ノ
獨立ナル學問トナシ其ノ順序ヲ整齊ナラシムルニ裨益ヲ與ヘタルコ
ト尠少ナラサルナリ

現世紀ニ於テ各國財政法ニ關スル歴史統計及行政上ノ著書大ニ増加
シタル、學理家實際家及政治家カ財政ニ關シ實地ノ問題ヲ詳論シタル
政治上ノ生活益、發達シタル及國會ノ議事ヲ公行シタル等皆財政學ニ
取リテ一トシテ有力ナル基礎トナラサルハナシ今其ノ有名ナル著書
ヲ舉クレハヘルレンヘーゲウ、ヒュルマンリーデル、グーデン及バリ
ーノ財政史クツェルニヒレーデン、ストッタル、フタン、ノイッタル、フツケ、ジ
テリチーシンメルベンニヒリーク及レーゲナウエルノ財政統計及財
政記事クレールツルグニック、ホーマン、フツケヘルフェリヒナツセド、バリ
ユーバストルベツ、ブラソフビルツン及ペスカトールノ租稅論チーバ

ニウズブンゲチウマルヒカブスバリステルハミルトン及メセダグリ
 アノ信用論ナリトス

第十五章

獨逸國ニ於テハ現世紀ノ半ハ以來徐ロニ財政學新發達ノ準備ヲナシ
 居タリ其ノ起原ハ何レモ財政學ニ最密接ノ關係ヲ有スル所ノ學問即
 國家學、法理學及經濟學ニ在ルモノナリ其ノ國家學及法理學ハ其ノ說
 漸ク一變シテ國家ノ本性ヲ以テ無機體的トシテ之ヲ論シタル前世紀
 ノ說ニ反對シ歴史的及有機體的ニ之ヲ論スルノ說興リ大ニ國家ノ働
 作スベキ地ヲ廣汎ナラシメタリ又經濟學ハ各自ノ孤立ニ偏シ單ニ理
 論ニ拘泥セル舊學派ヲ去リ而シテ事實ト歴史トニ依據シタル研究法
 ヲ開基セリ借テ此ノ研究法タル國民ノ經濟ニ於テモ亦國家ノ必要ナ
 ルコトヲ明カニシ倫理學及社會政治學ニ根底スル理由ヲ以テ自由競

爭法ハ往、缺典アリ且危險ヲ免レスト云ヒ以テ國權ノ動作ヲ擴張スル
 ノ要ヲ説キタリシカ其ノ倫理學及社會政治學ニ根底スル理由ハ亦直
 接ニ財政學ニモ浸入シ殊ニ租稅論ニ於テ多ク用ヒラレタリ
 今ヤ財政學ハ猶經濟學ニ於ケルカ如ク尙迷悟ノ間ニ彷徨スルモノニ
 シテ議論未タ一定セス其ノ甚シキニ至リテハ彼此全ク相背反スルノ
 說アルモノ少シトセス然レトモ財政學ニ於テ國家及社會ヲ以テ有機
 體的ニ論スル所ノ新說ハ必ス之ヲ容レサルヘカラサルコトハ有名ノ著
 述家カ已ニ一般ニ是認スル所ナリローレンツ、フタン、スタイン、ロツン
 ル、ウンペンバハ、及フツケノ著書並ニショーンベルヒ經濟論中載スル
 所ノゲクンフタン、シェールシャルリーク等ノ所論ヲ觀ハ必ス其ノ然
 ルコトヲ知ルヘシ蓋此ノ一點ハ國民經濟ヲ論スルニ於テ最新ノ方向
 ヲ執ラサルノ聲ト雖亦已ニ之ヲ贊成スルモノアリ彼ノフタン、ハルノ

リヒノ如シ且歴史法ヲ採用スルハ獨リ財政學ニ止ラス經濟學ニ於テモ亦然リトススタイン財政學中意義最深重ニシテ且快巧ニ論シタル沿革論及ショーンプルヒシモルレルリールフアルケ等ノ著書ヲ見テ亦其ノ然ルヲ知ルヘシ又財政ニ關スル各箇ノ問題殊ニ租稅及國家ノ信用ヲ詳論シタル著書ハ益増加スルニ至レリ以上列舉セシ外尙出群ノ著書アリウヱルシモルレルラスペールヘルドノイマンフリドベルヒ等ナリ若夫社會政治學及國家社會學ノ此ノ財政學ニ對スル關係ノ如キハアウグ子ルノ財政學ニ於テ最判明ナリ此ノ書モ亦茲一指摘ヲ要スルモノ、一トス

夫獨逸ノ財政學ハ未來ニ於テモ專ラ財政ノ歴史ヲ研究シ事實ヲ詮索シテ之ヲ學術上ニ論スルヲ以テ基礎トナスハ疑ヲ容ルヘカラス財政學モ亦百般ノ學術ト同ク次第ニ進化シ學理ニ偏スル舊學派ヲ廢滅

スルノ徵候既ニ乏シカラスト雖未タ以テ一派ノ新財政學ヲ興起スルノ資料ヲナスニ足ラサルナリ

獨逸外ノ著書ニ於テハ殆ど新行路ノ形跡タモ未タ之レアルヲ見ス英佛ノ著書ハ概テ皆尙國家協作ノ舊說トスミス派ノ經濟學ヲ墨守シ獨リ其ノ例外ニ出ツルハ佛人ルーロア、ポーリュノ著書及獨逸ノ學術ニ制セラレタル伊國ノ新著書アルノミ今其ノ屈指ノ學者ヲ舉示スレハフニルラ、ブサ、カプログ、リラ、ミング、ヘッチ、ボツ、カル、ドラ、ン、ベル、チ、ユル、ツ、ア、チ、エ、ル、レ、ナ、ボ、セ、ル、ソ、リ、カ、ザ、レ、ル、ノ、一、及、フ、エ、ル、ラ、リ、ス、ナ、リ、ト、ス

第一編 歳出論

一 財政學ノ順序ニ於ケル歳出論

第十六章

財政學ヲ講スルニ當タリ先ツ首卷ニ歳出(經費即需用)ノコトヲ論セン
トス蓋財政ニ於テハ尋常一私人ノ經濟ニ反シ先ツ需用ヲ了知シ之ニ
要スル支出ヲ計リ而シテ後之ヲ給足スルニ必要ノ資料ヲ確定ス之ヲ
別言スレハ其ノ収支ヲ確定スルニ際シ必ス支出ヲ前キニスルカ故ナ
リ

歳出論ハ元來財政學ニ於テ僅ニ其ノ一小部分ヲ占ムルノミ此ノ學ノ
目的タル國家ノ需用ハ如何ニシテ之ヲ給足スヘキヤ又如何ニセハ最
良ク之ヲ給足スルヲ得ヘキヤヲ示スニ過キス財政學ハ素ト歳出其ノ
物ノ要否及其ノ法律上ノ適否若ハ其ノ得失等ニ關シ詳細ノ判斷ヲ下

スヘキコアラヌ國家ノ需用ヲ確定スルハ經費ヲ要スル當該行政部局ノ任トシ其ノ要否得失等ヲ判斷シ且其ノ給足ヲ是認スルハ法律上殊ニ之カ爲ニ定メラレタル當局者ノ任トス而シテ學術上之ヲ講究スルハ憲法學、國法學、行政學及經濟學ノ諸科ナリ夫歲出ノ詳細ハ此ノ諸學科ニ讓ルヘシト雖左ニ記スル三個ノ理由アルヲ以テ茲ニ其ノ大要ヲ略論セサルヲ得ス

第一 國家ノ需用ハ國家ノ經濟全體ノ一部分ニシテ財政ハ之ヲ給足スル事務ノ實行ナリ而シテ財政學ハ之ヲ給足スルノ方法ヲ研究スルモノナルカ故ニ少ナクモ其ノ大體ニ通スルヲ緊要トス

第二 財政學ハ常ニ國民ノ資力ニ注意スルコトヲ怠ルヘカラス其ノ資力ノ消長ハ多少歲出ニ影響ス故ニ財政學ニ於テ最緊要ナル歲入論ハ歲出論ト相互ニ分ツヘカラサルノ關係アリ

第三 例ヘハ歲出ニ經常ト臨時トノ類別アルカ如ク經濟上ニ於テ特ニ必要ノ關係アリ且之ヲ給足スル資料ノ種類ト密接ノ關係アルヲ以テ殊ニ注意ヲ要スル歲出ノ種類アリ

二 國家歲出ノ定義及其ノ額

第十七章

國家ノ歲出トハ國家ノ需用ヲ給足スル爲其ノ權限アル官衙ニ於テ拂出ス所ノ總テノ支出ヲ云フ

總テノ支出額ヲ稱シテ客觀的ニ經費ト云ヒ又主觀的ニ需用ト云フ

第十八章

夫國家ノ歲出ハ絶對的ニ於テモ亦比較的ニ於テモ現ニ益增加ニ傾ケルハ歴史ニ徴シテ灼然タリ是文化ノ進ムニ從ヒ顯然若ハ冥々裏ニ國民ノ國家ニ要ナル所ヲ増加シ且文化ノ進度愈高尙ナルニ從ヒ益新タ

ナル共同ノ需用アルヲ知ルト共ニ一方ニハ國民ノ經濟益隆興シ其ノ増加スル所ノ支出ニ應スルノ力ヲ得ルニ由リテ來ルモノナリ然レトモ歳出ノ増加ハ其ノ何タルヲ問ハス必シモ之ヲ獎勵シ得ヘキニアラス其ノ法律政治及經濟上ノ關係ニ於テ毫モ間然スヘキ理由アルヲ認メサルモノニ限ルハ固ヨリ言フ俟タサルナリ

三 法律政治及經濟上ノ關係ニ於ケル國家ノ歳出

第十九章

公共ノ歳出ニ對シテ法律上ノ關係ヨリ論究シ其ノ要否得失等ヲ判斷スルハ概テ財政學ノ範圍ニアラス專ラ國法學及政治學ニ屬ス故ニ唯茲ニハ其ノ要點ヲ略述スルヲ以テ足レリトス

法律上ヨリ歳出ノ要否得失等ヲ判斷セント欲セハ左ノ諸點ニ注目セサルヲ得ス

第一 歳出ヲ要スル事項ハ其ノ自體ヨリ之ヲ觀ルモ他ノ需用トノ比較上ヨリ之ヲ察スルモ皆以テ有益ナリトスルヲ得ヘキコトヲ要ス新タニ歳出ヲ要スルモノアレハ必ス先ツ之ヲ既ニ存スル所ノ歳出ニ比照シテ其ノ要否ヲ審査セサルヘカラス故ニ之ヲ審査スルニ當タリ更ニ自餘ノ歳出モ亦皆便宜ニ適シ居ルヤノ間ヲ生スヘキナリ

第二 需用ノ普及即之ヲ別言セハ國家ノ歳出ハ其ノ疆土ヨリ之ヲ觀ルモ社會ノ等級ヨリ之ヲ察スルモ一般ニ分配スルヤ否ノ問題ニシテ前者即疆土ノ点ニ於テハ一國ノ中央ハ他ノ地方ニ比レテ其ノ利益ノ大ナルコトハ數ノ免ルヘカラス所ナレドモ中央ノ爲ニスル歳出ト他ノ地方ノ爲ニスル歳出トハ至當ノ比例

ヲナスコトヲ要シ後者即等級ノ點ニ於テハ總テノ等級ニ列スル人民カ歳出ニ依リテ得タル貨財ノ一部分ヲ各應分ノ比例ヲ以テ收得スルヲ要スルモノトス

第三

國家ニ於テ需用ヲ給足スルノ必要即其ノ需用ハ他ノ方法(一個ノ行爲又ハ隨意ナル結社ノ働作)ニ依リテ充分ニ之ヲ給足スヘカラサルコトヲ明カニセサルヲ得ス故ニ公權ハ左ノ事項ニアラサレハ之ヲ擔理スヘカラス

- (イ) 護國又ハ司法事務ノ如ク其ノ性質上ヨリシテ一私人カ權力ノ及フ所ニアラサルモノ又ハ度量衡制度及郵便電信事業ニ於ケルカ如ク公共ノ秩序安寧ノ爲公權ノ擔理ニ屬スルヲ必要トスルモノニシテ即一私人ノ處理ニ任カス能ハサルモノ
- (ロ) 鐵道事業ノ如ク一ツノ專占業トナルノ弊恐クハ避クヘカラ

サルカ故ニ國家ノ事業トシテ實行スルコトヲ要スルモノ即之ヲ公權ノ擔理事業トナストキハ單ニ一個ノ射利ヲ目的トスル一私人若ハ一會社ノ業トナスニ比スレハ其ノ利益ヲ收ムルコト多ク且人民一般ノ便利トナルコトモ亦多キカ故ヲ以テ一私人ヲシテ處理セシムヘカラサルモノ

- (ハ) 一私人ニ於テ須要ノ思慮團結心又ハ資金ヲ有セサルカ爲ニ之ヲ處理スルヲ欲セサルモノ

第四

國家ノ利行ト人民ヨリ徴セタル費用トノ比例ハ至當ナルヲ要ス蓋一方ニハ人民ノ義務トシテ國家ノ利行ヲ利用セサルヲ得サルノ性質アリ一方ニハ其ノ利行ニ對シテ人民ヨリ徴スヘキ報償ヲ專定スルノ力アリ之ニ由リテ自然其ノ分配ヲシテ尙更容易ニ失當ヲ大ナラシムルノ傾向アリ

夫各個人ト國家間又國家ト他ノ政治的團體間ノ經濟上ノ權限ヲ分界スルハ頗困難ナル事ニシテ今日ニ至ルマテ未タ其ノ論定ヲ見サル所ノ問題タリ而シテ此ノ問題ノ重モナル部分ハ既ニ確定セル目的ヲ達スルニ如何ナル方法ヲ以テセハ最可ナルヤヲ講セントスル所ノ財政學ニ屬セス却リテ社會及政治ニ關スル諸學科ニ於テ之ヲ講究スルノ要スルハ再茲ニ明言シ置カサルヲ得ヌ

第二十章

政治上ノ關係トハ財政ト憲法及行政トノ關係ヲ云フモノニシテ要ムルニ政治組織ノ良否ハ財政ノ良否ニ影響シ又財政性狀ノ如何ハ政治組織ノ如何ニ關係ヲ及ホスモノナルヲ知ラサルヘカラス
特ニ注意ヲ要スル原則三アリ即左ニ之ヲ掲ケン

第一 歳出ハ其ノ資金ヲ辨スルノ義務アル者即納稅義務者若ハ其ノ

代理者ノ承認ヲ受クルヲ要シ以テ其ノ國家及其ノ他ノ團體ヨリ受ケントスル所ノ利益ノ大小ト之ヲ受ケ得ルカ爲ニ徵求セラレタル出金ノ多寡トヲ比較スルコトヲ得セシムヘシ

第二 納稅義務者ノ承認ヲ經タル金額ヲ支出スル官衙ハ之ヲ上司官衙ノ監督ニ屬セシメ又ハ他ニ其ノ獨立ナルコトヲ充分ニ保スルノ制ヲ具ヘサルヲ得ヌ

第三 豫算即毎年ノ歳入歳出ヲ確定スル定期財政法律並ニ之ニ關係セル議事及之ヲ議スルノ權限アル會議ノ議事ハ可及的之ヲ公ケニスルコトニ注意スルヲ要ス蓋人民社會需用ノ給足ヲシテ益完全ナラシメ且支出ノ急不急ヲ精確ニ監査シテ最必要ナル保證ヲナスハ其ノ費用ノ全體ヲ知リテ之ヲ討究スルニ在ルヲ以テナリ

第二十一章

國家歳出ノ經濟上ノ關係即人民各自ノ經濟ニ對スル其ノ關係如何ヲ論スルニ當タリテハ先ツ左ノ二個ノ正反對ナル謬説ニ陷ルコトヲ防カサルヘカラス

其ノ一説ニ曰ハク公共ノ歳出ハ内國ニ於テ之ヲ仕拂フ以上ハ其ノ何種ナルヲ問ハス皆常ニ有益ナリ良シヤ有益ナリトスヘカラサルモ伏シテ其ノ害アルヲ見ス何トナレハ歳出供給ノ目的ヲ以テ納稅者カ租稅等トシテ仕拂ヒタル金錢ハ國家若ハ其ノ他公共ノ團體カ要スル所ノ製造物ヲ供給セシ者又ハ勞力ヲ供給シタル者カ受クル所ノ雇賃、俸給、報酬及益金トナルヲ以テ再納稅者ノ手ニ還歸シ來ルモノナレハノリト是謬妄ノ説ト云ハサルヲ得ス

抑歳出ハ其ノ目的ニ害ナキ以上ハ内國品ヲ使用シテ内國ニ利スルハ固ヨリ論ナキナリ例ヘハ公共ノ起業ヲナスニ際シ内國ノ製産品其ノ外國品ニ比シテ不良ナラス且其ノ價モ不廉ナラサルニ於テハ之ヲ内國ニテ仕拂ヘハ内國ノ工業上ニ利益ナルヘシ然レトモ一般ニ此ノ説ヲ批評セハ二種ノ謬妄ヲ兼有スルモノト云ハサルヲ得ス何トナレハ金錢ノ輸出ハ悉ク有害ナリト云フ舊重商學派ノ妄信ニ加ルニ納稅者ニ出タル金錢ハ再納稅者ニ還戻スヘシトノ謬見ヲ以テセシモノナレハナリ見ヨ人民ノ爲ニスル公共ノ歳出ハ實際人民カ仕拂ヒタルト同一ノ比例ヲ以テ其ノ金錢ヲ人民ノ手ニ還戻シ得ヘカラス否ナ之ヲ還戻シ得ルノ道理モ亦之レナカルヘシ却リテ其ノ金錢ヲ以テ國家カ利行ヲ興スモ而カモ各個人各自ニ其ノ利行ヲ利用スルノ比例ハ各租稅トシテ仕拂ヒタル金額ノ比例ト全ク異ナルハ毫モ疑ヲ容ルヘカニサルニアラスヤ

他ノ一説ニ曰ハク公共ノ歳出ハ皆一私人ノ收入ヲ減殺シ之ニ依リノ一國民經濟上ノ活動ニ不利ヲ生スルモノナリ故ニ經濟上ニ害アリト是レ亦實ニ極端ノ説ト云ハサルヲ得ス

此ノ説ヲナスノ輩ハ歳出中有害ノ結果アルモノ必シモ之レナキニノヲサレトモ其ノ公共ノ歳出ヲ有益ニ使用スルトキハ之カ爲ニ生スル所ノ公共ノ利益ハ一私人ノ收入ニ減少ヲ來シタルニ因生スル所ノ害ヲ價フニ餘リアルコトヲ全ク忘却シタルモノナリ

夫國家ノ歳出ハ素ト歳出其ノ物ノミニ就キテ絶對的ノ考察ヲ下シ以テ其ノ得失ヲ論シ得ヘキモノニアラス蓋財政ニ於テモ一般ノ經濟ニ於ケルカ如ク生産的ノ効用アル經費即人民社會ヲシテ更ニ進歩セシムルノ能力ヲ有スル費用ニアラサレハ固ヨリ之ヲ至當トナスヘカフサルナリ之ニ由リテ之ヲ觀レハ歳出ハ其ノ費用ヲ給足スルニ要スル

所ノ租税ノ爲一私人カ資本ノ創成ヲ枉害スルマテモ増加スヘカラス况ヤ其ノ財産資本ヲ傷ツケ復其ノ増加ヲ謀ルコト能ハサルニ至ラシムヘカラサルヤ明ナリ然レトモ亦一ニ各個人ノ納稅義務ヲノミ是レ輕カラシメント欲シ置リニ節儉ヲナスモ固ヨリ國家ノ長計ニアラス願フニ國家ハ幾何マテノ歳出ヲ至當トスルヤ又國家需用ノ國民ノ收入ニ對スル至當ノ比例ハ何等ノ點ニアルヤ之ヲ一般ニ定ムルコト固ヨリ至難ナリ何トナレハ其ノ歳出ヲ國民貧富ノ程度ニ比較シ而シテ他ノ公共團體ノ爲ニ要スル費用ノ多寡ヲ顧ミ且深ク其ノ歳出ヲ以テ達セントスル所ノ目的ヲ觀察スルコアラサレハ之ヲ知ルヘカラサレハナリ然レトモ細カニ此ノ比較ヲナシ之ニ依リテ其ノ歳出ハ必ス一般ノ利益トナルヤ否ヲ確實ニ判斷スヘキコトモ亦極メテ難事トモ其ノ之ヲ難事トスル所以ハ各個人ノ國家ニ仕拂フ所ノ租税及國家カ社

會ノ爲ニ使用スル所ノ歳出ノ總額ハ共ニ計數ヲ以テ之ヲ確定比算ヘルヲ得ヘシトスルモ唯其ノ國家ノ報價ハ主トシテ無形ノ貨財ナルノ以テ其ノ價值ハ貨幣ノ單位ニ還原シテ計ルヘカラサレハナリ

四 歳出ノ類別

第二十二章

抑歳出ヲ要スル各種ノ主體ノ價值ヲ判斷スルハ財政學ニ於テ最近ノ目的トセス故ニ憲法及行政ニ關係スル點ヨリ之ヲ講究スルコトヲナス單ニ國家ノ需用ヲ類別スルヲ以テ足レリトスヘシ
凡國家ノ需用ヲ類別スルニ最重モナル標準ハ需用ノ狀形需用ヲ生スル場所及時經濟上ノ作用財務ノ關係及其ノ實用ノ目的ナリトス左ニ之ヲ述ヘン

第二十三章

需用ノ形狀ニ據リテ論スルトキハ之ヲ分チテ物件需用及人事需用トナスヘシ

第一 物件需用トハ國家ノ必要トスル所ノ物件的ノ貨財ヲ收得スル爲ニ要スル支出(即動産不動産ノ自製、買得、借用等ニ要スル費用)ヲ總稱ス抑物件需用ニ關シテハ國家ハ此ノ需用ニ充ツル物件ヲ自ラ生産スルヲ是トスルカ又如何ナル程度ニマテ之ヲ生産スルヲ是トスルカノ問題アリ然レトモ國家ノ需用ニ供スヘキ物件ハ概テ之ヲ市場ニ求メテ充分ノ供給ヲ得ヘシ且夫官中ハ國家ノ事ニ就キテハ自然自己一身ニ其ノ利害ヲ感覺スルコト少ナキト官府ニハ上下隸屬ノ秩序アリテ伺届、指令、監督等ノ方法ヲ行フカ爲ニ常ニ業務ノ澁滯及時間ヲ喪失スルコト彼ノ一人ノ所爲ニ比シ極メテ大ヒナルヲ以テ國家自ラ物件ヲ生産

セントスルトキハ必ス亦一私人ノ生産ニ比シテ其ノ要費多キヲ常トス故ニ國家ハ自ラ生産ノ業ヲ執ラサルヲ以テ本旨トシサルヘカラス若夫一私人タル營業者ニ於テ必需ノ物件ヲ産出スル能ハサルカ又ハ特ニ民間ノ製造所ニ於ケルヨリモ廉價ニシテ自ラ産出スルヲ得ルカ如キコトアラハ固ヨリ之ヲ自製スルヲ不可トセサルナリ

第二

人事需用トハ文武官吏ノ勞力ニ報ユルヲ目的トシタル支出ヲ總稱ス其ノ多寡及種類ハ政體(庶民政治、君主政治等)行政機關ノ組織及軍制(徵兵、民兵等)ノ如何ニヨリ異ナリトス夫官吏ニアラサル者ノ受クル所ノ給料ハ(其ノ給額及其ノ他業務上ノ關係ヨリ論スルトキハ假令其ノ者カ官吏ト格別ノ差等ナキ歎待ヲ受クルノ場合アルニモセヨ)多クハ尋常ノ雇工錢ニ

類シ之ヲ官吏ノ俸給ニ比スレハ大ニ異別アリ今其ノ異別アル所ヲ摘示センニ官吏ノ勞力ニ對シ最大ナル購買者ハ即國家ニシテ其ノ國家ニアラサレハ全ク之ヲ要セサルノ類極メテ多シ是ヲ以テ其ノ購買者ニ競争アルコトナク亦其ノ買價モ概テ隨意ニ平均勞力ノ價值ヲ評量シテ之ヲ定ムルヲ得且俸給ノ等級ヲ進ムルニ幾分ノ例外ヲ除クノ外ハ皆一定ノ順序ニ據リテ之ヲ行フモノナリ而シテ官吏ハ久シク學業ヲ豫修シ試験ヲ受ケ且往々數年ノ間無給ニシテ事務ヲ見習フ等ノ必要アリ是皆其ノ一個ノ官吏トナルニ至ルマテ要スル所ノ自費ヲシテ增多ナラシムルノ原因トナルモノナリ故ニ其ノ他者ニ比シテ稍多額ノ俸給ヲ受クルノ理アリトス然リト雖他ノ一方ヨリ之ヲ論スレハ官吏ハ其ノ豫備ノ學業ヲ修メ而シテ後事務ヲ見習フ上ハ

永遠ニ就官シ且其ノ職ヲ罷ムルノ後ハ待命給又ハ恩給ヲ受ケ
其ノ死後ハ寡婦孤兒救恤金ヲ受クルノ權利アリテ平常受クハ
所ノ俸給ヲ低減スルノ起因トナルヘシ夫斯ノ如キヲ以テ實際
ノ場合ニ於テハ義務ト利益トノ比例ヲシテ能ク其ノ當ヲ得ヒ
シムルユアルノミ俸給ハ右ノ如クナルモ尙其ノ他ノ給與ヲ定
ムルニ於テ最困難ヲ感スルモノアリ即官吏ノ恩給及其ノ遺族
救恤金ノ額ヲ正當ナラシムルコト是レナリ

第二十四章

前章述フル所ノ類別ノ外需用ノ形狀上尙之ヲ分チテ現品需用(即國家
カ人民ヨリ現品ヲ供給セシムルノ需用)及金錢需用(即國家カ金錢支出
ヲ給足スル需用)トス此ノ現品需用タル在昔現物經濟ノ時代ニ於テハ
專ラ之レアリシト雖今日ニ至リテハ全ク之ヲ規外ノコトトス蓋現品

需用ト雖深ク之ヲ考察スルトキハ其ノ實概テ金錢需用タルニ外ナラ
ナルナリ

第二十五章

歳出ノ仕拂ヲ要スル場所ニ就キテハ之ヲ左ノ二種ニ類別ス

第一 國外歳出例ヘハ外國ノ債主ニ仕拂フ國債利子ノ如ク外國ニ向
ヒテナスヘキ仕拂是ナリ

第二 國內歳出即本國ノ疆土内ニ於テナスヘキ仕拂是ナリ

第二十六章

歳出ノ仕拂ヲ要スル時ニ就キテハ之ヲ左ノ二種ニ類別ス

第一 經常需用即一定ノ期限毎ニ規則正シク生スル所ノ需用ニシテ
其ノ額ニ於テハ異動アルニセヨ支出ヲ確定スル時毎ニ(毎年度
豫算ニ)必ス顯ハル、モノナリ

第二 臨時需用即其ノ額ノ一定セサルハ勿論期限ヲ定メテ生スルニ

アラサル需用ヲ云フ

抑此ノ類別ハ會計年度ノ必要アルニ因生セルモノナレハ需用ヲ分チテ豫期及不期トナスノ類別ト同一ナルモノトナス勿キヲ要ス蓋歳出ハ必シモ皆其ノ額ヲ豫知シ得ヘキニアラス又臨時歳出ト雖必シモ悉ク不意ニ生スルモノニアラサレハナリ

其ノ他尙一種ノ異ナリタル點ニ由リテ之ヲ類別スルコトアリ即一會計年度中ニ於テ社會ノ目的ニ完用スル支出ヲ經常歳出トナシ數年跨涉スルモノヲ臨時歳出トナスコトアル是ナリ

第二十七章

經濟上ノ作用即經濟上ニ於テ生スル所ノ結果ニ依據スルトキハ需用ヲ分チテ左ノ二種トス

第一 生産的需用例へハ鐵道官領地ノ如キ國家カ一私人的ノ經濟敗

營ニ支出ヲナストキハ直接ノ生産ヲナシ又支出ニ據リテ國民ノ能力及富ヲ増進スルトキハ間接ノ生産ヲナスヘキモノ是ナリ

第二 不生産的需用即軍需費及非職官俸給等ノ如ク國家ノ收入ヲ増加シ又ハ國民ノ經濟ヲ富實ナラシムルノ原因トナラサル歳出是ナリ

第二十八章

財務ノ關係即財政事務ノ點ニ依據シテ歳出ヲ類別スルトキハ之ヲ徵收費(營業費)及本來ノ政務費ニ分ツヘシ徵收費(營業費)トハ即收入ヲ徵收シ之ヲ取得スルニ必要ナル歳出ナリ故ニ往々巨額ノ生産費ヲ要スル所ノ一私人的營業上ノ財源ニ歳入ノ多分ヲ仰キ又ハ關稅ノ徵收ニ

許多ノ費用ヲ要スル國ニ於テハ此ノ種ノ歳出最多ニ是ヲ以テ之ヲ觀レハ徵收費ハ其ノ目的ヲ達スルノ手段タルニ過キスシテ政務費ハ目的即其ノ物ナルヲ知ルヘシ

第二十九章

其ノ實用ノ目的ヨリ之ヲ分ツトキハ其ノ類別法各國憲法上及行政上機關ノ組織如何ニヨリテ一様ナラサルヲ以テ其ノ名稱モ亦皆之ヲ異ニセリ故ニ今單ニ普通ナル類別法ヲ左ニ舉クヘシ

甲種ハ憲法ノ明文ニ起因シテ要スル所ノ歳出ナリ之ヲ分チテ左ノ二種トス

第一 國家ノ首長帝王若ハ共和國大統領ノ爲ニ要スル歳出此ノ種ノ歳出ハ秩義ヲ以テ稱スル所ノ國主費是ナリ其ノ他君主國ニ於テ皇族ノ爲ニ要スル歳出アリ則廣義ヲ以テ稱スル所ノ國主費

是ナリ

第二 議院ノ爲ニ要スル歳出即代議士ノ日當議院ノ建物庶務員又ハ印刷ニ關スル費用等是ナリ

第三 内閣參事院等ノ如キ普通一般ノ事務ニ當ル所ノ最高等官衙ノ爲ニ要スル歳出

乙種ハ行政上ニ要スル歳出ナリ之ヲ分チテ左ノ五種トス

第一 外務費公使館領事館等ノ爲ニ要スル歳出モ亦此ノ種ノ費用ニ屬ス蓋小國ニ在リテハ外務省ニ於テ尙此ノ他ノ政務ヲ兼ヌルコト稀ナラス

第二 陸海軍費此ノ行政ニ關スル人事費及物件費ノ多寡ハ軍隊ノ組織及兵制疆土ノ位地政治上ノ關係又ハ内外ノ治亂等ニヨリテ差異アルコト極メテ大ナリ

第三 司法費、即本省、裁判所、監獄及處刑執行場ニ關スル歲出是ナリ

第四 內務費之ヲ細別スレハ左ノ如シ

(イ) 宗教及教育費、即敎部、文部、本省、敎會、學校、普通ノ學藝、美術、獎勵ニ關スル歲出是ナリ

(ロ) 衛生費、即最高等ノ醫務官衙及之ニ屬スル諸設營ノ爲ニ要ヘル歲出是ナリ

(ハ) 國民經濟ノ振興ニ關スル費用、但此ノ事項ニ係ル行政ハ數種ノ部局ニ分レ往々獨立ナル一省ヲ置キ其ノ事務ヲ處理スルモノアリ、即農業、交通事業、商工業等ノ如シ

(ニ) 警察費、即中央及地方警察廳、憲兵隊、懲治監等ニ關スル歲出是ナリ

第五 財務費、即本省、官領地及森林事務、租稅及關稅、國債並ニ決算事務

ニ關スル歲出是ナリ

抑各省各部局課ニ依據シテ歲出ヲ類別スル實際慣用ノ法ハ既ニ前モ明言シタルカ如ク各國皆一樣ナラス之ヲ要スルニ其ノ類別ハ各國歷史上ノ習慣國ノ大小、政體ノ異同等ニヨリテ定マルモノト知ルヘシ

第二編 歳入論

歳入ノ定義及類別

第三十章

國家ノ歳入トハ國家カ其ノ支出ヲ辨給シ需用ヲ満足スル爲ニ徵收ヘル所ノ收入ヲ謂フ之ヲ分チテ經常及臨時ノ二種トス
抑此ノ類別ハ歳出ヲ分チテ經常及臨時ノ二種トナスニ同シク規則止シキ會計年度ヲ定ムルノ必要ト豫メ財政ノ定案ヲ立テ之ニ準據シテ財務ヲ實行スルノ必要ト起因スルモノニシテ經常歳入ハ每會計年度ニ於テ規則正シク徵收シ臨時歳入ハ臨時ノ歳出ヲ給足シ又ハ收入ノ支出ニ對スル不足ヲ補充スルヲ目的トシテ之ヲ徵收スルモノナリ
夫苟モ財政ノ整然タランコトヲ欲セハ經常歳出即一定ノ期限毎ニ永久繼續シテ生スル所ノ支出ハ亦一定ノ期限毎ニ永久繼續シテ徵收ス

ルノ見込確定スル所ノ歳入ヲ以テ之ヲ辨給シ又期限ヲ一定セスシテ生スル所ノ臨時歳出ハ各個ノ場合ニ於テ殊ニ其ノ性質及多寡ニ適合セル資金ヲ求メテ之ヲ辨給セントコトヲ計畫スルヲ緊要ナリトス但本編即此ノ歳入論ニ於テハ唯其ノ經常歳入ノミヲ論究スヘシ其ノ臨時歳入ハ便宜ノ爲歳入出ノ關係ヲ論究スルヲ目的トセル第三編ニ至リテ之ヲ論セントスルヲ以テナリ

第三十一章

經常歳入ヲ分チテ左ノ二種ニ大別ス

第一 營業收入即一私人的ノ營業ニヨリテ生スル收入是ナリ

第二 貢納(最廣泛ノ意義ヲ以テ謂フ)之ヲ細別シテ左ノ二種トス

(イ) 貢納(嚴狹ノ意義ヲ以テ謂フ)即手數料及租稅是ナリ

(ロ) 科料罰金及出合金

第一款

營業收入ノ定義及類別

第三十二章

營業收入ハ國家又ハ自治體カ一私人的ノ資格ヲ以テ射利ノ爲經理スル公共ノ財産及工商等ニ關スル營業ヨリ生スルモノニテシ此ノ収益財産ノ利益收得管理及沽賣ノ方法ニ關シテハ私法上ノ通則及自由競争ノ制ニ由ルモノトス

右ノ如キ収益財産トナルヘキモノ二種アリ

第一 官領地即農地及森林並ニ之ニ附屬スル經濟上ノ事業又ハ收益ヲ生スル權利(麥酒製造、煉瓦製造、鳥獸獵又ハ魚漁ノ權利等)

第二 工商ニ關スル營業即採鑛場、印刷局、飾壁紙又ハ陶器製造等ノ如キハ工業ニ屬シ銀行、鐵道、郵便電信等ノ如キハ商業ニ屬ス

第三十三章

五十六

又國有財産ト稱スルモノアリ此ノ定義タル之ヲ前條收益財産ノ定義ニ比スレハ稍廣汎ナリ、何トナレハ國有財産ハ收益財産ノ外單ニ財産ノ價格ヲ備フルノミニシテ、毫モ收益ヲ生セザル所ノ財産ヲモ亦包有スルヲ以テナリ、其ノ收益ナキ財産ニハ家屋、武器、馬匹、家具、書籍等ノ如ク變更シ且賣却スルヲ得ヘキモノト道路、溝渠、城塞等ノ如ク不變ニシテ且賣却シ得ヘカラサルモノト別アリ、

又財政上ノ專占業ト稱スルモノアリ、此ノ專占業タル前條一私人的ノ資格ヲ以テ經理スル收益設備ト異ナリテ國家カ全ク私法上ノ通則及自由ノ競争ニ制セラル、コトナク以テ國內普通ノ收益ヨリモ稍多額ナル純益即租稅ト看做スヘキ利益ヲ收ムルノ目的ヲ以テ經理スル所ノ射利ノ事業ヲ謂フナリ

又國家ノ專占權ヲ以テ經理スル一定ノ公共制度ニ由リ又ハ公益ノ爲ニ國家自カラ執行スル一定ノ所爲ニ報ヒシムル爲ニ國家カ徵收スル收入アリ之ヲ行政上ノ收入ト謂フ、抑此ノ種ノ收入ハ手数料ト稱スルモノニシテ種々ナル行政部局ニ於テ往々之レアリ然レトモ是全ク一私人的ノ資格ヲ以テスル射利ノ目的ニ出ツルニアラスシテ唯或ル人民等ノ爲ニ利益ヲ計ルニ由リテ生シタル支出アルニ對シ此ノ支出ノ一部分若ハ全部ノ償還ヲ得ルヲ主眼トナスモノナリ故ニ之ヲ以テ營業收入ト混視セサルヲ要ス。

第一節 官領地(農地及森林)

一 農地ノ管理

第三十四章

凡農地(嚴狹ノ意義ヲ以テ謂フ所ノ官領地)ヲ管理スル方法ハ自己管理

保證管理又ハ貸下ノ三種アリ、其ノ貸下法ニハ定期貸下ト世襲貸下トノ二法アリ、

其ノ自己管理法ニ在リテハ確定セル俸給ヲ受クル所ノ官吏ヲ任用シ之ニ營業ノ取扱ヲ委任シテ所有者即國家自ラ生産及生産物販賣ニ關スル業務及危険ヲ擔當スルモノニシテ近頃マテハ此ノ法專ラ行ハレタリ

抑此ノ法タル皮相上之ヲ觀ルトキハ其ノ營業ニ生スル利益ハ舉テ所有者即國家ノ所得ニ歸セシムルカ如キ趣アリト雖其ノ實大ニ其ノ不利ナキヲ免レヌ農地ノ管理ニ在リテ殊ニ其ノ然ルヲ覺フ不利トハ何ソヤ乃確定セル俸給ヲ受クル所ノ管理者即官吏カ自己一身ニ利害ヲ感スルノ精神ニ乏シキト其ノ業務ヲ執ルニ際シ秩序ニ拘泥シ事々自ラ顧慮ニシテ敏捷ナラス且隨ヒテ冗費ヲ要シ其ノ甚シキニ至リテハ

管ニ利益ヲ生セサルノミナラス却リテ爲ニ損失ヲ蒙セルコト往々之レナキヲ免レサル所ノ官衙ノ風習アルトニ因由シ其ノ弊害ヲシテ農業ノ進歩スルニ隨ヒ益大ナルニ至ラシムヘシ、蓋農業ノ集約的ニ趣ニ隨ヒ官衙風ノ監督ハ次第ニ不充分トナリ愈々其ノ營業ニ障礙ヲ加ヘ且國家ヲシテ其ノ資金ヲ備フルニ困難ナラシメ而シテ其ノ收穫ハ却リテ愈々不安全トナルヲ以テナリ。

第三十五章

其ノ貸下法中定期貸下法ニ在リテハ所有者即國家ハ概テ現金ヲ以テ仕拂フ所ノ小作料ニ代ヘテ土地ノ用益ヲ他人ニ放任シ其ノ營業上ノ危険ヲ免ル、カ故ニ實地稍多量ノ收益ヲ生スルヲ得ルモ悉ク之ヲ收得スルヲ得ヘカラス。

貸下法ヲ稱揚スルモノ、說ニ在リテハ抑土地ヲ管理スルニ此ノ法ヲ

用ユルトキハ所有者大ヒコ其ノ管理及之ニ關スル收支決算ノ事務ニ係ル費用ヲ節約スルヲ得ヘク收穫上最大ノ利害ヲ感スル所ノ一人ノ營業トナシ多ク自由ノ競争ニ附スルトキハ其ノ結果ハ必ス大ヒナルヘシ又小作料ノ額及之ヲ仕拂フヘキ期限一定シ所有者ニ取リテハ頗ル安全ニシテ不規則ナラス一般ノ利益上ヨリ云ヘハ收穫ノ總額及純額ヲ増加シテ公共ノ益トナル等ノ點ヲ舉テ以テ其ノ稱揚ノ論據トス貸下法ヲ非トスルモノハ曰ハク此ノ法ハ貸下者ト小作者トノ間ニ於テ利益上競争ヲ生スルコト容易ナリ即貸下者ハ務メテ其ノ所有地ヲ完良ナラシメントシ小作者ハ最大ノ收穫ヲ目的トシ他日ノ利害ヲ顧ミスシテ契約ノ存スル間ニ可及的土地ヲ利用セントス之カ爲雙方ノ間ニ種々ノ爭議ヲ生スルコトアリ且或ハ又小作者ト其ノ契約ヲ締結スルノ任アル官吏トノ間ニ於テ竊カニ貪欲ナル約束ヲナスコトナ

キヲ保セスト

貸下法ニ關スル是非ノ論夫斯ノ如ク二利アレハ亦一害アルハ洵ニ數ノ免レサル所ナリ然リト雖今此ノ利害ヲ比較シテ之ヲ考フルトキ其ノ缺典トナスノ點ヲ以テ之ヲ稱揚スルノ說ヲ論破スルノ理由トナスニ足ラス況ンヤ種々ナル豫防法ヲ設ケテ幾分カ其ノ缺典ヲ補足ヘルノ路アルニ於テヤヤ請フ今其ノ豫防法ニ規定スヘキ條項ヲ舉ケル小作人ノ選定、貸下ノ期限、土地ノ大小、小作料仕拂ノ保証及營業ノ方法ハ皆規定ヲ要スルモノニシテ小作人ハ各其ノ場ノ便宜ニ任セ隨意矣約法又ハ競争法ニ據リテ之ヲ選定スルヲ得ヘク貸下期限ハ方今ニ至リテハ随分永ク定メ小作人ヲシテ土性改良ヲ實行シ且其ノ利ヲ收ムルニ足ルノ歲月ヲ與フヘク土地ノ大小ハ各地方ノ需用ト小作人ノ所望トニ由リテ之ヲ定ムヘク小作料ヲ精確ニ仕拂フヘキ保証ハ身元保

証金ヲ納付スルノ義務ヲ負ハシムルニ由リテ其ノ目的ヲ達スルヲ通
法トスヘク又營業ノ方法ニ關スル規定ハ細密ニ失スルコトナクシテ
營業上願小作人ノ自由ヲ箝制セサルヲ要スヘシ其ノ他小作料ノ種類
小作料免除財産目錄等皆之ヲ規定スヘキナリ。

第三十六章

前章ノ定期貸下法ト大ニ其ノ趣ヲ異ニセル世襲貸下法ニ在リテハ最
初ニ一度仕拂フヘキ世襲借受料及年々仕拂フヘキ世襲小作料ニ代
土地ノ用益權ヲ世襲ニ小作人へ放任スルモノニシテ此ノ法ハ實際
行ハル、コト甚タ稀ナリ
抑世襲貸下法タル總テノ義務及維持費ヲ小作人ニ負擔セシメ所有者
ヲシテ唯確實ナル歳入ヲ得セシムルノ利一アルノミニシテ世襲借受
料及世襲小作料ハ土地ノ實價ニ相應セス且金錢ヲ以テ世襲小作料ヲ

定ムルトキハ金錢ノ價格低減スルト同時ニ土地ヨリ生スル収入ノ數
分ヲ損失スルノ不利アルヲ以テ單ニ之ヲ財政上ヨリ論スルトキハ頗
之ヲ良法トナサス故ニ敢テ勸奨スヘキモノニアラサルナリ。

然レトモ財政上ノ利害ニ關セス他ニ理由ノ存スルモノアルトキハ事
宜ニヨリ世襲貸下法ヲ總括セサルヲ得サルコトアルヲ忘ルヘカラハ
何ヲカ他ニ存スル理由ト謂フヤ曰ハク社會政略ニ關スル理由即其ノ
一ナリ蓋世襲貸下法ハ殊ニ官領地ヲ細分シテ人民ニ貸下ケ以テ農者
ノ地位ヲ鞏固シ且之ヲ維持スルヲ得ヘシ而シテ之ヲ世襲貸下ニ附ハ
ルカ爲ニ生スル毎年國家ノ損失ハ其ノ農業獎勵及社會政略ノ目的ニ
供スル間接ノ歳出ト見做シ且土地分配ニ對スル國家ノ勢力ヲ以テ之
ヲ償フニ足ルモノトスルヲ得ヘキナリ。

第三十七章

前ニ述ヘタル兩法即自己管理法ノ長所ト貸下法ノ便利トヲ併收スルヲ目的トシタル第三ノ方法アリ、保證管理法是ナリ、蓋此ノ管理法ニ在リテ之ヲ經理スルノ任アル官吏ハ概テ一定ノ俸給ヲ受ケ政府ニ對シテハ年々收益ノ最下額ヲ保証シ且其ノ額以上ニ收益ヲ生スルトキハ豫テ特ニ約定シアル歩合ヲ以テ之ヲ政府ト分配スルヲ則トス、故ニ此ノ名アルナリ、然レトモ從來ノ經驗ニ由レハ土地ヲ借受ケ之ヲ完全ニ經理スルニ足ルヘキ資金ト能力トヲ有シ且保證ノ額以上ニ生スル收益ノ全額ヲ要求スルコトアラシテ以テ其ノ保證ヲナスノ義務ヲ承諾スル所ノ起業者其ノ人ヲ得ルコトハ最難シトスル所ナリ

二、農地ノ拂下

第三十八章

夫官領農地ハ之ヲ自己ニ管理スルモ亦之ヲ貸下クルモ俱ニ其ノ弊一

ニシテ足ラス、是ヲ以テ最近國家及其ノ他公共ノ團體ハ農地ヲ拂下クルハ良策ニアラサルヤノ問題ヲ生セリ、而シテ財政、經濟及行政上何レノ點ヨリ之ヲ論究スルモ其ノ拂下ヲ以テ是ナリトス、

其ノ財政上ニ於テ之ヲ拂下クルヲ是トスルノ理由ハ官吏カ一己ニ利害ヲ感スルノ精神ニ乏シキ、業務ハ煩雜緩慢ニシテ且往復交通及收文計算ニ冗費ヲ要ス、官衙風ノ管理ハ往々改革ヲ行フコトアリ且其ノ上下隸屬ノ秩序アルカ爲ニ偶マ乘スヘキノ時機アルモ速ニ之ヲ利運スルヲ得サル其ノ一ナリ、定期貸下ニ於テ土地ノ性格ヲ下惡ナラシムルノ恐レアル其ノ二ナリ、世襲貸下ニ於テ收益ノ不充分ナル其ノ三ナリトス、

又經濟上ニ於テ之ヲ拂下クルヲ是トスル理由ハ他ナシ、國家ニ於テ廣大ノ土地ヲ領スルトキハ大ヒニ私有ニ歸シテ分割又ハ賣買ヲ自由ニ

スルヲ得ヘキ土地ヲ減少シ且之ニ由リテ集約的ニ經營シテ得ヘキ農業
 進歩ノ利ヲ收ムルヲ得サルニ在ルナリ、
 又政治ニ於テ之ヲ拂下シルヲ是トスルノ理由ハ政府ハ其ノ所有地
 ヲ管理シテ利ヲ收ムルニ汲々タルノ餘各個人及其ノ財産ヲ平等均
 ニ保護スルノ義務ヲ忘レ且經濟及政治上一私人ノ生活ニ關スル問題
 例ヘハ關稅ノ問題即關稅ヲ徵收スルノ多少ニ付キ一私人ト同シク其
 ノ利害ヲ感スルカ故ニ自然之ヲ處スルニ公直ヲ失スルノ恐ナキヲ保
 セス、加フルニ國庫ニ於テ土地ヲ管理スルトキハ官吏ノ數ヲ増加シ其
 間ノ起業者ヲ減少スルノ不利アル又國家ニ於テ廣大ノ土地ヲ有ス民
 トキハ政府ハ國會ノ豫算減額ヲナサントスルノ抗抵ニ對シ財政上ル
 ノ不及ヲ此ニ取ラントスルカ如キ思慮ヲ起サシムルニ頗ル有力ノ措
 屏トナスヲ得ルニ因生スル所ノ危險モ亦其ノ一理由ト云ハサルヘカ

ラス且夫戰時ニ於テ官領地ハ之ヲ私有地ニ比スレハ先ニ敵ノ毀損蹂
 躪又ハ賣却スル所トナルコト常ニシテ之カ爲經濟上ノ大害ヲ蒙ムル
 ヘシ常時ニ在リテハ其ノ土地ノ經濟ヲ爲ス者ニ對シ頻々法律上ノ爭
 議ヲ生スルノ弊モ亦之アルナリ
 而シテ其ノ拂下ノ直接ナル利益ヲ擧クレハ土地拂下金ヲ生産的ノ營
 業ニ用ユルヲ得ヘク又國債ノ一部ヲ償却スルニ之ヲ用ヒハ其ノ土地
 收益ノ些少ナルニ比シテ遙ニ多額ナル利子ノ仕拂ヲ免カル、ヲ得ル
 ニアルナリ

第三十九章

前説ノ如クナルヲ以テ其ノ土地ヲ定期貸下ニ付シテ充分ナル結果ヲ
 收ムヘカラス且之ヲ世襲貸下ニ付スルヲ必要トスル別段ノ理由ア
 ナルトキハ土地ノ拂下ヲ拒否スルコトヲ得サルヘシ然リト雖之ヲ拂

下クルニ當タリ必需ノ制限ヲ設ケスンハ却リテ最悪性ノ結果ヲ招ク
コトアリ是特ニ注目スヘキモノナリ今其ノ注目スヘキ要点ヲ擧クル
ハ即左ノ六件トス

第一 拂下クヘキ土地ノ選定及拂下ノ方法、一時ニ夥多ノ土地ヲ拂下クルヲ不可トス蓋供給多キニ過ソルトキハ之カ爲政府自市場ノ景況ヲ變動シテ不利ノ結果ヲ生シ加之一私人所有ノ地價ヲ下落セシムレハナリ

第二 拂下クヘキ土地ノ大小、土地ハ各其ノ國ノ需用ニ適シタル人サニ分割シテ之ヲ拂下タルヲ要ス

第三 拂下ノ時期、政治上平穩ニシテ國民ノ經濟繁榮シ比例的ニ地料ノ騰貴セル時ヲ以テ土地ヲ拂下クルトキハ其ノ價モ自ラ貴キノ理ナリ故ニ其ノ結果最良好ナルヲ得ヘシ又一且拂下

ノ方法失當ナリシカ爲損害ヲ生シタルニ當タリ之ヲ回復スルニ由ナキ時ハ殊更其ノ時期ヲ選フコト緊要ナリ

第四 買受人ノ選定、土地ハ廣濶ナル儘一括ニ之ヲ買受ケ更ニ之ヲ分割シテ資力ノ乏シキ需用者ニ賣渡シ以テ其ノ利ヲ獲ルヲ目的トスル會社等ニ之ヲ拂下ケスシテ可及的實際ニ土地ヲ使用スヘキ各個ノ買受人ヲ求メ之ヲ拂下クルヲ要ス

第五 賣買契約ノ精確ナル履行殊ニ代價仕拂ノコトニ關スル保証

第六 拂下ニ因リテ生シタル代金ノ使用、本件ハ最緊要ナルモノトス蓋土地拂下代金ハ臨時ノ収入ナルヲ以テ決シテ之ヲ經常支出ノ辨給ニ用ユヘカラス或ハ從來ノ國債ヲ償還シ或ハ新ニ國債ヲ募集スルニアラサレハ給足スヘカラサルカ如キ臨時ノ備用ニ用ユルヲ以テ最良シトス

以上論スルカ如キ原則アリト雖政府ハ一切農地ヲ所有シ之ヲ管理スヘカラストスルコアラズ一定ノ設置ヲ目的トスル土地例ヘハ農業試驗ノ用地ノ如キハ假令之カ爲ニ支出ヲ要スルモ必ス之ヲ維持セサルヲ得ス要スルコ斯ノ如キ土地ハ財政上以テ其ノ得失ヲ論スヘカラス專ラ國民經濟翼育ノ點ヨリ之ヲ論セサルヲ得ス而シテ之カ爲ニ生ル所ノ支出ハ行政費ニ屬スヘキハ勿論ナリ

三 森林

第四十章

農地ハ前數章ニ於テ細論シタルカ如ク特ニ反對ノ理由アルノ外ハ之ヲ拂下クルヲ以テ財政上其ノ利益アルモノトス故ニ好機ヲ見テ以テ之ヲ拂下クルゴトヲ勸奨ス然リ而シテ森林ニ在リテハ概シテ之ニ相反ス

森林經濟ニ關シテハ單ニ經濟及財政ノ上ヨリ之ヲ考察スルモ國家ノ之ヲ管理スル能力ハ一私人ノ能力ニ比シ既ニ優ル所ナキモ決シテ劣ル所アルヲ見サルナリ凡森林ノ栽培ハ重モニ疎薄性ナル比例的ニ營業資本及勞力ヲ要スルノ多カラサル森林ヲ永久ニ維持セントスルコハ永キ期限ノ爲ニ確定ノ秩序アル計畫ニ從ヒ其ノ經濟ヲ立ツルヲ要スル其ノ業ノ經營ハ特ニ一種ノ學識アルヲ要スト雖大體ヨリ云ヘハ稍簡單ナル播種又ハ挿植シテヨリ收穫ニ至ルマテ幾多ノ歲月ヲ要スル等ハ皆一私人ノ起業心ヲ満足スルニ餘地ナカラシムルモノナリ且國家ニ於テ之ヲ經理スルニ因生スル不利ハ之ヲ他ノ經濟上ノ事業ニ於ケルカ如ク著大ナリトセス否森林ニ在リテハ永存ノ性格アル國家又ハ其ノ他ノ政治的ノ團體ヲ以テ其ノ最適切ノ經理者トナスモノナリ

國民ノ經濟上ヨリ之ヲ論スルモ亦國家ニ於テ森林ヲ保持スルヲ必要トスル理由アルモノコシテ之ヲ保持シテ效果ヲ收ムルト否トハ固ヨリ國民ノ經濟ニ關スル政策如何ニ在リ之ヲ詳論スルモ亦經濟學ノ本分ナリト雖國家ハ森林ヲ所有スルコト通常頗ル多キモノナレハ茲ニ之ヲ略言セサルヲ得ス抑經濟上之ヲ保持スヘキ理由ハ第一國內ニ於ケル常時不動ノ木材需用第二森林ノ氣候及乾濕ニ對スル關係第三森林地トナスノ外他ニ使用スヘカラサル土地アルコトノ實驗是ナリ此ノ三種ノ理由アルヲ以テ古來政府ハ深ク自治團體若ハ一私人ノ所有スル森林ノ經理ニ干與シテ之ヲ監督シタリ然レトモ所有者ニ於テ森林學上須要ノ知識ヲ具ヘス且真心ヲ有セサルトキハ其ノ監督アルモ未タ以テ充分ノ目的ヲ達スヘカラス政府既ニ私有ノ森林ヲ監督スルカ爲數多ノ吏員ヲ要ス政府自ラ森林ヲ經理シ此ノ監督吏員ヲシテ

同時ニ其ノ業務ヲ執ラシメナハ經費ヲ要スル比例的ニ多カラサルヘシ是ヲ以テ土地不毛ニシテ森林地トナスノ外他ニ使用スヘカラサル時又ハ森林ノ保存ヲ緊要トスルニモ拘ラス其ノ保存ヲ一私人ニ依頼スヘカラサル時若ハ森林ノ荒蕪ハ民間ノ工業ニ在害ヲ來スノ恐アルモ他ニ之ヲ豫防スルノ策ナキ時ニ於テハ國家自ラ之ヲ保持シ若ハ之ヲ新ニ得有スルヲ以テ經濟上最勵獎スヘキノ原則トナスヘキナリ是ニ由リテ之ヲ觀レハ一方ニハ財政上森林ノ所有及其ノ經理ヲ不利トナスノ理ナク他ノ一方ニハ國民ノ經濟上曾ニ之ヲ不利トセサルノミナラス時アリテ之ヲ必要トス故ニ森林地ハ多額ノ收益ヲ獲ンルニ出テ且農業ヲ害スルコトナクシテ之ヲ他ノ目的例ヘハ農地ニ用ヒテ多量ノ利ヲ收得スヘキ時ユアラサレハ之ヲ拂下クルコトヲ慫慂セサルナリ

第四十一章

森林ヲ管理スル方法如何ノ問題ハ前章述フル所ニ據リテ既ニ明白ナルヘシ要スルニ自己管理ノ法ヲ以テ最善良トス蓋之ヲ善良トスルノ理由ハ其ノ森林ヲ國家ノ所有ニ歸スルヲ必要トスルノ理由ト同一ナリ若之ヲ貸下ケントセハ世襲貸下ニ付シテ尙可ナルヘキ歟其ノ定期貸下ハ森林經理ノ目的ニ背馳スルヲ以テ之ヲナスヘカラス又自己管理ノ方法ヲ取ラントセハ須ク森林學及森林行政ニ關スル諸原則ヲ遵守スヘキハ亦論ヲ待タサルナリ

第四十二章

所有地殊ニ森林地ニ關スル副生物ノ收入ハ其ノ地内ニ於テ獸獵及魚漁ヲナスノ權利ニ由リテ生ス而シテ此ノ權利ハ政府自カラ之ヲ實行スルニアラサレハ則之ヲ貸下シルヲ得ヘシ

第二節 作業及商業

一 採鑛及熔鑛

第四十三章

夫國家ノ採鑛場熔鑛場及製鹽場ヲ所有スルハ其ノ古代ヨリ傳ハリタル權利(鑛山特有權)ト其ノ土地所有權トニ起因スルモノナリ採鑛場熔鑛場及製鹽場ヲ保持スヘシト云フ者ハ是等ノ事業ヲ經理スルニ許多ノ資本ヲ要シ且其ノ經理ハ確乎タル成規ト數年ノ業ヲ期シタル計畫ニ據リテ之ヲナサ、ルヲ得ストノ理由ヲ舉ク又之ヲ拂下クルヲ是トスル者ハ曰ハシ其ノ純収概テ極メテ少ナク且之ヲ算定スルニ難クシテ其ノ額タル一定セス爲ニ不確實ナル原素ヲ財政豫算ニ加フルノ弊アリ加之其ノ生産物ヲ賣捌クニハ商人者流ノ行爲ヲ要スヘシ此ノ行爲ハ前節ノ既ニ說述シタル理由アルヲ以テ之

ヲ一私人ノ營業ニ委スルヲ良シトスト

昔日ニ於テハ財政上及經濟政策上國家ハ多ク採鑛場等ヲ所有スルヲ必要トスル理由或ハ之レアリシナラン然レトモ今日ニ至リテハ斯ル營業ヲ以テ國家行政ノ事務ヲ繁雜ナラシムルノ必要アルヲ見ス其ノ經濟政策ニ關スル諸點ハ法律及監督規則ヲ以テ其ノ目的ヲ保スルヲ得ヘク財政ニ關スル諸點ハ租稅及手数料ヲ以テ其ノ効果ヲ完クスルヲ得ヘシ是ヲ以テ斯ノ如キ營業殊ニ生産物ヲ收穫シ且之ヲ賣捌クニ最困難ナリトスル採鑛場ノ如キハ之ヲ拂下ケ其ノ代金ヲ以テ國債ヲ償却シ又ハ稍適當ノ事業ヲ興起スルヲ良シトス

抑採鑛場ノ拂下ハ其ノ賣買價格ヲ詳細ニ知了スルコトヲ得ヘカラサルノ故ヲ以テ殊ニ之ヲ實行スルニ難キハ勿論ナリ且夫毫モ其ノ採鑛ノ利益ヲ見サル營業ト雖實際之ヲ廢スルヲ好マサルコトアリ何トナ

レハ一旦之ヲ廢スレハ從來使用ノ資本ハ全ク畫餅ニ屬シ且工夫ハ其ノ業ヲ失ヒ爲ニ其ノ所在地從來ノ繁昌ヲ消滅シ更ニ其ノ反對ナル重害ヲ蒙ラシムルノ虞アレハナリ

前項ニ述フルカ如キ及其ノ他ノ理由アルヲ以テ其ノ實勢ニ於テ國家ハ採鑛場等ヲ保持セサルヲ得サルニ於テハ此ノ營業ノ性質上之ヲ自己管理ニ附スルノ外他ニ良法アルヘカラス

一一 製造場銀行等

第四十四章

陶器製造場飾壁紙製造場等ノ如キ國立ノ製造場ハ概テ開明ニ趣キタル專制時代ニ至リ美術工業ヲ興起シ之ヲシテ高尚ナラシムルヲ目的トシタル傳習所ヲ創立セントスルノ希望ニ出テシ賜モノト云フヘシ當時之ヲ創立シタルハ洵ニ正當ノ措置タリシコト疑ナシト雖工業ノ

進捗シタル今日ニ在リテハ最早之ヲ維持スルノ要ヲ見ス其ノ國家カ
 一私人的ノ資格ヲ以テスル營業ヲナスノ不利ニ關シテハ前節ニ論シ
 タル條項ヲ舉ケ盡ク之レヲ此ニ適用スルヲ得ヘシ其ノ投機ノ業ヲ以
 テ第一トナスヘキ本來ノ商業ノ如キモ亦國家ノ處理スヘキ業務ニ適
 セサルハ喋々ヲ要セスシテ明ラカナルヘシ

第四十五章

政府カ銀行ヲ設立シ以テ之ヲ經理スルハ他ノ營業ヲナスト異ナリ夫
 國家ノ出納及國債事務ノ繁雜ニシテ且種々ナル銀行風ノ行爲ヲ要ス
 ルヤ古來國家ヲシテ銀行ト親密ノ關係ヲナシ一定ノ利益ヲ銀行ニ與
 フルニ代ヘテ國家ノ銀行事務ヲ之ニ處理セシムルノ必要ヲ感セシメ
 タリ今之ヲ財政經濟及銀行事務ノ上ヨリ考フルニ國家ニ於テ其ノ出
 納事務ノ都合ヲ計ル爲一國固有ノ銀行ヲ設立シ其ノ國家ノ出納事務

ニシテ銀行ノ處理ニ屬スヘキモノヲ以テ之ニ擔任セシメ且之ニ依リ
 テ以テ悉ク金券發行ノ業ヨリ生スル所ノ利益ヲ收得シ復各個ノ私立
 銀行ヲシテ其ノ利ヲ專ラニシ或ハ其ノ幾部ヲ所得セシムルコトナカ
 ラシムルモ敢テ之ヲ否トスルノ理由アルヲ見サルナリ

三 運輸交通事業

第四十六章

夫運輸交通ノ事業ハ財政學ノ順序ニ於テ如何ナル地位ヲ占ムルモノ
 ナルヤ大ニ世人ノ爭論スル所タリ甲者ハ曰ハク此ノ事業殊ニ郵便電
 信ヨリ生スル収入ハ手数料ナリト乙者ハ曰ハク營業收入ナリト丙者
 ハ曰ハク專有權ニ由リテ生スル一種特立ノ收入ナリト其ノ論各多少
 ノ理アリテ是非ヲ判別スルコト難キニ似タリ然レトモ要スルニ之ヲ
 乙者ノ論ニ歸セサルヲ得ス抑運輸交通ノ事業ニ生スル収入ヲ以テ丙

者ノ所謂專有權ノ收入ナリトスルノ解釋ハ古代ノ時ニ發生シ全ク今日ト其ノ狀態ヲ異ニセル目的ヲ有シ居タル權利義務ノ關係ヲ以テ直チニ今日ノ制度ニ適用セントスルノ誤謬タルノ一點ヨリ之ヲ察スルモ既ニ其ノ失當ナルヲ知ルニ足ラン又姑ク財政ノ專有權ハ之ヲ利用シテ收益ヲ生セシムルヲ得ヘキ至高權ナリト云フ歷史上ノ意義ヲ固守スルトキハ運輸交通事業ノ内、國家ノ專業トスル部分即信書及新聞郵便ニ限り或ハ其ノ收入ヲ以テ專有權ニ由リテ生スルモノナリト云フヲ得ヘキ歟然レトモ是尙幾分ノ別アリ蓋此ノ郵便事業ノ部分ト雖方今ノ國家ハ國庫專有業ノ利益ヲ收ムルヲ以テ本來ノ目的トセス其ノ公益ヲ計ルト郵便若ハ之ニ類スル事業ニ於テ其ノ公共ニ緊要ナルトノ故ヲ以テ之ヲ經營スルノ別アルコトヲ忘ルヘカラス況ヤ其ノ運輸交通ノ事業ニ在リテハ尙モ專有權ト國家ノ監督權トヲ混同セザラ

ソコトヲ欲セハ專有權ノ意義ニ適セサルコト蓋疑ヲ容ルヘカラス勿論國家ハ之ヲ國家ノ設營トナスト民間ノ營業トナスト得失ニ論ナク決テ此ノ事業ヲ監督スルノ務メヲ怠ルヘカラスヤ必セリ而シテ監督上之ニ交渉スルハ國家ノ自然ニ出ツルモノナリ蓋國家ハ公福ヲ計リ又商業及交通ノ便ヲ保撻スル爲其ノ疆土内ニ在ル所ノ道路及交通營造ヲ監督スヘシトノ普ク公認セラレタル原則ノ結果タルニ外ナラサルナリ

甲者ノ所謂手数料ノ定義モ亦方今ノ狀態ヲ以テ論スルトキハ此ノ收入ニ適セス故ニ手数料ノ定義ヲ變更スル以上ハ兎モ角若後款ニ論スル所ノ手数料ノ定義ヲ維持スヘキトキハ決シテ之ヲ手数料トナスヘカラス抑手数料ナルモノハ素ト其ノ或ル費用ヲ償フヲ以テ之ヲ徵スルノ目的トス而シテ此ノ運輸交通ノ事業ニ在リテハ國家ハ單ニ其ノ

費用ヲ償フノミヲ以テ足レリトセス必ヤ收支相除シテ尙剩餘ヲ生ヤ
 レルヲ務ムルノ事實アリ此ノ如キ事實ニ由リタル收入ヲ以テ之ヲ
 手数料トナスハ則純然手数料ノ解釋ニ背馳スルモノナリ蓋此ノ純益
 タル剩餘ハ其ノ專占業ノ收益ト看做スヲ得ヘキ程大ナルニアラサ
 ハ言フ俟スト雖復手数料ノ定義ニ適シ得ヘキ程小ナルニモ之レアラ
 ス然レトモ其ノ運輸交通殊ニ郵便電信ノ事業ヲ經理スルニ就キテ
 可及的交通ノ集約利便ヲ計ルヲ先ニスルカ爲自ラ其ノ純益ヲ收ムル
 ノ念ヲ後ニスルコト深キニ隨ヒ益其ノ收入ハ減シテ手数料ニ類スル
 ニ至ルハ固ヨリ争フヘカラサルノ事實ナリ

以上論述スルカ如クナルヲ以テ運輸交通ノ事業ニ生スル收入ハ之ヲ
 特ニ一種ノ收入トナスヲ欲セサレハ營業收入トナスノ外ナシ其ノ之
 ヲ特ニ一種ノ收入トナスコトハ往々人ノ稱賛スル所ナリ而シテ此ノ

收入ハ營業ニ由リテ生スル此ノ事業ニ於テ利行及報酬ノ主義ヲ專ラ
 トスル又純益ヲ生スルモ其ノ純益ハ專占業ノ收益ト其ノ性質ヲ異ニ
 スル等皆前文ニ説述シタル一私人的ノ營業ト其ノ性格ヲ同クス就中
 鐵道ノ收入ハ最一私人經濟ノ收入ニ近シ其ノ國立私立ノ鐵道連絡シ
 テ相交通スルニ於テハ殊ニ以テ然リトス之ニ反シテ此ノ運輸交通ノ
 事業ニ於テハ其ノ營業ハ單ニ一私人ノ隨意ニ任レ得ヘキモノトセス
 公共ノ事業ト看做スヘシ又之ヲ經理スルニ際シ國家ノ利益ト廉價ニ
 シテ安全且迅速ニ運搬ヲナスノ便ヲ得ントスル公衆ノ要求トヲ相關
 和セシムルノ職分ノ國家ニ在ルコトハ前文説述シタル營業ト異ナル
 所ナリ

第四十七章

第一 鐵道

鐵道ノ事業ニ在リテモ亦國家ノ經理ニ適スルヤ否ハ豫メ國家ノ營業ニ係ル原則上ノ問題ヲ了解スルノ後續キテ興リ來ル所ノ第一問題タリ抑官私鐵道ノ利害得失ハ從前財政上ノ利害ノミニ原據シテ之ヲ論スルコトヲ得サリシノミナラス今日ニ於テモ尙然ルハ固ヨリ言フ俟タス而シテ此ノ問題ハ大ニ世人ノ爭論スル所タリシニモ拘ラス久シク其ノ歸着ヲ知ラサリシカ輓近官有鐵道ヲ利アリトスルノ論ニ決シタルモノ、如シ蓋鐵道ノ事業タル巨額ノ資本ヲ要スルモノニシテ資本家ヲ以テ成立チタル一大會社ニアラサレハ之ヲ興起スルコト能ハス又其ノ會社カ鐵道ヲ敷設シテ其ノ業ヲ營ムノ方法ハ國家カ之ヲナスノ方法ト大差アルコトナシ是ヲ以テ鐵道事業ニ在リテハ純然タル一私人ノ營業之ヲ別言セハ一人若ハ僅々數人ノ指揮統理スルヲ得ヘキ營業ノ長所ヲ專リ以テ之ヲ用ユルヲ得ス此ノ一點ニ依リテ之ヲ考

察スルモ既ニ官有鐵道利アリトノ論ニ決セサルヲ得サルノ一理アルヲ知ルヘシ、

且夫鐵道ノ性質タル其ノ業ニ自由ノ競争ヲナサシムルヲ得ルコト性メテ少ナク實際專占業トナルモノナリ故ニ國家ハ最初ヨリ之ヲ專占業ト看做シ其ノ免許ヲ與ヘタル一會社ニ之ヲ委附スルト又ハ自ラ之ヲ經理シテ其ノ利ヲ收ムルト何レノ法ヲ執ルヘキヤヲ選ハサルヲ付ス彼此ノ得失ヲ講スルニ際シ深ク考察ヲ要スルモノアリ夫此ノ事業ハ國家ノ利害及經濟ノ得失ニ影響スルコト極メテ大ナルカ故ニ國家ハ決シテ之ヲ民間起業者ニ放任シ得ヘキニアラス線路敷設ノ爲土地收用權ヲ會社ニ與フル行政上及軍事上ニ於テ必要ナル結構ヲ備ヘンタル旅人及貨物ノ保安及損害賠償義務ノ法ヲ定ムル鐵道警察規則ヲ發布スル等始終必ス之ヲ監督シ之ニ干預セサルヲ得サルハ言フ俟ム

サルコト即是ナリ。苟モ運輸事業殊ニ鐵道ハ實際專占業ノ姿ヲナスニアラサレハ旺盛ナルヘカラサルコトヲ知ラハ之ヲ國家ノ所有トナシ以テ其ノ利アルコトノ常理ナルハ隨ヒテ之ヲ了スルコトヲ得ヘシ。何トナレハ私立ノ會社ハ往々他ノ會社ト聯合シ公衆ノ便否ヲ問ハス可及的多額ノ配當金ヲ得ンコトヲノミ是務メ非理ノ利ヲ貪ルノ弊アルニ反シ國家ハ夫等ノ私意ナク眞ニ公衆ノ利益ヲ計ルヲ以テナリ。私立會社ハ鐵道ヲ敷設シ其ノ業ヲ營ムニ於テ技術上及經濟上ノ長所アリテ費用ヲ節約スルコト多シト論スル者アリト雖是決シテ普通ノ事體ニアラス良シヤ偶マ之レアルモ官有鐵道ノ爲ニ生スル經濟上ノ利益即有害ナル競争若ハ非理ノ利ヲ貪ラントスル聯合ヲ阻防スヘキ。國家ノ手ニ於テラスルトキハ鐵道線路ノ全國平均ニ普及スヘキ且其ノ發達ハ時々ノ金融ニ左右セラレタルヲ以テ徐行シテ停止セサルヘキ

等ノ利アルニ比スレハ固ヨリ零壞ノ差違アルモノナリ是ヲ以テ純然タル政治上ノ理由ニ出ツルノ外ハ官有鐵道ヲ非トスルヲ得サルハ亦論ヲ俟タサルナリ。蓋運輸ノ事業ヲシテ國家ノ手ニ歸セシムルトキハ政府ハ之カ爲ニ著シク官吏ノ數ヲ加増シ交通ノ業ヲ計畫シ其ノ狀態ヲ定ムルノ上ニ於テ著大ナル勢力ヲ得ルヲ以テ政府ノ權勢ヲシテ自ラ非常ニ増大ナルニ至ラシムルハ亦疑ヲ容ルヘカラス故ニ國權ノ中央ニ集湊スルヲ望マサル時ニ方タリテハ則官有鐵道ヲ以テ非ナリト論セサルヘカラス

以上論述スル所殊ニ國家ハ鐵道ヲ詳細ニ監督スルノ必要アルノ點ニ就キテ之ヲ考フルトキハ則國家ハ之ヲ所有スルモ單ニ自ラ其ノ管理ヲナスノミニシテ其ノ營業ハ之ヲ他ニ委テ自ラ手ヲ下スニアラサレハ官有鐵道ハ其ノ名ノミナルヲ以テ復其ノ利便ヲ得テ充分ノ効甲ヲ

收ムル能ハサルヘキハ言ヲ缺タスシテ明白ナリトス
 抑鐵道ノ爲ニ生スル財政上收益ノ多寡ハ主トシテ之ヲ經理スルコト於
 テ他ノ鐵道ニ對スル關係如何ニ據リテ定マルモノナリ若私線ニ混交
 シ彼此ノ間ニ競争ヲナス所ノ小線路ニ於テハ單ニ最大ノ純益ヲ得ル
 ノ目的ヲ以テ其ノ業ヲ營ムヘシト雖延長ニシテ或ハ全國ニ連通スル
 カ如キ線路ニ於テハ財政上ノ得失ヲ觀ルノ外特ニ國民經濟的ノ獎勵
 ニ注意セサルヲ得ス然レトモ其ノ經濟ハ專ラ一私人的營業ノ原則ヲ
 用ヒ以テ其ノ興業ニ費シタル資本ヲ償却シ其ノ利子ヲ仕拂フノ外向
 利益ヲ收ムルハ固ヨリ當然ノ義ニシテ決シテ之ヲ非理トナスヘカ
 ス其ノ他極メテ有益ナル線路ノミナラス且其ノ純益ノ厚薄ヲ論セス
 シテ他ニ線路ヲ設ケ以テ國民ノ經濟ヲ利スヘキカ如キハ殊ニ亦當然
 ノ舉ト謂ハサルヘカラス蓋其ノ財政上收益ノ多寡ハ私立鐵道ニ於テ

其ノ利益ノ多寡ヲ定ムルニ標準トナルヘキ同一ノ事情即敷設ノ難易
 線路使用ノ多少(但線路ノ選定如何ハ主要ナル關係アリ)經理法及運輸
 事務執行上ノ組織及賃錢ノ制等ニ因リテ定マルモノニシテ是等ノ關
 係ヲ詳論スルハ一ハ行政學及經濟學一ハ專門技術學ノ本分ナルヲ以
 テ今之ヲ細言セス

第四十八章

第二 郵便

夫郵便ハ國家ノ設置ニシテ官吏ノ經理スヘキ事業ナルヤ又ハ民間ノ
 起業者ニ委附スヘキヤノ問題ハ當世紀ノ初メニ於テ大ニ世論ノ贊々
 セシ所ナルカ今日ニ至リテハ少クモ信書及新聞郵便ノ二種ノ如キハ
 普通之ヲ官業トナスヲ是トスヘキノ論ニ歸着シタリ其ノ理由トスル
 所即三アリ下ニ之ヲ略述スヘシ抑此ノ事業ヲ放チテ民間起業者ニ委

附スルトキハ實際專占業ノ姿ヲナシ其ノ起業者ハ公衆ノ利害ヲ顧ミ
 スシテ常ニ已レノ利益上ニ於テ許ス限リハ其ノ利ヲ貪ルノ弊ニ陷ル
 ノ恐アル是其ノ一ナリ民間起業者ハ信書ノ秘密ヲ保スルノ信用ヲ有
 シ且之カ安全ヲ格護スルノ能力ヲ有スルコト決シテ國家ノ完全ナル
 ニ及ハス且殊ニ國家ハ自己ノ通信ヲ以テ民間起業者ニ委テサルヲ得
 サルニ於テハ柱々其ノ交通上ニ於テ極メテ困難ナル地位ニ陷ルコト
 アル是其ノ二ナリ郵便ハ文明ノ傳播者ト稱スヘシ苟モ其ノ職分ヲ完
 シセント欲セハ宜シク之ヲ彼ノ鐵道ニ比シテ一層鞏固統一ノ組織ヲ
 ナシ全國内ニ四通八達シテ可及的使用者ノ利便ヲ保シ而モ迅速不斷
 ノ遞送ヲナスヲ要スヘシ蓋斯ノ如キ事業ハ獨リ國家ノ能スル所ニシ
 テ他ニ此ノ完全且利便ニ及フモノナシ是其ノ三ナリ且夫彼ノ鐵道事
 業ノ爲ニ既ニ存スル所ノ營造及勢力ノ費分ハ即此ノ郵便ニモ亦其ノ

利用ヲ分ツヲ得以テ大ニ其ノ經費ヲ節減スルヲ得ヘシ夫斯ノ如キ理
 由アルカ故ニ信書及新聞郵便ハ宜シク之ヲ官業トナスヘキノ論決ニ
 歸シタルナリ否之ヲ經理スルハ實ニ國家ノ專占業ナリト切論スルニ
 至レルナリ而シテ其ノ之ニ反スルモノハ旅人及小荷物郵便ノ如キモ
 ノ是ナリ是等ノ事業ハ唯國家ノ監督ヲ受ケシメ民間起業者ニ之ヲ委
 附シ以テ毫モ其ノ害アルヲ見ス然レトモ國家カ業ニ既ニ適當ナル運
 輸ノ方法ヲ設ケテ之ニ着手シ來レル線路ノ如キハ前論ノ在ルカ爲ニ
 頓ニ之ヲ廢スルヲ要セス固ヨリ之ヲ保持スルハ亦論ナシ否斯ノ如キ
 ハ國家ノ計算ヲ以テ旅人及小荷物ヲ遞送スルヲ勸奨シテ可ナルヘシ
 財政上ノ收益ハ其ノ經理法及事務執行ノ組織使用ノ度數及賃錢ノ制
 ニ關係スルコト猶鐵道ニ於ケルカコトシ又國家ハ郵便ノ收入ヲ以テ其
 ノ經理ノ費用及創業ニ費シタル資金ノ利子ヲ償ヒ而シテ尙剩餘(益金

ヲ生セシムルモ決シテ之ヲ非理ノ利ナリトセス蓋國家ハ郵便事業ニ於テ手數料ノ主義ヲ嚴行スヘシ故ニ剩餘ヲ生セシメ且其ノ資金ヲ償却シ及其ノ利子ヲ納ムルノ念ヲモ放棄スヘシトハ往々世人ノ論スル所ナリト雖郵便ハ所謂文明ノ傳播者ナリ普ク獎勵開闢ノ特性ヲ有シ其ノ價值最高貴ニシテ其ノ利行ハ學校教育司法裁判等ノ比ニアラズルコトヲ忘ルヘカラス且國家ハ郵便ノ此ノ緊要ナル部分ヲ其ノ專占業トナスノ法ニ據リ廉價ニシテ且安全ナル遞送ヲナスヲ保スヘシ去リナカラ郵便ノ事業タル素ト公益ヨリモ寧ロ國民一階級ノ一個人若ハ營業上ノ利益ニ偏重スルノ傾向アルモノナレハ國家一般ノ財政上ニ於テ未タ之ヲ許サ、ルコ前ニ論セシ如ク全ク其ノ利益ヲ放擲スルハ固ヨリ正當ノ措置ト云フヘカラス是最モ注意セサル可カラサル所ナリ

第三 電信

電信事業モ亦郵便ニ於ケルト同一ノ理由アルヲ以テ公共ノ交通事業トナシ國家之ヲ擔任經理スルヲ要ス斯ノ如クスルトキハ以テ其ノ交通上公衆及國家自己ノ需用ヲ最良ク給足シ且一私人ノ專占業又ハ競争ノ弊ヲ阻進スルヲ得ヘシ加之電信事務ハ容易ニ之ヲ郵便事務ト兼行セシメ以テ郵便事務ニ於テ盡ク使用スヘカラサル勢力ヲ完用シ經費ノ廉ナルヲ期スヘシ財政上最有益ナル線路アルト同時ニ又其ノ不利ナルモノヲ設ケ其ノ利不利相濟ノ方法ヲ取り以テ電信線ヲ全國ニ普及セシムルヲ計ルカ如キ點ニ於テモ亦信書及新聞郵便ニ於ケルカ如ク最專占業トナスヲ良シトス

此ノ電信ニ於ケル財政上ノ收益ハ郵便ニ關シ論述セシ條項ニ異ナラ

ス要スルニ行政上稍多額ノ純益ヲ取得スルヲ務ムルモ敢テ之ヲ非議スルヲ得サルカ如シ

第二款 貢納

貢納ノ定義及類別

第五十章

財政學ニ於テ收入(即狹義ヲ以テ謂ヘル所ノ貢納)トハ國家及其ノ他ノ公共ナル團體カ強制權ヲ以テ徵求スル所ノ收入ヲ謂フ此ノ收入ハ其ノ權限アル官衙ニ於テ臣民ノ財産ヨリ之ヲ徵求シ官廳若ハ其ノ他設營ノ爲ニ臣民カ受クル所ノ貨財及其ノ利行ニ酬ユル報償タルカ如キ外觀アルモノナリ

是ヲ以テ貢納ハ營利ノ收入ト別異ナル点三種アリ第一法律上ノ理由、
第二其ノ義務上ノ性質第三臣民ノ財産ニ對スル其ノ關係是ナリ

貢納ニ特別ト普通トノ二種アリ其ノ第一種ヲ手数料ト謂ヒ第二種ヲ租稅ト謂フ

最廣義ヲ以テ謂フ所ノ貢納ハ前述スル所ノ貢納ト大ニ其ノ意義ヲ異ニシ尙罰金科料及之ニ類スル賦金ヲモ包含ス

第一項 手数料

一 手数料ノ定義

第五十一章

凡財政學ニ於テ手数料ト稱スルモノハ或ル官衙ノ特ニナシタル利行若ハ行爲ニ酬ユル報償ナリ而シテ其ノ額ハ國權ヲ以テ之ヲ專定シ且其ノ利行若ハ行爲ヲ起因シタル者之ヲ仕拂フモノナリ
手数料ハ國家ノ設營中ニハ其ノ國家設營タルノ性格ヲ失ハサルニモ拘ラス專テ一定ノ人ノ利用スル所トナル故ニ主トシテ一定ノ階級若

ハ一定ノ人ノ利益ヲ計ルカ爲ニ存立スルモノアルノ事實ニ起因ス例
 ～ハ裁判所、學校、度量衡事務所等ノ如ク其ノ行爲ハ一定ノ人ノ爲ニ起
 因セラレ之ヲ要求スルモノハ唯其ノ一小部分ノ人ニ過キスト雖而モ
 國家ノ主要ナル目的ヲ達スルノ上ニ於テハ公共ノ爲ニ其ノ設備ヲ置
 カサルヲ得ス蓋斯ノ如キ設備ヲ創置スルノ費用ハ固ヨリ公共ノ負擔
 トナシ租稅ヲ以テ之ヲ辨給スヘキハ其ノ理ニ於テ疑フ所ナシト雖既
 ニ置カレタル設備ノ各個ノ行爲ニ因生スル費用ハ其ノ行爲ヲ起因シ
 タル者ニ於テ手数料トシテ之ヲ仕拂ヒ以テ其ノ辨給ニ充ツルヲ至當
 トス若租稅手数料ノ内何レカ一方ノミヲ以テ其ノ設備ノ創置ヨリ其
 ノ維持ノ費用ニ至ル迄之ヲ辨給セントスルトキハ爲ニ一定ノ階級若
 ハ一定ノ人ニ偏倚シテ過重ノ恩澤ニ浴セシムルニアラサレハ復之
 過重ノ不利ヲ蒙ラシムルノ弊ヲ生スルコト至ラン

此ノ故ニ手数料ハ其ノ租稅トハ嚴正ニ之ヲ區別スルヲ要スヘキ一定
 ノ徵候ヲ有スルモノナリ即左ノ如シ

- 第一 徵收ノ目的 手数料ハ國家ノ特別ニシテ且多クハ關係者ノ意
 思ニ起因シタル利行ノ爲ニ之ヲ徵收シ租稅ハ國家ノ普通ニシ
 テ且義務上所據行爲ノ爲ニ之ヲ徵收ス
- 第二 納額ノ標準 手数料ニ於テハ特ニ要シタル費用ヲ標準トシ租
 稅ニ於テハ納稅義務者ノ貧富ヲ標準トス

第五十二章

納額ノ標準ニ關シテハ尙一首ヲ要スヘキコトアリ苟モ手数料ヲシテ
 手数料タルノ實ヲ失ハサラシメント欲セハ其ノ手数料ヲ仕拂フノ義
 務アル者ノ爲ニナシタル利行ハ其ノ實價ヲ顯ハスヘク且其ノ額ハ義
 務者カ實際起因シタル費用ニ徵シテ定ムヘキ限界ヲ越ユヘカラサル

ヲ要ス若之ヲ越ユルトキハ手数料ハ國家ノ營利事業ノ收入トナルル
 又ハ租稅トナルニ至ラン蓋各個ノ場合ニ於テ幾分ノ過不足アルハ固
 ヲリ實際免ルヘカラサル所ナリト雖普通此ノ比例ヲ原則ト爲サ、ル
 ヲ得サルナリ又其ノ各種ノ手数料ハ財政ノ點ヨリ之ヲ講究スルニ盡
 ク一様ナラシムヘカラス則各種其ノ別異ナル要件ヲ有スル各個ノ全
 體トシテ之ヲ各別ニ講究スルヲ可トス斯ノ如クナラサレハ其ノ各種
 ニ於テ租稅ヲ以テ辨給スヘキ普通ノ費用ト手数料ヲ以テ辨給スヘキ
 特別ノ費用トノ間ニ於テ其ノ比例ヲ定メ且歲月ノ變遷スルト共ニ屢
 其ノ比例ニ生スル所ノ移動ヲ斟酌スルコト能ハサルヘシ夫前述ノ如
 ク之ヲ各別ニ講究スルモ尙手数料トスヘキヤ或ハ租稅トスヘキヤ之
 ヲ斷定シ難キモノ也シトセス殊ニ手数料ヲ仕拂フヘキ義務ヲ生スル
 各個ノ場合ニ於テ其ノ主體トスル所ノ價格ニ原據シテ其ノ額ヲ異ニ

スルトキハ彼此ノ別尙以テ曖昧ナリトス

手数料ノ額ヲ定ムルニ義務者ノ貧富ヲ標準トナスモ亦其ノ性質ニ背
 馳セリ然レトモ義務者亦貧ナルカ又ハ殊ニ高貴ノ人ト義務ヲ共擔ス
 ル一方ノ者貧窮ナル場合ニ於テ其ノ手数料ヲ免除シ以テ貧者ニ對シ
 公共ノ設備殊ニ司法ノ恩澤ヲ蒙ムラシムルハ固ヨリ此ノ限外タリ蓋
 甲ノ場合ニ於テハ其ノ實施與ヲ目的トシ乙ノ場合ニ於テハ其ノ施與
 ノ外尙富者ノ費用ヲ以テ貧窮ナル義務者ニ給スル補助ヲ目的トスル
 モノナリ

二 手数料總論

第五十三章

夫手数料ハ各國其ノ制ヲ異ニスト雖而モ一定ノ點ヨリ考察スルトキ
 ハ尙之ヲ類別スルコトヲ得ヘシ

凡手數料ハ左ノ四種ノ内ニ於テ其ノ甲種ニアラサレハ乙種ナリト

- 第一 國庫若ハ官吏ノ手數料
- 第二 確定若ハ不定ノ手數料
- 第三 各別若ハ總括ノ手數料
- 第四 普通若ハ特別ノ手數料

第五十四章

國庫手數料及官吏手數料

國庫手數料トハ直接ニ國庫ノ收入トナル手數料ヲ謂ヒ官吏手數料トハ公共ノ事務ヲ任セラレタル官吏カ其ノ公務上ノ行爲ニ起因スル勞力ニ酬ヒ又ハ費用ニ充ツル爲徵收スル權利アリテ其ノ所得トナスキ手數料ヲ謂フ

官吏手數料ハ國家ノ爲手數料ヲ徵收シ之ヲ計算スルノ事務ヲ省キ出

納ノ事務ヲ簡單ニシ往々全ク官吏ニ俸給ヲ仕拂フコトヲ要セサルノ以テ利アリトシ之ヲ稱揚スル者アリト雖他ノ一方ヨリ之ヲ論スルトキハ國家ハ手數料トシテ徵收スル收入ノ總額ヲ正確ニ通覽スルヲ得ス爲ニ其ノ改正ヲ要スヘキコトアルモ容易ニ其ノ利害得失ヲ知ルヘカラス且官吏ヲシテ此ノ徵收所得權ヲ得セザムルトキハ自然其ノ職務ニ忠實ナルヨリ寧ロ手數料ヲ徵スルノ利已心ヲ專ラニスルノ念ノ發スルノ淵源トナリテ終ニ其ノ專恣ヲ逞フスルニ餘地アラシメ加フルニ官吏各自ノ所得ニ非常ノ不同ヲ來タシ是ニ由リテ大ニ其ノ職務ノ舉行ヲ枉害スルノ不利アリ蓋往昔現品經濟ノ世ニ於テ次第ニ本來ナル受給官吏ノ等族ヲ創生スルノ時ニ方タリテハ專ラ官吏ヲシテ手數料ノ收得ニ就キ其ノ衣食住ノ資料ヲ仰カシメタリ是當時他ニ國家ノ財産存セサルカ故ニ已ムヲ得サルニ出テシ所置ナリト雖方今ニ及

ヒテハ復既ニ此ノ如クナラス則手数料ハ大概國庫ニ歸シ其ノ官吏手数料ノ如キハ儘カニ官吏ノ副給トナシ又ハ准官吏公証人又ハ裁判執
行吏ノ類ノ報酬トシテ之ヲ徵收スルノミニ至レリ

第五十五章

確定手数料及不定手数料

此ノ二種ノ別タル第一種ハ手数料ヲ仕拂フノ義務ヲ生スルノ起因ナル行爲ニ對シ何レノ場合ニ於テモ同一ノ額ヲ以テ徵收シ第二種各官衙ニ委テラレタル一定ノ範圍内ノ額ニ於テ又ハ義務ヲ生スル起因トナル行爲ニ要スル時間ノ長短筆記ニ要スル紙面ノ廣狹又ハ其ノ主體ノ價格等ノ如キ標準ニ應シ一々其ノ額ヲ定メテ徵收スルニ在リ而シテ主體ノ價格ニ準據シテ徵收スル手数料ハ之ヲ階級手数料及百分數手数料ノ二種ニ區別スルコトヲ得ヘシ

第五十六章

各別手数料及總括手数料

各別手数料トハ官民ノ間ニ交通ヲナスニ於テ通常之ヲ實行スルカ如ク官廳ヨリ交付セル書面又ハ証書ニ就キテ各別ニ徵收スルモノヲ謂フ即事件ノ性質上再三官衙ノ幫助ヲ要スルトキハ其ノ事件ニ對スル手数料ハ毎度ノ分ヲ合計セタルモノトシ之ニ反シ總括手数料ハ一事件ノ爲ニ要スル官廳ノ行爲ニ對シ其ノ度數ノ如何ニ拘ハラズ仕拂フヘキ一個ノ手数料ナリトス故ニ此ノ種ノ手数料ハ一事件ヲ完結スルニ必要ナル總テノ行爲ニ對スル手数料ヲ一個ノ金額ニ總括シタルモノナリ

苟モ官衙ニ於テ特ニナシタル行爲ニ起因スル費用ト之ニ對シテ仕拂フヘキ手数料トノ間ニ公正ノ比例ヲ失ハサラシメント欲セハ寧ろ各

別手数料ノ制ヲ執ルヘシ此ノ制ハ財政上ニ於テモ其ノ利得多キモ、ナリ之ニ反シテ總括手数料ノ制ハ稍簡單ナリ且前ノ各別手数料ニ比スレハ實際各個人ノ請求シタル行爲若ハ其ノ利益ノ爲ニナシタル行爲ニ對シテノミ手数料ヲ仕拂ハシムルノ實ヲ得ルコト多シ則此ノ点ニ於テハ手数料ノ性質ニ最適切ナリト謂フヘシ

第五十七章

普通手数料及特別手数料

普通手数料ハ官衙ノ行爲ヲ請求スルニ就キ殆ト總テノ場合ニ用ヒル、モノニシテ種々ナル行政部局ニ於テ人民ヨリ官衙ニ出ス書面又ハ官衙ヨリ人民ニ下ス指令、保証書、賞狀、與書等ニ就キ徵收スルモノノリ又特別手数料ハ各個ノ所管部内ニ於テ特ニ請求スル行爲ニ對スル徵收トシテ普通手数料ニ代ヘ又ハ其ノ額外ニ徵收スルモノナリ

夫普通手数料ハ手数料ノ制ヲ普及スルノ原則ヲ實行シタルニ外ナリト雖此ノ手数料ハ素ト種々ナル弊害ヲ生スル基トナルノ恐レアルハ爭フヘカラサルノ事實タリ乃豫メ其ノ額ヲ確定シ置カンカ以テ各個ノ場合ニ適合セル手数料ヲ算定スヘカラス又多少之ヲ官吏ノ考定スル所ニ任センカ決シテ誤謬專恣及爭議ヲ免レサラン且此ノ手数料ハ官衙トノ交通ニ關スルヲ以テ官民トモニ之カ爲ニ煩雜ヲ覺ユルコト、最甚シク加フルニ其ノ行政部局ノ異同ト其ノ行爲ノ難易トヲ斟酌スルヲ得ヘキ特別手数料ヲ以テ補足トナサ、ルヲ得サルノ不便アルモノナリ

三 手数料各論

第五十八章

抑手数料徵收ニ關シ各國ニ於テ實際行フ所ノ行爲ハ一ニ其ノ國官廳

ノ組織ニ據ラサルハナシ而シテ其ノ組織タル國ニヨリテ各異ナリ是ヲ以テ其ノ手数料ヲ細論スルニ當タリ憾ムラクハ實際ノ有様ニ就キテ深ク之ヲ講究スルニ由ナキヲ是ノ故ニ外務軍務及財務ノ如キ手数料ヲ收ムルコト割合ニ多カラサル行政部局ヲ除キ手数料ノ原起ニシテ方今尙最多額ヲ求ムル所ノ二種ノ行政部局即司法及内務ニ關スル手数料ヲ細述スルヲ以テ足レリトセサルヲ得ス而シテ司法部内ノ手数料ハ之ヲ訴訟裁判ト非訟裁判ノ二種ニ區別シ又内務部内手数料ノ内ニ就キテハ衛生教育及國民經濟ノ翼育ニ關スルモノ、ミヲ論セントス

(甲) 司法手数料

第五十九章

訴訟裁判手数料

訴訟裁判手数料トハ訴訟事件ノアル場合ニ於テ特ニ官衙ノ擔任シタル行爲ニ酬ユル報償トシテ徵收スルモノヲ云フ

特ニ民事裁判ニ就キテ之ヲ論スルトキハ抑此ノ手数料ヲ徵收スルノ理由タルヤ夫ノ裁判所ノ行爲及之ニ相伴ヒタル費用ハ偏ヘニ一人ノ利益及權利ノ爭議ニ起因スルモノナリ即其ノ一私人ニ關スルモノヲシテ納稅義務者一般ノ負擔トナシ以テ之ヲ辨給セシムルヲ得スト云フニ在リ且詞訟者ヲシテ此ノ手数料ヲ仕拂フノ義務ヲ有セシムルハ濫リニ訴訟ヲ起スノ弊ヲ防シノ一助トナサントスルモ亦多少之ヲ徵收スルノ理由タルヘキカ

裁判手数料ノ制ニ對シ種々ノ非難ヲ試ムル者ナキニアラス其ノ論據トスル所ハ即民事裁判所ノ設ケアルハ爭議ヲナス原告被告ヨリモ軍口自餘ノ臣民ヲ利スル所多シ又手数料負擔ノ重キヲ感スルハ富裕ナル

抑壓者ニアラスシテ却リテ其ノ抑壓ヲ受クル貧窮者ニ在リト云フノ
 認見ニ出ツルニアラサレハ則手数料ヲ定ムルノ專恣ニシテ其ノ配當
 ノ適度ヲ得ス且其ノ額過多ナルノ弊ヲ指摘スルモノナリ然ラハ則是
 其ノ手数料ノ制ヲ是非スルモノニ非ラスシテ唯其ノ制ヲ實用スルノ
 方法ヲ誤マリタルヲ責ムルニ過キサルノミ
 手数料ハ一定ノ限界ヲ越ユヘカラス若之ヲ越ユルトキハ裁判所ノ幫
 助ヲ藉ルコトヲ難カラシメ隨ヒテ司法ノ廣大ナル便益ヲ減殺シ就中
 富裕ナラサル階級ノ人民ニ不利ヲ蒙ラシムレハナリ而シテ其ノ手
 數料ノ額ハ訴訟ノ爲ニ生シタル實費即訴訟事件ノ大小難易及之ヲ裁
 判スル官衙ノ等級ヲ標準トシテ定ムルヲ通則トナスヘシト雖訴訟事
 件ノ主體タル價格ヲモ亦斟酌セスンハアルヘカラス若否ラサルトキ
 ハ專ニ價格ノ些少ナル事件ニ在リテハ其ノ費用ノ多キヲ恐レ終ニ之

ヲ法庭ニ訴フルノ念ヲ絶タシムルノ弊ヲ生スルコトアレハナリ
 裁判手数料ハ原告ノ内其ノ訴訟ニ敗テ執リシ者ニ於テ之ヲ負擔セ
 タルヲ得ス蓋敗訴者ハ權利アリト妄信シタル誤リアルヲ免レサルカ
 故ニ自ラ其ノ訴訟ヲ惹起シタルノ責ヲ辭スヘカラサレハナリ
 刑事裁判ニ於テハ手数料ヲ徵收スルノ理由民事裁判ニ於ケルヨリモ
 一層明白ナリ惡意ヲ以テ法律ヲ犯シタル者ヲ處罰スルニ生シタル費
 用ヲ公共ノ負擔トスルカ如キコトアラハ孰レカ之レヲ正當ト謂フ者
 アランヤ

第六十章

非訟裁判

非訟裁判ニ於テモ亦專ラ或ル人ノ請求ニ因リ其ノ人ノ利益ヲ計ル爲
 ニナス行爲ニシテ其ノ費用モ亦其ノ人ヲシテ辨償セシムヘキモノア

ルコト最多シ即裁判所ノ鑑定、干涉、認定、保證及證明ヲ要スル事實又ハ權利ノ理由ヲ明カニスルカ、之ヲ確實ニスルカ若ハ變更スルカ、遷移スルカ若ハ之ヲ廢止スルヲ目的トシタル官ノ行爲皆是非訟ニ屬スルモノナリ左レハ權利ニ關スル様式及其ノ手續等ノ順次發達スルコト隨ヒ急、手数料ノ數ヲ加フルヤ知ル可シ而シテ今日之ヲ徵收スルノ範圍ハ業ニ既ニ極メテ廣大ヲ致セリ即所謂登記手数料例ヘハ土地所有權ニ關スル公共ノ帳簿、商業登錄簿、會社登錄簿、賣買、意匠、模型及版權登錄簿等ニ登記ヲ爲ス爲ニ徵收シ其ノ他契約、養子、相續權認定、世襲財產創設等ノ如キ權利義務上ノ取引ニ關シテモ亦徵收ス是等諸件ノ手数料ハ己ニ皆等シク著大ナルモノナリ

(乙) 内務行政手数料

第六十一章

衛生及教育ニ關スル手数料

衛生事務ニ關シテハ手数料ヲ徵收スルコト多シトセス蓋國家ノ行爲ハ元來此ノ事務ニ於テ比例的ニ多カラス偶、種痘及其ノ他傳染病豫防ヲナス等ノ如ク一地方ノ請求ニ由リ專ラ其ノ利益ヲ計ル爲國家ノ行爲ヲ要スルコトアルモ是畢竟公共ノ利害ニ關スルニ至ルヘキコト亦極メテ大ヒナルカ故ニ全ク手数料ヲ免除スルヲ至當トナスヲ以テナリ

教育事務ニ關スル手数料ハ前段衛生事務ノ手数料ニ比シテ頗ル多シトス而シテ之ヲ徵收スルハ其ノ普通ノ理由アルモノニシテ彼ノ就學義務ヲ定メ其ノ就學ヲ強制スル所ノ小學校ニ於テスラ尙然シ其ノ理由アリトス何トナレハ國民教化ノ度善美ナルハ其ノ國文明ノ基本タル勿論ナリト雖各個人ノ智育ニ至リテハ之ヲ教育ノ結果ニ歸セスン

ハアルヘカラサルコト固ヨリ疑ヲ容ルヘカラサレハナリ唯之ヲ徴收スルノ分度ハ普通學ヲ授クルノ學校ニ於テハ其ノ普及ノ効力ヲ審セサルヲ目的トシ多額ニ失セサルヲ期シ且其ノ收入ハ教育事務ノ經費ヲノミ助成スルヲ目的トナスヲ要ス然リ而シテ高等ノ學校ニ至リテハ其ノ教育ノ各個人ノ利益トナル所ノ利行著大ニシテ隨ヒテ其ノ費用ヲ要スルコト亦多キカ故ニ其ノ額ヲ増多スルモ手数料ノ性質ニ徴考シテ實ニ其ノ理アルモノナリ

教育事務ニ關シテ徴收スル手数料ハ其ノ種類多シ例ヘハ授業料、免狀、手数料、試験料、入學退學證手数料、公會又ハ博物館ノ入場料ノ如キ皆是其ノ著キモノナリ

第六十二章

國民經濟ノ發展ニ關スル手数料

如何ニ自由經濟ヲ主義トスル國ニ在リト雖其ノ公益ヲ保護スル爲一ハ監視及保証ノ法ニ據リ一ハ認可、免許、能力保証等ノ法ニ據リ以テ其ノ營業ノ制限ヲ維持シ又ハ新メニ之ヲ創立セサルヲ得ス斯ノ如キ制限法ヲ實行スルノ任アル官衙又ハ設營ハ素ト公共ヲ保護シ且其ノ利益ヲ計ルカ爲ニ設置スルヲ以テ其ノ之ヲ開創スルノ費用モ亦公共ノ負擔トナスハ固ヨリ至當ナリトス然レトモ其ノ官衙ヨリ下付スル所ノ認可狀、免許狀、保証狀ハ皆各個人ノ請求ニ由リ其ノ者ノ利益ヲ目的トスルカ故ニ此等ノ如キハ其ノ請求者ヲシテ此ノ官衙保存ノ費用幾分ニ充ツル爲特ニ其ノ行爲ニ報エル手数料ヲ仕拂ハシムルハ最其ノ當ヲ得タルノ制度ト謂ハサルヲ得ス蓋此ノ種ニ屬スル手数料ノ口ニ極メテ數多ナルハ方今非常ノ集約的ニ發達シタル經濟及交通ノ自然ニ適合スルモノナリ

前述ノ如クナルヲ以テ此ノ種ノ手数料ニ左ノ四別アルヲ知ラサル川
カラス

一。監。視。及。保。証。手。數。料。例。ハ。尺。度。斗。量。器。及。秤。錘。ノ。檢。定。金。屬。ノ。檢。印。飲。食。
物。品。位。ノ。監。督。並。ニ。調。藥。舖。私。立。學。校。及。私。立。病。院。ノ。臨。檢。等。ニ。關。ス。ル。セ

二。免。許。及。能。力。保。証。手。數。料。例。ハ。醫。師。及。製。藥。師。免。許。等

三。認。可。手。數。料。例。ハ。鐵。道。及。汽。船。起。業。保。險。事。業。藥。種。商。蒸。氣。々。鐘。使。用。ノ
各。事。業。ノ。如。ク。全。ク。自。由。ニ。創。業。ス。ル。ヲ。許。サ。ル。一。定。ノ。營。業。ヲ。爲。ス。ノ

認。可。ヲ。受。ク。ル。ニ。關。ス。ル。モ。ノ

四。許。可。手。數。料。例。ハ。見。セ。物。場。及。踏。舞。場。開。設。ノ。許。可。義。捐。金。募。集。ノ。許。可
及。旅。商。行。商。等。ノ。鑑。札。ニ。關。ス。ル。モ。ノ

四 手数料徴收法

第六十三章

手数料ヲ徴收スルニ直接間接ノ二法アリ而シテ其ノ直接ナルハ舊法
ナリトス

直接法ニ據レハ手数料仕拂ノ義務ヲ生セシメタル官衙ニ於テ直ニ之
ヲ徴收スルヲ正則トシ時アリテ特ニ徴收ノ官衙ヲ置キテ之ヲ徴收セ
シム間接法ニ據レハ証券用紙又ハ証券印紙ヲ以テ之ヲ徴收ス但証券
用紙ヲ以テ徴收スルトキハ手数料仕拂ノ義務アル書類又ハ証券ニ捺
印アル用紙ヲ用ヒシメ証券印紙ヲ以テ徴收スルトキハ印紙ヲ貼用セ
シムルヲ必要トス

直接法ヲ以テ手数料ヲ徴收スルトキハ煩雜ニシテ其ノ決算及出納ノ
事務ヲ錯雜ナラシメ隨ヒテ其ノ徴收費多キヲ要スルノ理ナリ然レト
モ安全ニシテ且手数料ノ額ヲ各個ノ事情ニ適セシムルヲ得ルノ利ハ

亦此ノ直接法ニ在リ故ニ多額ナル又ハ特別及總括手數料ニハ此ノ法ヲ用ユルヲ良シトス

間接法ヲ以テ手數料ヲ徵收スルトキハ簡易ニシテ其ノ費用モ少ナク且國家ニ取リテハ勿論人民ニ取リテモ亦概テ便利ナリトス然レトモ特ニ詳細ノ規則ヲ設ケ以テ印紙用紙ノ誤用ヲ豫防シ又不斷監督ヲ怠ラス以テ其ノ廢造改描印紙ノ再用等ヲ防遏セサル可カラサルノ煩ノリ故ニ此ノ法ハ其ノ性質上書面ニ關スル手數料若ハ普通ナルモノニ定セルモノ又ハ等級ヲ以テ定メアルモノ、類ニ對スル徵收ニ適スルモノナリ

第二項 租稅

一 租稅ノ定義及其ノ理由

第六十四章

租稅トハ納稅ノ義務アル臣民カ財產ノ一部分ヲ割キテ仕拂フ所ノモノナリ而シテ其ノ徵收ノ權限アル官衙若ハ公權ヲ執行スル其ノ他ノ機關ニ於テ之ヲ徵收シ之ヲ以テ公共ノ需供ニ必要ナル費用ニシテ他ノ歳入ヲ以テ給足シ得サルモノヲ支辨スルモノナリ

抑租稅ノ法タル其ノ由リテ來ル所最明瞭ナリ蓋共同ノ需用ヲ給足セントスルニ際シ之カ爲ニ要スル費用ノ内其ノ幾分ハ何等ノ起因スル所ニ係ルヤ固ヨリ之ヲ算定シ得ヘカラス故ニ共同ノ資金アルニアラザレハ何ヲ以テ其ノ國用ヲ給足スルヲ得ンヤ然リ而シテ臣民ノ任意ニ供給スル寄附金及現徭役若ハ營利事業ノ收入及手數料ノ如キハ其ノ増減固ヨリ常ナラス現今日ヲ逐テ増加スル所ノ國家ノ職分ニ對シテ不確實ナルヘク且其ノ收入ノ額タル亦寡少ニシテ固ヨリ其ノ資需ヲ支フルノ基礎トナスニ足ラズ是ヲ以テ遂ニ此ノ強制的ニ租稅ヲ徵

收スルノ外他ニ良策ノ施用スヘキモノアルヲ見サルニ歸到セシナ
リ

第六十五章

抑公權ナルモノハ租稅ヲ徵收スルノ權利ヲ有スルヤ否ノ問題ハ夫ノ
國家ノ本體基礎起原及其ノ目的ニ關スル問題ニ密接ノ關係アルモノ
ナリ而シテ此ノ第二ノ問題タルヤ既ニ世人ノ知ルカ如ク之ヲ解答ス
ル者ノ說區々ニシテ殆未タ其ノ歸着スル所ヲ得ス然レトモ苟モ國家
及共同團結生活ノ必要ナルヲ曉知セハ復其ノ成立ノ理由及其ノ目的
ノ廣狹如何等ニ論ナク國家ハ其ノ共同體ノ分子タル人民ヲシテ物質
上之ヲ助成セシムルノ權利ヲ有セサルヲ得サルハ則自然ノ結果タル
コトヲ了スヘシ然レハ則租稅ヲ徵收スルノ權利ハ國家カ其ノ目的ヲ
達スル義務ヨリ生スル直接ノ結果ナリト云フニ過キサルノミ故ニ公

權ノ租稅ヲ徵收スルノ權利ニ相對シテ人民ノ之ヲ納ムルノ義務アリ
蓋其ノ目的ヲ達セント欲スル者ハ之カ爲ニ要スル所ノ資料ノ供給ハ
之ヲ拒ムヲ得ヘカラサルハ最規易キノ理ナレハナリ
斯ル理由アルヲ以テ納稅義務者ハ其ノ仕拂ヲ拒ムヲ得ルノ理ナク徵
收權利者ハ逋稅者ヲ寬免スルノ理モ亦之レナシ願フニ租稅ヲ免カレ
ンコトヲ謀リ之ヲ私シタルトキハ其ノ罪私ニ他人ノ財ヲ竊取シタル
ニ異ナラス尙深ク之ヲ論スルトキハ逋稅ノ爲ニ仕拂ハサリシ丈ケ他
ノ義務者ニ於テ多ク仕拂ハサルヲ得サルノ理ナルヲ以テ當ニ國家ニ
對スルノミナラス他ノ納稅義務者ニ對スルモ亦其ノ罪ヲ免ル、コト
能ハサルナリ

一一 租稅ニ關スル術語ノ解

第六十六章

租稅論ニ於テ特ニ此ノ論ニ限リ用ユル所ノ術語アリ由リテ其ノ論ヲナスニ先タチ其ノ略解ヲ述フヘシ

稅源トハ實際租稅ヲ仕拂フ所ノ淵源トナルヘキ貨財ヲ謂フ而シテ法律上課稅ノ標準又ハ其ノ起因トナルヘキ物體、行爲又ハ出來事ヲ課稅物ト謂フ課稅原。位トハ尺量、數量、重量又ハ其ノ他ノ徵候ヲ以テ綿密ニ算定シタル單個ノ課稅物ヲ謂フ例ヘハ「ヘクトアル」ノ土地、千麻ノ金利、「ヘクトリ」タル「火酒」、「セントキル」ノ穀物等ノ如シ又課稅原位一個ニ相當スル稅額ヲ稅率ト謂ヒ稅率ニ各個人ノ所有スル課稅原位ヲ相乘シタル額ヲ納稅高ト謂フ

納稅人トハ收稅官衙ニ向ヒ稅金ヲ仕拂フヘキ者ヲ謂ヒ負稅人トハ己レノ所得又ハ財產ノ内ヨリ實際稅金ヲ辨出スル者ヲ謂ヒ又納稅主トハ法律上租稅ヲ仕拂フヘキ義務ヲ負テ者ヲ謂フ

稅率表トハ同種ノ租稅ヲ課セラルヘキ物品ノ爲ニ定メタル課稅原位及稅率ヲ載セタル表ヲ謂ヒ租稅臺帳トハ一定ノ租稅所屬直稅ノ納稅主及課稅物ヲ測定スルノ料ニ供スヘキ總テノ事實ヲ載セタル官用ノ帳簿ヲ謂ヒ課稅名簿トハ納稅主及其ノ納稅高ヲ合算シタル官用ノ帳簿ヲ謂フ

三 稅納移轉

第六十七章

納稅移轉トハ經濟上ノ貨物物品又ハ勞力ヲ販賣シ又ハ之ヲ貸付クル者カ其ノ貨物ニ課セラレタル稅額ニ相當スル金額ヲ其ノ代價又ハ借料ニ加増シ取りモ直サス稅額丈ク之ヲ高價ニ販賣スル等ノ行爲ヲ謂フ故ニ其ノ販賣者ハ納稅人タリト雖其ノ實本來ノ負稅人タル其ノ物品ノ購買者ニ代リ一時租稅ヲ仕拂ヒ置クニ過キサルノミ

此ノ納稅移轉ノコトタル或ル種類ノ租稅ニ在リテハ徵稅權ヲ執行スルノ上ニ於テ之ヲ事實ナリトシ又其ノ事實アルモノト認ム例ヘハ麥酒稅、火酒稅、甜菜糖稅等ノ如キ間接消費稅ニ在リテ然リトス抑消費稅ナルモノハ元來是等ノ物品ノ消費ニ課スヘキモノナレトモ之ヲ消費スル人ハ無數ニシテ其ノ之ヲ消費スル行爲ニ至リテハ其ノ繁雜尙一層甚シキヲ以テ其ノ消費スヘキ各個ノ行爲アル毎ニ該消費者ヨリ之ヲ徵收センコトハ煩碎ノ事務ニシテ固ヨリナシ得ヘキコトニアラス然ラハ其ノ生産者即前例ニ據レハ彼ノ麥酒釀造人及甜菜糖製造人等ニ就キ其ノ物品ニ對シテ課稅スルノ法ヲ用ユヘシ是其ノ生産者ノ數ハ比例的少數ニシテ而シテ課稅物ノ其ノ手ニ在ルモノ多量ナルカ故ニ其ノ稅ヲ課スルニ於テ最便ナルヲ以テナリ斯ク生産者ヨリ租稅ヲ徵收スル上ハ生産者カ其ノ額ヲ物品ノ代價ニ附加シ以テ消費者ヨリ

之ヲ辨償セシムルト否トハ一ニ之ヲ生産者ノ意ニ放任スヘシ斯ノ如キ場合ニ於テ納稅移轉ハ課稅法ノ一ニ屬シ之ヲ完行スルハ實ニ賦課ノ正當ヲ表彰スルモノナリ
前述ノ如キモノハ之ヲ課期ノ納稅移轉ト謂フ而シテ其ノ他ニ尙一種不期ノ納稅移轉ト謂フモノアリ此ノ種ノ納稅移轉ハ直稅間稅ニ在リテ共ニ行ハル、モノナリ蓋政府ノ目的トスル所ニ據レハ元來租稅ヲ負擔スヘキ所ノ人ニシテ却リテ之ヲ他人ノ負擔ニ移轉セルニ由ル則不期ノ名ノ生スル所以ナリ

此ノ納稅移轉殊ニ不期ノ納稅移轉ニ關スル問題ハ之ヲ解答スル頗ル難ク古來大ヒニ世人ノ爭論セル所ニシテ或ハ不期ノ納稅移轉ナルモノハ元來之レアルノ理ナシト云ヒ或ハ其ノ國民ノ經濟ニ影響ヲ及スコト尠少ナラスト云ヘリ而シテ後者ニ復是非ノ二說アリ其ノ之ヲ非

トスル者ハ曰ハク不期ノ納税移轉ハ租税賦課ノ正當ヲ失セシムルノ原因トナルコト稀ナラスト之ヲ是トスル者ハ曰ハク是ニ由リテ以テ賦課ノ平等均一ヲ致スヲ得ヘシト實ニ氷炭相容レサルノ説ト謂フヘシ

今姑ク虚氣平心以テ之ヲ考フルニ凡國民經濟上ノ生活ニ於テ物價ノ一定スル際ニ當タリ經濟上ノ義務ヲ他ニ移轉セシムルノ稀ナラサルコトハ常ニ之ヲ記憶セサルヘカラス特ニ物價ヲ高貴ナラシメ又ハ其ノ不利若ハ其ノ義務ヲ他人就中職工、債主、消費者等ニ移轉セシムルコトヲ得ルモノハ其ノ經濟上有力ナル者ニアラサレハ則時機ニ投ヅテ僥倖ヲ得タル者ニアラサルハナシ例ヘハ借家ノ拂底ナル時ニ於テ家主ハ其ノ借料ヲ増加シテ家屋ノ税ヲ價フカ如ク時機其ノ宜シキヲ得ハ直接ノ負擔者ハ其ノ負擔ヲ他人ニ移轉スルヲ得ヘク資本案モ亦

資本ノ需用繁劇ナル時ニ在リテハ金利ノ税ヲ其ノ利子ニ附加シ以テ之ヲ負債主ヨリ債ハシムルヲ得ルニアラスヤ斯ノ如キハ實ニ納税移轉ハ租税ノ平均ヲ助クヘシト謂フ所ノ説ニ正反對ヲナスモノナリ否各階級ノ財産及所得ノ極メテ不同ナル射利抑制ノ不是ナル如何ニ租税ノ賦課合理正當ナルモ枉々之ヲ畫餅ニ屬セシムルコトアリ然レトモ直税ノ制其ノ宜シキヲ得ハ彼ノ如何ニ善美ナル税法ト雖尙瑕瑾アルヲ免レサルノ点ニ比シテ之ヲ考フレハ其ノ納税移轉ヲ爲スノ範圍大ナリト云フヘカラス是普通ニ正確ノ論ナリト謂フヘシ

抑間税ハ實際消費者ニノミ之ヲ移轉スルヲ得ヘク直税ハ之ニ反シテ實際法律上定メラレタル納税主ノ負擔トナルヘク其ノ課税法ノ全體ヲ畫定スルハ租税政策ニ於テ最モ肝要ナリト雖其ノ目的ヲ達スルノ困難ナルハ固ヨリ論ヲ待タサルナリ

納稅移轉ニ相反シテ課稅減價ト云フ行爲アリ即課稅セラレタル義務者ハ生産ヲ改良シ其ノ費用ヲ節シ以テ純益ヲ増シ是ニ由リテ租稅ノ負擔ヲ減少シ或ハ全ク之ヲ除カント務ムルカ故ニ此ノ行爲ハ蓋課稅ノ反動ナル効果ヲ結ヒタルニ外ナラサルナリ

四 租稅ニ關スル普通ノ主義

第六十八章

租稅ノ定義前述ノ如シ抑此ノ定義中ニハ一種固有ノ性質ヲ含蓄ス而シテ其ノ性質タル頗ル重要ニシテ遂ニ租稅ノ全體ニ貫通スル一定ノ主義ヲナシ即租稅政策ニ於ケル實施ノ原則ヲナスノ基礎トナルニ至レリ

此ノ性質トハ即左ニ舉クル所ノ三個ノ條項ヲ謂フ

第一 納稅ノ義務ト國民ノ義務トノ間ニ存シテ相分ツヘカヲサルハ

關係

抑國民ノ租稅ヲ仕拂フノ義務アルハ則國民タルノ自然ニ出テタル論理上ノ結果タルニ外ナラス尙進ミテ此ノ理ヲ推ストキハ課稅ハ普及ニシテ平等ナルヘク又納稅ノ義務ハ法律ヲ以テ之ヲ制定スヘク且道徳ノ許スヲ得ヘキ主物ヲ限リトスヘキ必要アルヲ知ルヘシ故ニ國家ハ己レノ目的ヲ達センカ爲國民ノ財產ヲ徵求セントスルトキハ誰彼ノ區別ナク總テ各國民ニ之ヲ負擔セシメ而シテ其ノ輕重寬苛モ亦平等ナラシメサルヲ得ス且新タニ租稅ヲ課シ之ヲ徵收スルニ際シテハ決シテ專恣ノ措置ヲナシ又德義ノ精神ヲ毀損スルコトアルヘカラス要スルニ何レノ關係ヨリスルモ必ス宜シク其ノ公正ナルヲ原則トナスヘシ此ヲ之レ公正ノ主義ト謂フ

第二 租稅ハ何レノ方ヨリスルモ財產上一ツノ犧牲タルモノニシテ

亦。屬。營。利。ノ。生。活。ニ。於。テ。多。少。ノ。害。ト。ナ。ル。ヲ。免。レ。サ。ル。ノ。事。實。

此ノ事實アルヲ以テ各個ノ經濟ヲ爲ス者ニ對シ其ノ負擔ニ堪ヘサルカ如キ義務ヲ負ハシムヘカラス而シテ其ノ生存ノ基礎ヲ危殆ナラシムルコトナク且營利ノ生活ヲ紛亂シ又之ヲ枉害スルコトヲ可及的ニ避スヘキヲ以テ主眼トナスヘシ此ノ要件ヲ完フスルヲ目的トシタル原則ヲ總稱シ以テ之ヲ經濟ノ主義ト謂フ

第三 支出ヲ辨給スル租稅ノ目的

租稅ノ定義ニ存スル性質ノ中第一第二ノ二項タル其ノ國民ニ對シノ施スヘキ主義ヲナスノ根基トナリ而シテ此ノ第三項ハ財政上ニ於テ施スヘキ主義ヲ生ス蓋財政ニ於テハ國家ノ需用ニ適合シ且實用ノ便宜ニ適スル租稅法ヲ要スルハ固ヨリ曠々ヲ俟タサルナリ
以上三種ノ主義ハ極メテ重要ナルヲ以テ尙之ヲ詳論セサルヲ得ス

五 公正ノ主義 第六十九章

凡課稅ヲ公正ナリト稱スルニハ其ノ租稅ヲ課スルコト普及公平ニシテ風俗及法律ニ適シ且確定ノ規則ニ據ルヲ必要トス

第一 租稅ノ普及ナルコト

普及ノ目的ヲ達セント欲セハ須ク物件若ハ人類ニ關スル總テノ特權ヲ廢スヘシ一國ノ内ニ於テ等シク國家ノ恩澤ニ浴シナカラ其ノ負擔スヘキ義務ノ一部又ハ全部ヲ免カル、自然人或ハ法人アルトキハ執レカ之ヲ正當ト云ハンヤ又執カ之ヲ人民ノ定義ニ悖ルモノニアラハト云ハンヤ然リト雖一定ノ限界ニ達セサル些少ノ所得又ハ財產例ヘハ生存下限ヲシテ直稅ヲ免レシムルコトアルモ此ノ主義ニ背馳スルニアラス何トナレハ何程貧窮ナル者ト雖皆間稅ノ義務ヲ負ヒサルハ

ナケレハナリ否間税ノ負擔殊更下等ノ人民ニ重キ國ニ在リテハ却リ
テ之ヲ實際經濟上ノ斟酌ヲナスニ關クヘカラサル公正ノ處置ト謂フ
ヘシ其ノ他充分報酬ヲ受ケサル職務ニ對シ例ヘハ官吏ニ於テ免税ヲ
以テ一種ノ報酬トナスコトアリ然レトモ之ヲ誤解スルノ弊ヲ生スル
コト容易ナルカ故ニ斯ノ如キ免除ハ可及的之ヲ避クルヲ要ス

第七十章

第二 租税ノ公平ナルコト

此ノ主義ハ租税ノ分配ヲ公正ナラシムルヲ目的トシ人民ハ法律ニ對
シテ同等ナリト云フノ主義ヲ取り之ヲ財政ニ應用スルモノナリ
是ニ於テ第一ニ起ルモノハ則如何ニシテ真正ナル課税公平ノ目的ヲ
達シ得ヘキヤノ問題はナリ夫各人民ノ貧富ヲ論セス一様ニ同額ノ租
税ヲ仕拂フヘキ義務ヲ負ハシメシカ是決シテ真正ノ公平ニアラサル

コト灼然トシテ猶火ヲ觀ルカコトシ故ニ其ノ額ニ階級ヲ分チ以テ之
ヲ公平ナラシムルコトヲ試ミタリ

既ニ租税ノ額ニ於テ階級ヲ分ツハ公正ニシテ且便宜ニ適セリト認ム
ルトキハ直チニ之ヲ實行スルノ標準ヲ講セサルヲ得ス

租税ノ額ニ對シ公正ノ階級ヲ分ツヘキ要件ヲ試ミ實際ニ施スノ所爲
ニ就キ古來各種ノ說ヲナスモノアリ即報償說保險說及從資說是ナリ

(甲) 報償說トハ則臣民カ國家ヨリ受クル所ノ利益ニ比シテ租税ヲ課
セント欲スルモノナリ蓋是各個ノ納稅義務者カ生セシメタル費用ノ
多寡ニ據リテ租税ヲ課スルノ法ト其ノ大體ヲ同クス然レトモ此ノ標
準ハ中古崇祖國の國家ノ解釋及前世紀ノ終リノ頃行ハレタル無機性
論派ノ國家學及法律學ニ適スヘクシテ決シテ國家ヲ以テ一ノ有機體
トスル今日ノ學理ニ適當セス要スルニ元來彼ノ手數料主義ヲ一層擴

張シテ之ヲ一般ニ及ホシタルニ過キス然ルヲ以テ租税ノ主義ニ
 スルハ管ニ其ノ公正ヲ失スルノミナラス復之ヲ實行シ得ヘキニア
 ス試ミニ此ノ法ニ據リテ租税ヲ賦課スルモノトセンカ無智貧窮ニ
 テ且資力ナキ下等ノ人民ハ其ノ社會ノ助成ヲ要スルコト特ニ多キ
 ノナレハ該貧者及細民ハ富者ヨリモ却リテ其ノ負擔ヲシテ大ナラ
 メサルヲ得サルニ至ルヘシ是其ノ公正ナル能ハスト謂フ所以ナリ又
 國家ノ最多ク且殊ニ最緊要ナル費用ヲ要スル利行例ヘハ陸軍ニ要
 ル費額ノ如キハ如何ナル手段ヲ以テスルモ決シテ之ヲ各個人ニ平
 賦課シ得ヘキモノニアラス是其ノ之ヲ實行シ得ヘカラスト謂フ所
 ナリ

(乙) 保險說ニ據レハ租税ハ國家カ財產ヲ保護スルニ酬ユル保險料ノ
 リト云ヘリ果シテ斯ノ如シトセハ則國家ハ保護スルノ價值ニ應シテ

其ノ租税ヲ課セサルヘカラス若之ヲ實行セハ其ノ極ヤ後章ニ論述
 ル所ノ彼ノ財產税ニ異ナラサルヘシ蓋財產ノ保護ヲ以テ租税ノ原
 トナスハ是大ナル謬妄ナリ何トナレハ國家ノ職分ハ決シテ財產ヲ
 全ナラシムルノミニ限ラス復其ノ人身ヲ保護シ人民ノ精神上及
 經濟上ノ福祉ヲ計ルヲ以テ其ノ職分トナサ、ルヘカラサレハナリ且
 又財產ニ關スルモ國家ハ眞ニ之ヲ保險スルニアラス何トナレハ
 縱ヒ之ヲ喪失スルモ國家ハ決シテ之ヲ賠償スルノ責ニ任スルニア
 ラス唯之ヲ保護シ若ハ其ノ之ヲ侵襲セル者アル時ニ當タリ之ヲ
 處罪スルノ責務アルノミナレハナリ

(丙) 從資說

此ノ說ハ各個人ノ資力ニ應シテ租税ヲ課スルヲ目的トスルモノ
 ナリ蓋此ノ說ヲ實行スルトキハ其ノ結果ハ大ヒニ夫ノ保險說ノ
 結果ニ類

スル所アリト雖而亦モ其ノ理由ニ於テハ却リテ千里ノ差アルモノナリ抑此ノ説ノ理由タルヤ前章租稅ヲ汎論シタル際ニ於テ既ニ辯述シタル所ノ理由ニ等シキモノニシテ則其ノ淵源ハ國家ノ自然其ノ物ノ中ニ在リテ存ス苟モ納稅者ノ國家ニ對スル關係如何ヲ考察セハ則租稅ハ國家ト云ヘル一ノ團體ヨリ享有セル所ノ利益ノ爲ニスル報酬アラスシテ之ヲ仕拂フハ實ニ國民ノ義務ニ由ルモノナリ然レハ則租稅ハ其ノ供納物タルヘキヲ知ルニ足ラン是蓋此ノ從資説ヲ以テ古來別ニ供納説ナル一名アル所以ナルヘシ夫然リ是ヲ以テ各個人カ同ノ供納ヲナストキハ則課稅公平ノ目的ヲ達スルヲ得ヘシ蓋其ノ同トハ即比例的ノ同一ト云フ義ニシテ要スルニ人民カ各其ノ使用スルヲ得ヘキ資力即其ノ經濟上ノ能力ニ對シ同一ノ比例ヲ以テ(或ハ普通ニ之ヲ別言シテ其ノ所得及財產ニ對シ同一ノ比例ヲ以テスト謂フヲ

得ヘシ)納稅スルヲ云フナリ

第七十一章

夫前説稍備ヘル所アリト雖然レトモ此ノ説ニ從フモ尙未タ以テ各般ノ困難ヲ排除スルニ足ラス而シテ忽所得及財產ニ對スル租稅ノ比例其ノ公平ヲ得セシムルニハ如何ナル方法ヲ用ユヘキヤ即租稅ハ所得ニ對シテ正比例ヲナスヘキヤ又ハ累進比例ヲナスヘキヤノ問題ヲ生スヘシ蓋人益富裕ナルトキハ愈多量ノ收入ヲ以テ其ノ任意ノ需用ニ對シ之ヲ使用スルヲ得ヘク而シテ納稅ニ對シテモ亦之ヲ使用スルヲ得ルノ理ナルコト固ヨリ其ノ疑ヲ容ルヘカラサルノ点ヨリ之ヲ考レハ則此ノ問題ヲ生スルノ至當ナルコトヲ知ルヲ得ヘシ

納稅義務者ニシテ誰彼ノ區別ナク皆租稅ノ所得ニ對スル比例ヲ同一ニシ而シテ其ノ稅額ハ其ノ所得額ト亦同一ノ比例ヲ以テ増加スルモ

ノ之ヲ正比例ノ租税ト謂ヒ所得ノ額多キ次第ニヨリ租税ノ額ヲ定ムルノ率ヲ異ニシ其ノ額ヲ増加スルノ割合所得ノ割合ニ於ケルヨリ大ヒナルモノ之ヲ累進比例ノ租税ト謂フナリ

累進比例ヲ稱揚スル者ハ曰ハク各個人ノ經濟上ノ能力ハ其ノ所得ニミテ徵シテ之ヲ知ルヘカラス必スヤ其ノ必需ノ費用ヲ控除シ尙存ナル所ノ殘餘ニ據リ以テ之ヲトセサルヲ得ス即其ノ純所得多キトキ絕對的比例的ニ論ナク其ノ經濟上ノ能力モ亦自ラ大ヒナルヘシ且又多クノ租税就中間接ノ消費税ハ其ノ負擔ヲ感セシムルコト其ノ上等ノ階級ヨリモ卑ロ下等ニ於テ甚シトス此ノ一点ヨリ考フルモ既ニ他種ノ租税ニ於ケル累進ノ比例ハ其ノ公平ヲ計ルニ必要ナリト其ノ他租税ハ社會政策ノ目的ヲ達スルヲ主眼トスヘシトノ論者即之ヲ別言スレハ些少ノ所得ヲ保護シテ巨大ナル財産ノ濫合ヲ豫防セサルヲ得

スト云フノ思想ニ基キ累進比例ヲ是トスルノ輩尠ナカラス

累進比例論ニ反對スル者ハ曰ハク凡直接ニ財産及所得ノ分配ニ干渉シ且之ヲ整制スルヲ目的トスル課税法ハ皆公正ニアラス又其ノ必要ナシ且累進ノ標準ヲ定ムルニ於テハ到底專恣ヲ免ルヘカラス何トナレハ累進ノ比例ヲ以テ飽クマテ一樣ニ進ミ得ヘキニアラス必ス一定ノ所得額ニ達シテ止マサルヲ得サレハナリ況ヤ累進比例ノ租税ハ資本ノ輸出ヲ起因シ節約心ヲ減少シ剩ヘ累進ノ嚴重ト負擔トヲ忌避スルヲ目的トシ詐術ヲ構ヘテ其ノ名義ノミノ分配讓與等ヲナスノ基トナルノ恐アルニ於テヤト

抑累進比例ハ其ノ主意ノ美ナルヲ是認セサルヲ得スト雖其ノ之ヲ實行スルニ於テハ亦多少ノ闕點アルヲ免レサルハ争フヘカラスルノ事實ナリ然リト雖累進ニ代ルニ累退ヲ以テシ一ツノ大ヒナル所得額ヲ

假定シ之ニ對スル税率ヲ確定シ所得額ノ漸々小ナルニ隨ヒ次第ニ之ヲ減少シ而レテ假定ノ所得額ヲ超過スルモノハ可及的比例的ノ税率ニ據リテ課税スルノ法トナストキハ最能ク其ノ關點ヲ補フヲ得ヘント信ス是ニ至リ累退ノ基原トナスヘキ至當ノ点ヲ索ムルノ一術ニ歸セリ去リナカハ是蓋シ容易ノ業ニアラサルハ固ヨリ言ヲ竣タサルノ

第七十一章

第三 租税ノ風俗ニ適スルコト

抑租税ノ風俗ニ適スルコトトハ課税ハ風俗ニ關スル法律ノ實行ヲ助クヘキモノナリト云フノ意ヲ以テ解スヘカラス例ヘハ火酒税ヲ課シテ可及的火酒ノ消費ヲ減スルカ如ク租税ヲ課スルカ爲ニ二三ノ公共ニ審アル所爲ヲ制限スルノ結果ヲ生スルコトナキニシモアラサレト

モ是豈租税ノ本性ナランヤ租税ヲ以テ斯ノ如キ目的ヲ達スヘキモトセンカ租税ハ忽チ變テ罰金トナルヘシ果シテ然ラハ則租税ハモ財政上ノ効力ヲ有セサルニ至ラン故ニ其ノ風俗ニ適ストハ則當ノ租税ハ風俗ヲ害スルコトアルヘカラスト云フノ意ニ解スヘキナリ而シテ其ノ要項ヲ擧シレハ左ノ如シ

- 一 課税物ニ關シテハ例ヘハ犯罪ニ属スル營利ニ課税スヘカラス
- 二 其ノ結果ニ關シテハ例ヘハ不是ノ結果アル賭博ノ類ニ課税スヘカラス
- 三 其ノ評定ニ關シテハ租税ノ種類及額並ニ其ノ徵收ノ方法ニ據リ通税ヲ誘促スルコトアルヘカラス

第七十二章

第四 租税ノ法律ニ適スルコト

凡租税ハ法律ニ規定シタル方法ヲ以テ之ヲ賦課シ之ヲ徵收シ且之ヲ使用スルトキハ則法律ニ適スルモノナリ

第七十四章

第五 租税ノ確定シアルコト

凡租税ノ種類、納税主、課税物、税額評定及徵收ノ方法、犯則及違税ノ罰則及納税義務者ノ故障申立ヲ裁判スル官衙等法律上之ヲ明確ニ指定シ以テ主務者ノ専恣ニ任セサルトキハ則租税ハ確定セルモノト謂フ可シ

六 經濟ノ主義

第七十五章

租税ニ關スル經濟ノ主義ヲ分チテ二種トス即左ノ如シ

(第一) 凡租税ハ可及的純所得即經濟ノ一期毎ニ新生スルモノニシテ

其ノ原基財産ヲ減少スルコトナク以テ消費スルヲ得ヘキ所得ニノミ之ヲ負ハシメ原基財産ハ必ス之ヲ保護シ置クヲ要ス

左レハ此ノ原則タルヤ其ノ税額ノ經濟上ニ於ケル定限及所得タル昔通ノ税源ニ關スルモノニシテ臣民ノ財産ヲ保護シ之ヲ減少セシメテ以テ公共ノ財源ヲ害セサルヲ期ス是レ財政上最必要ノ件ナリトス然レトモ此ノ原則ハ決シテ絶對ノ性質アルモノニアラズ租税ハ常時ニ於テ此ノ定限ヲ超ヘスト雖非常ノ時ニ臨ミ例ヘハ不幸ニシテ戰爭久シク續キ其ノ困難測ラレス尙他ニ其ノ恐ルヘキ大害ヲ避クル爲臨時ノ國費ヲ要スルカ如キ際ニ當タリテハ之ヲ超ユルノ已ムヲ得ザルコトナキニ非サルヘシ然リ而シテ相續税ノ如キ二三ノ租税ハ實際財產税タルコトアリト雖是等ハ尙他ニ理由ノ在ルアリテ之ヲ非難スカラサルコトヲ了スヘシ

此ノ主義ニ於テ税源ト云ヘルコトヲ解釋シテ租税ノ主物課税物ハ單
 コ之ヲ所得ニ求ムヘシ而シテ之ヲ財産ニ求ムヘカラストスルカ如キ
 雖ナシトセス是未タ以テ其ノ理ヲ極メサルノ致ス所ナルヘシ蓋租税
 ノ財産ニ利害ヲ蒙ムラシムルコトハ偏ニ其ノ額ノ多寡ニ關スルモ
 ニシテ敢テ其ノ主物ニ關スルモノニアラス但實際ニ於テハ元ト財産
 又ハ資本ニ比例シテ其ノ額ヲ定メアルカ故ニ或ハ財産税又ハ資本税
 タルノ外觀アルカ如キ租税ト雖其ノ額未タ過多ナラサルトキハ其
 財産ニ害ヲ生スルコトアルナク之ニ反シ其ノ所得ニ準シテ定メタ
 所ノ租税ト雖其ノ額過多ナルトキハ財産ヲ減少シ或ハ少ナクモ之
 増殖シ得ヘカラシムルニ至ルコトアリ

第七十六章

(第二) 租税ハ各個ノ經濟ニ於テ可及的營利生活ノ紛亂ヲ避ケサル可

カラス

此ノ主義アルカ故ニ租税ハ經濟上ノ貨物ノ生産、交通、分配及消費ニ於
 テ若全ク其ノ紛亂ヲ避ケ得サルモ可及的些少ノ紛亂ニシテ止ムヘキ
 秩序ヲ定ムルヲ必要トス但縱令此ノ必要アルモ悉ク課税ノ目的ヲ達
 スルノ方策タル所ノ制限ヲ排除セントスルハ固ヨリ望ミ得ヘキコト
 ニアラス是其ノ課税物ニ關シ又徵收ノ方法及必需ノ豫防法等ニ關シ
 テハ多少人民ヲシテ不自由ヲ感セシムルハ到底避クヘカラサルコト
 ナレハナリ

七 財政ノ主義

第七十七章

財政上ノ政策ニ於テ租税ハ其ノ收穫充分ニシテ増減自由ナルヘク且
 之ニ關スル行政ノ秩然タルヲ要スルナリ

(第二) 租税ハ之ヲ以テ給足スヘキ需用ニ應スルニ充分ナルヘク且國家需用ノ移變多キ天性ニ適セシムルニ容易ナルヘキヲ第一ノ要件トス

抑此ノ原則ハ不時ノ出來事例ヘハ戰爭ノ爲國家カ平時ヨリモ多額ノ資金ヲ要シ且國家ヲ維持スル爲ニハ最甚シク人民ノ財産ヲ侵蝕セザルヲ得サル時ニ於テ充分實行セラル、モノナリ斯ル危急ノ場合ニ臨ミテハ國家ノ收入ヲシテ其ノ需用ヲ辨スルニ足ラシムルノ財政上ノ急務ヲ第一段トシ平時ニ在リテ特ニ注目セサルヲ得サル公正及經濟政策ノ原則ハ之ヲ第二段ニ置カサルヲ得サルナリ

第七十八章

(第二) 租税行政ノ原則ハ其ノ行政法即其ノ徵收法ニ關ス

租税行政法ヲ分テ直接徵收法、徵稅受負法及町村又ハ其ノ他ノ團體

ニ於テスル間接徵收法トス

而シテ今日輿論ハ重モニ受負法ヲ不是トス抑受負法ヲ以テ利アリトナスヲ得ルノ理由ハ第一一定ノ時期ニ一定ノ金額ヲ納ムルノ事實アリト云フニ在リ第二受負人ノ所得スヘキ利潤ハ其ノ射利ニ熱心ナルヨリ徵稅ニ關スル支出ヲ節約スルニ因リ以テ之ヲ償フニ足ルヘシ斯ノ如キ熱心ハ尋常ノ官吏ニ望ムヘカラスト云フニ在ルナリ然リト雖是最脆弱ナル理由ニシテ若財政ノ整理ニタル國家ヲ以テ根據トナシ立論スルトキハ此ノ徵稅受負法ヲ是トスル者ノ說ヲ論破スルコト極メテ容易ナリ受負人ハ受負事業ノ常習ニ洩レヌ一ニ自己ノ利益ノミヲ目的トスルコト及國家ト納稅者ト直接ノ關係ヲ爲スヘキハ自然ノ理ナルヘキニ反リテ此ノ二者ト利害ヲ相異ニセル第三者ヲ其ノ中間ニ置クコトノ二点ニ注目セハ此ノ法ノ既ニ不是ナルヲ知ル

ニ餘リアラン夫受負人ハ其ノ地位斯ノ如クナルト受負事業ニ依リテ非理ノ利益ヲ貪ラントスルノ慾心トヲ以テ往々慘酷ヲ極メ濫リニ及憎ヲ逞クシ剩サヘ終ニ鉅萬ノ財ヲ得テ最世人ノ嫌惡スル所トナル其ノ例歴史ニ徴シテ灼然タリ豈鑑ミサルヘケンヤ且夫古來受負人ノ私利ヲ目的トスル行爲ノ爲ニ納稅義務ト國家ノ之ニ酬ユル利行トノ關係ヲ知ルノ念ヲ薄カラシメタルニ隨ヒ人民ヲシテ愈々租稅ノ義ヲ解セサルニ至ラシメシナリ又受負法ハ支出ヲ節約スルノ利アリト云ノ蓋受負人ハ實際政府ニ比シ節約スル所アルモ是皆其ノ自己ノ利ニ歸スルカ爲ノ故ノミ固ヨリ毫モ國家ノ利トナルニアラス而シテ國家ニ於テ其ノ受負法ニ相伴フ所ノ弊害ヲ排除セント欲セハ勢ヒ夥多ノ監督官ヲ置カサルヲ得ス若受負ヲ希望スル者ノ競争少ナク隨ヒテ其ノ害甚シカラサルニシテ則恰モ受負法ヲ用ユルニ適當ナルニ似タ

リ然レトモ斯ノ如キ國ニ於テハ此ノ法ノ好果ヲ收ムルヲ得ヘカラハ又如何ニ不良ノ政府ト雖其ノ受負人ヨリモ寧ロ納稅者ニ厚キハ固ヨリ疑フヘクモアラス故ニ左程ノ弊害ヲ生スルコト無カルヘシト云ノ論者アルヘシト雖到底此ノ受負法ヲ以テ正當ノ法トスルヲ得サルノ夫受負法ハ租稅徵收ヲ以テ一ツノ營利業トナスモノニシテ是實ニ租稅ノ本性及國家ノ威嚴ニ悖ルノ甚シキモノナリ良シヤ數步ヲ譲リ占來之ヲ用ヒテ利アラサリシハ受負法ニ相伴フ所ノ弊害ノミヲ法外ニ利用シテ往々非理ノ利ヲ貪リタルコト及其ノ弊害ハ必シモ獨リ徵收法ノミニ止ラス稅法ノ關點ニモ亦大ナル關係アリシニ職由シ又他ノ一方ニ於テハ法律ヲ以テ其ノ弊害ヲ著シク防遏シ得タルコトヲ事實トナスモ到底此ノ法ハ國家ノ定義ニ根底スル租稅ノ本性ニ背馳スル

モノナルハ復讐々ヲ要セサルナリ
 是ヲ以テ受領法ハ一二ノ各別ナル租税ニ於テ之ヲ用ヒ又ハ文明未々
 進マス行政法及官吏社會ノ發達未タ充分ナラサル國家及時代ニ於テ
 或ハ之ヲ勸奨スルヲ得ヘキノミ
 國家自ラ直接ニ租税ヲ徵收スルノ法ヲ用ユル時ハ其ノ徵收ノ任ア
 官吏ニ收支手數料ヲ給シテ俸給ノ全部若ハ一部分ニ充テ以テ其ノ執
 務ニ熱心ノ度ヲ増進スルノ一策トナスコト稀ナラス然リト雖此ノ法
 ニ於テハ有効ナル監督法即重モニ身元保證金ノ差入及不意ニ屢執行
 スヘキ金庫ノ検査ニ據リ官吏ノ過失罪責ヲ豫防スヘキハ勿論ナリ
 町村若ハ其ノ他ノ政治的團體ノ補助ヲ藉リ間接ニ國稅ヲ徵收スルノ
 法ニ於テ國家ハ各別ノ納稅義務者ヨリ租税ヲ直接ニ徵收セス却リテ
 町村州等ヨリ之ヲ徵收シ面シテ其ノ納額ヲ各別ノ義務者ニ賦課スル

コトハ舉ケテ之ヲ團體ニ委任ス抑此ノ徵收法ハ在昔國家ノ下班ニ構
 スル政治的團體ノ強盛ニシテ其ノ國家ニ對シテ獨立ナルコト今日ノ
 比ニアラス且財務ハ未タ整備セスシテ國家ノ困難ナル責務ヲ完クム
 ルニ其ノ力及ハサル時ニ當タリテ最廣ク用ヒラレタル所ナリ此ノ法
 タル今日ニ及ヒテモ或ル二三ノ場合ニ於テハ尙好果ヲ收ムルヲ得ヘ
 キモノアリト雖一般ニ之ヲ論スル時ハ今代ノ國家ハ皆直接ニ租税ノ
 徵收スルノ法ヲ用ヒテ最能ク其ノ利益ヲ保スルヲ得ルハ掩フヘカン
 サルノ事實ナリトス

第七十九章

凡租税ヲ徵收スルノ順序ニ關シテハ其ノ國庫ニ對スルト納稅者ニ對
 スルトニ論ナク可及的不便ヲ生スルコト少ナキヲ要ス故ニ其ノ徵收
 ハ迅速確實及徵收費低廉ニシテ且納稅者ヲ困苦セシメサルヲ期ス

租税ヲ徴收スルニ於テ納付ノ延滞及不納ヲ許サス且徴收ノ税金ヲ速ニ各金庫ニ配達セシムルヲ迅速ト謂フナリ

租税ヲ徴收スルニ於テ適宜ノ監督法及決算法ヲ設ケ以テ誤謬及瀆職ノ行爲ヲ豫防シ或ハ速ニ之ヲ發覺スルヲ得ルコトヲ保スルノ策ヲ具フルヲ確實ト謂フナリ

租税ヲ徴收スルニ於テ納税者ノ仕拂額ト國庫ノ使用ニ供スヘキ額トノ差可及的些少ナル時即之ヲ別言セハ徴收ノ爲ニ費用ヲ要スルコト可及的少ナキヲ低廉ト謂フナリ

租税ヲ徴收スルニ於テ其ノ仕拂ノ時期場所及方法ニ關スル納税者ノ希望ハ可及的之ヲ斟酌シ其ノ手續ハ可及的之ヲ簡單ニシ以テ無用ノ様式ヲ除キ殊ニ便宜ヲナサシメ搜索ヲナシ又ハ証據書類ヲ提出セシ

ノ其ノ他納税者ヲシテ時ト費用ヲ空費セシメ或ハ其ノ一身ノ自由ヲ毀損シ家宅不可侵ノ權利ヲ害シ營業上ノ秘密ヲ洩ラス等ノ行爲ニシテ濫リニ之ヲ爲サ、ルヲ納税者ヲ困メスト謂フナリ又納税者ノ爲訴願若ハ裁判審理ノ方法ヲ以テ税額ノ評定又ハ徴收ノ錯誤ニ對シ不服ヲ申立ツノル權ヲ與フルコトモ亦緊要ナリトス

八 普通ノ所得稅及課稅法

第八十章

凡人口ノ多寡ト財政ノ需用トヲ調和セシムルハ課稅ノ政策ヲ應用スルニ於テノ目的タリ而シテ之ヲ調和セシムルニハ國民經濟ノ程度既ニ充分發達シテ風俗及法律ハ共ニ完美ノ域ニ進ミ國民ノ上等輩ハ其ノ下等輩ヲ凌クカ如キ事弊モ亦概テ排除セラレタルヲ要件トナスハ勿論ナリ

第八十一章

夫公共ノ需用ハ單獨ノ租稅即普通ノ所得稅ヲ以テ之ヲ辨給スヘシ
ノ說ハ既ニ屢世人ノ稱道セシ所ナリ此ノ說果シテ實行スルヲ得ヘキ
カ財務ヲ便コシ徵收費用ヲ低廉ニシ且納稅者ヲ煩ハスコト少ナク而
シテ此等ノ交通ヲ紛亂スルコトナカルヘシ然レトモ普通ノ所得ハ上
トシテ納稅者ノ申出ヲ根據トスルヲ以テ納稅者之ヲ職別スルニ足ハ
ノ智能ト其ノ事實ヲ隱蔽セサルノ良心トヲ完備スルヲ要ス若又官吏
ヲシテ所得ノ多寡ヲ確定セシメント欲セハ官吏ニ於テ各人ノ經濟ノ
知悉セサルヲ得スト雖斯ノ如キハ今日ノ狀況ニ於テ實際ニ之ヲ行ノ
コト最難シ加之ス納稅者中些少ノ所得アル者通常其ノ多數ヲ占ム然
ルニ此ノ直接法ヲ以テ消費稅ニ於テ實行シ得ヘキカ如ク右ノ多數者
ニ對シ國費ヲ一様ニ負擔セシムルハ爲シ得ヘカラサルコトナラン果

シテ然ラハ之カ爲納稅ノ義務者中其ノ脫漏アルコト尠ナカラス其ノ
極多額ノ所得アル者ニ對シ經濟上極メテ不正ナル累進比例ノ稅ヲ課
スルニ至ラン

以上說ツ所果シテ正鵠ヲ失セサルコトヲ證センカ爲其ノ理由及反對
ノ理由ヲ擧ケテ之ヲ詳論スルコトハ後段ニ譲リ此ニハ先ツ何レノ國
ニ於テモ單ニ普通ノ所得稅ノミヲ以テ財源トナサス國家ノ需用ヲ給
足スルニ就キ幾分カ多少ノ別コツアレ皆數種ノ租稅ヲ徵收スルノ事
實ナルコトヲ明言スルヲ以テ足レリトス

昔時國家ハ間マーニ財政上ノ理由ニ拘泥シ唯其ノ租稅ヲ課スルニ最
輕便ニシテ且多額ノ收入ヲ得ルノ望ミアル物件ヲ以テ第一ニ課稅物
トナシ公平ノ主義ト國民經濟ノ需用トニ反背シタルノ實跡ヲ顯ハシ
タルコトアリ然ルニ近世ニ至リテハ其ノ達スヘキ目的ト盡スヘキ本

分トテ觀念シ租税ニ數種アルモ皆之ヲ租税ノ原則ニ適合セシムルヲ務メ以テ其ノ課税法ヲシテ一ニ歸セシメタリ
 此ノ法ヲ定ムルニ際シ遭遇スル困難ハ實ニ大ナリ夫納税義務者各種ノ所得又ハ其ノ或ル所得アルコト或ハ財産ヲ所有スルコトヲ証表スル行爲ニ對シ租税ヲ課セサルヲ得ス是ニ於テ或ル種類ノ租税ハ人民中或ル一定ノ階級ノミノ負擔トナルヲ以テ更ニ自餘ノ階級ニ平等ノ負擔ヲ生スヘキ他ノ租税ヲ求メサルヲ得サルナラシムル或ハ普通食用品税ノ如ク各階級人民ノ負擔トナル所ノ普通ノ租税ニ於テ恐ラシハ或ル一定ノ階級ノミ法外ニ負擔ノ重キヲ覺ユルコトヲ免ルヘカラサルナラン然ルトキハ則其ノ公平ヲ目的トスル普通若ハ特別ノ租税ヲ求ムルノ必要再發生スヘシ是等ノ外租税ハ何レノ時ニ於テモ國家ノ需用ニ適合スルヲ要スルカ故ニ或ハ之ヲ増加シ或ハ之ヲ減少シ以テ歲

入ニ過不及ナカラシメサルヲ得ス

第八十一章

凡所得ニ租税ヲ課スルニ一個人毎ニ各種ノ所得ヲ合計シテ其ノ總額ヲ求メ以テ之ヲ課税ノ標準トナシ又ハ一定ノ所得或ハ財産ヲ有スルコトヲ表スヘキ出來事若ハ行爲ヲ以テ其ノ標準トナスノ二法アリ而シテ其ノ第一ニ據ルヲ評價課税法ト謂ヒ第二ニ據ルヲ増價課税法ト謂フ

評價課税法ニ於テハ各種ノ税目ヲ確定シ置キ納税義務者カ詳細ニ計算セル所得ノ種類毎ニ其ノ相當税ヲ課シ又増價課税法ニ於テハ一個人ノ消費ヲ觀テ其ノ所得アルコトヲ推決スルモノニシテ即實際納税力ニ應シタル租税ヲ賦課スルノ標準トナスヲ得ヘキ行爲又ハ物品ヲ課税物トナズモノナリ

以上ノ二法ハ今代ノ國家ニ於テ同時ニ並ヒ行ハル、モノトス其ノ得失ニ關シテハ租稅論ノ終局ニ臨ミテ之ヲ論スヘシ

九 租稅ノ類別

第八十三章

租稅ハ既ニ前段論述スル所ヲ以テ自ラ明瞭ナルカ如ク種々ナル標準ニ基キ之ヲ數等ニ區分スルヲ得ヘシ
又租稅ヲ仕拂フ時ニ使用スル貨物ノ性質ニ基キ之ヲ左ノ二種ニ區別ス

第一 現物稅即生産物及現役ヲ以テ仕拂フ稅ナリ

第二 金錢稅即現金ヲ以テ仕拂フ稅ナリ

第一種ハ多ク貨幣ノ流通稀レナリシ現物經濟ノ時ニ用ヒラレ今日ニ至リテハ經濟ノ有様未ク發達セサル國ニ行ハル、ノミ其ノ既ニ發達

シタル國ニ於テハ悉ク金錢仕拂ヲ以テ之ニ代ヘタリ

第八十四章

租稅ノ性質ニ無期ト有期トノ別アリ之ニ由リテ租稅ヲ類別スルトキハ則チ左ノ二種トナスヘシ

第一 常時稅即財政上租稅ノ主要ナル大部分ハ此ノ種ノ稅ニ屬シ毎會計年度ニ於テ規則正シク之ヲ徵收ス

第二 臨時稅即非常ノ需用アルノ時例ヘハ戰時ニ於テ之ヲ徵收ス租稅ノ制漸ク興起シタル昔日ニ在リテハ收入ヲ臨時稅ニ仰キシコト極メテ多カリシカ課稅ノ法ヲ公正ニシ秩序ヲ整然タラシメシコトヲ務メテ已マサル所ノ今日ニ及ヒテハ臨時非常ノ租稅ハ却リテ其ノ秩序ヲ紊亂スルノ基トナルヘシ故ニ今日臨時ニ歲出ノ多額ヲ要セハ臨時徵收スル所ノ租稅ヲ一時増加シ以テ臨時ノ需用ヲ辨スルヲ得ルノ

第八十五章

仕拂フヘキ租額ヲ確定スルノ方法ニ基キ類別スレハ則チ定額税及少
合税ノ二種トナスヘシ

第一種ニ在リテハ國家ノ大權ヲ以テ租税ノ納額及課税物ヲ專定ス加
之多クノ定額税ニ在リテハ各個ノ納税主及其ノ負擔ニ係ル税額ヲ指
定ス然レトモ租税ノ總額課税物及州、町、村、組合等ノ如キ政治的ノ團體
ニ對スル其ノ賦課額ノミヲ定メ之ヲ各別ノ義務者ニ賦課スルコトヲ
團體ニ委任スルヲ以テ満足スルコト往々之レアリ

第二種ニ在リテハ之ニ反シテ各個ノ課税物ニ賦課スヘキ税率ヲ確定
スルノミ故ニ之ヲ徵收シタル後即會計年度ノ經過ヲ待ツニアラサレ
ハ實際收入ノ總額ヲ知ルヘカラス

所謂直税就中營業、資本等ニ課スルカ如キ收穫税ニ在リテハ其ノ之ヲ
課スヘキ納税者ノ收穫ハ概チ永續ノ性質アリテ細カニ其ノ納税主及
課税物ヲ調査スルヲ得ルカ故ニ直税ハ定額税ナルコト常ナリ之ニ反
シテ消費税ニハ歩合税多シトス蓋課税物タル消費ノ行爲ハ概チ之ヲ
推量スルヲ得ヘシト雖豫メ之ヲ算定シ得ヘカラス但一定ノ納税義務
者若ハ其ノ集合體ヨリ毎時ノ納税ニ代ヘ一度ニ總括税ヲ仕拂ハシム
ルコトアリ然ルトキハ消費税モ亦一種ノ定額税トナルナリ

第八十六章

税額評定ノ法即各個ノ義務者カ仕拂フヘキ税額ヲ確定スルノ法ヲ分
チテ左ノ二種トス

第一 精細ノ評定

第二 概畧ノ評定

第二ノ評定法ハ素ヨリ粗ナルカ故ニ自ラ復公正ナルヲ期セス而シテ之ヲ實用スルハ第一法ヲ用ユルニ由ナキ時ニ限ルヲ常トス即今日儘カニ消費税ニ於テ例ヘハ前述ノ如ク一定ノ義務者ニ毎時ノ納税代ヘ總括税ヲ課スルノ場合ニノミ之ヲ用フ

第一ノ評定法ハ密ニシテ公正ナルハ疑ナシト雖之ヲ實行スルニ難キハ固ヨリ言フ俟タス而シテ此ノ法ニ於テハ税額ヲ評定スルノ原準トナスヘキ課税物例ヘハ土地、資本、麥酒、砂糖等ノ積量多寡並ニ往々其ノ良否ヲ綿密ニ確定スルヲ主眼トス

然ルニ國家ハ其ノ官衙ノミヲシテ課税物ヲ確定セシムルヲ得ルコト稀ナリ其ノ調査スヘキ事件ハ千差万別極メテ煩繁ナルヲ以テ國家ハ多少人民ノ補助ヲ求メザルヲ得ス即納税義務者、町村廳、特任ノ委員、各個人、私人ヲシテ補助セシムルヲ得ヘキナリ

(イ)納税義務者ノ補助

納税額ノ評定ニ供用スヘキ事實例ヘハ其ノ所得高、財産、營利生産ノ方法及多寡、生産品等ニ關スル納税義務者ノ申立ハ即此ノ補助ヲナスモノニシテ義務者ハ必ス其ノ申立ヲナサ、ルヲ得サルモノトス而シテ其ノ申立ニ可及的詐偽ナカラシムルヲ期スル爲先ツ警宣ヲナサシム又ハ一般ノ監督ニ付スルノ目的ヲ以テ之ヲ公告セシムルナリ然レトモ義務者ノ申立其ノ物ニシテ既ニ信偽ヲ保シ難シトスルトキハ吾ソ其ノ警宣及公告ヲ以テ其ノ弊ヲ除クヲ得ンヤ否義務者ヲシテ其ノ申立ヲナサシムルノ法ニ於テ此ノ關點アルハ尙ニ免カルヘカラサルノ數ナリ故ニ其ノ申立ニシテ疑訝スヘキモノアレハ嚴密ニ之ヲ査察シ且故意ニ事實ヲ隱蔽シタル者ハ重ク之ヲ罰スルヲ以テ足レソトヤサルヘカラス

(ロ)町村廳若ハ公證人等ノ幫助

町村廳若ハ公證人等ハ收稅廳ノ要メニ應シ必要ノ調査ヲナシ且之ヲ通報シ或ハ納稅義務者ノ申立ヲ取次クモノナリ

(ハ)特任委員(租稅總代)ノ幫助

官廳ヲ輔ケ納稅ノ評定ヲ検査シ之ヲ確定スルノ任ヲ該委員ニ負ハシム

(ニ)各個ノ一私人ノ幫助

一私人ト雖他人ノ納稅額ヲ評定スルニ緊要ノ事實ニ關シ説明等ヲナスコトヲ得ルトキハ之ヲ申告スルノ義務アルコト稀ナラス例ヘハ雇主ノ被雇人ニ於ケル債主ノ負債主ニ於ケル家主ノ借家人ニ於ケルカ如シ

以上述フルカ如キ方法ヲ以テ義務者ノ納稅額ヲ可及的綿密ニ確定ス

ルコトヲ務ムルトキハ又一方ニハ其ノ錯誤ニ出タル評定及徵収ニ對シ義務者ヨリ異議ヲ申立ツルノ道ヲ設ケ置クヘキコト既ニ前ニモ曰ヘルカ如シ

第八十七章

徵収ノ方法ニ基キ租稅ヲ分チテ直稅間稅ノ二種トス

直稅ハ之ヲ負擔スル者ヨリ直接ニ之ヲ徵収ス故ニ其ノ納稅人ト負稅人トハ同一人ナリ

間稅ハ課稅ノ便宜上本來ノ負稅人ヨリ直接ニ之ヲ徵収セス而シテ第三者ヨリ間接ニ之ヲ徵収ス其ノ間接ノ地位ニ立ツ負稅人ヲシテ之ノ債ハシムルト否トハ一ニ第三者ノ意ニ任カスモノトス是納稅移轉ノ條ニ於テ詳論セル所ナリ

夫直稅ハ租稅臺帳及課稅名簿ニ基キ納期及納額ヲ一定シ且一定シ店

ル所ノ負税人ヨリ之ヲ徴收スルヲ以テ國庫ト負税人トノ間ニ存スル關係ハ頗ル堅牢ナリ間税ハ之ニ反シ主トシテ税率ニ據リテ徴收ス故ニ國庫ト負税人トノ間ニ關係ヲ生スルハ規外ノコト、シ又唯偶然時ノ關係ヲ國庫ト納税人トノ間ニ存スルノミ

第八十八章

課税物ノ經濟上ニ於ケル性質ノ如何ニ基キ租税ヲ類別シテ左ノ四種トス

第一 收穫税

第二 財産移轉税

第三 消費税

第四 人税所得税及財産所有税

此ノ類別ハ現今殆各國ノ税法ニ於テ屢見スル所ノ各種ノ租税ヲ正確

判明ニ分ツモノニシテ其ノ下章ニ論述スル所モ亦此ノ類別ニ基クモノナリ

第一節 收穫税(直税)

一 定義及類別

第八十九章

收穫税ハ經濟上ノ收穫ニ課スル租税ニシテ即收穫ヲ以テ其ノ税源トナスモノナリ

是故ニ收穫ノ種類アルニ隨ヒ收穫税ニモ亦其ノ種類アルノ理ナリ而シテ收穫ハ素ト土地資本營利起業及勞力ニ生スルヲ得ルモノナレハ收穫税ヲ大別シテ地。税。金。利。税。營。業。税。及。勞。銀。税。ノ四種ニ分ツヲ得ヘシ借家料ハ資本ニ生スル收穫ト土地ニ生スル收穫トヲ兼テタル特性アルカ故ニ特ニ之ヲ一種ノ税トナシ家屋税ト稱スルノ習慣ヲ致セリ其

ノ他森林地稅、鑛山稅等ノ如ク各別ナル收獲ノ泉源ニ關シ特種ノ稅ヲ生ス蓋是等ハ皆其ノ稅額評定ノ法ヲ特別ニスルヲ以テナリ
課稅物ハ利益金其ノ物ニアラサレハ則之ヲ生スル所ノ基タル產出力ナリトス

納稅主ハ收益權アル所有者若ハ占有者ナリトス
是等ノ租稅ハ皆物件稅ナリ之ヲ細言セハ收獲ノ泉源ト其ノ多寡トニ關係アルモノニシテ毫モ所有者若ハ占有者其ノ人ノ如何ヲ斟酌スルコトナシ若其ノ稅額ヲ定ムルニ所有者若ハ占有者ヲ酌量スルコト少キニ趣クトキハ其ノ租稅ハ愈々本來ノ人事稅ニ近ツクモノナリ
又其ノ徵收法ヨリ之ヲ論スルトキハ是等ノ租稅ハ皆直稅ナリ故ニ納稅人ヨリ直チニ之ヲ徵收ス強テ其ノ規外ニ出ツルモノヲ求ムレハ儘ニ其ノ一アリト云フヲ得ヘキカ又是等ノ租稅ハ納稅義務者ト收稅官

衙トノ間ニ永續的ノ關係ヲナスカ故ニ定額稅ナリ
是等ノ租稅ニ於ケル稅額ハ第八十六章ニ詳述セル方法即官ノ調査又ハ検査ヲ了シタル義務者ノ申立ニ據リテ之ヲ評定ス然レトモ每經過年度ノ實收額ハ一々之ヲ求メス最近數ケ年間ノ收獲平均額ニ據リ稅額算定ノ標準トナスヲ以テ満足スルヲ通例トス
以下順次ニ地稅、家屋稅、金利稅、營業稅及勞銀稅ヲ詳述シ終リニ至リテ尙收獲稅ノ價值ヲ論スヘシ

二 地稅

第九十章

地稅ハ農者之ヲ別言セハ農業ニ生スル收獲ヲ目的トナシ且之ニ由リテ生ヲ營ム者ノ稅ニシテ即其ノ土地ノ收獲ニ課スルモノナリ
收獲稅ノ中ニ就キ地稅ヲ以テ最古シトス蓋開化ノ度尙低下ナリシ古

代ニ在リテハ土地ヲ營利的財産トナシ最廣大ナル價值アリシカ故、
 而シテ今日ニ至リテモ尙地稅ハ其ノ收入最多クシテ且國民中之
 負擔スルノ區域最大ヒナルカ故ニ收獲稅中最緊要ノモノナリ

第九十一章

夫地稅ハ農業ノ收獲ヲ以テ其ノ經濟上ノ稅源トナスモノナリ故ニ種
 々ナル事實ニ徵證セテ各個ノ土地ノ收獲力ヲ計算シ而シテ此ノ稅源
 ノ財政ニ對シ收入ヲ生セシムルヲ得ル能力ノ程度ヲ確定スルヲ以テ
 課稅ニ於クル第一着トナサ、ルヲ得ス
 往時ハ農業ニ使用スル犁及牛馬ノ數若ハ種子ノ量等ノ如キ外面ニ關
 ハル、所ノ徵候ノミニ據リ其ノ收獲ヲ概定シ以テ其ノ稅額ヲ算定ス
 ルノ標準トスルヲ以テ足レリトセシカ租稅ノ緊要ヲ増シ學術技術ノ
 進歩シタル今日ニ及ヒテハ新ノ如キ概定法ヲ以テ之ニ備足スルヲ待

ス尙且其ノ收獲多寡ノ由リテ來ル所ノ原素ニ就キ一層綿密ニ知悉セ
 サルヲ得ナルニ至レリ此ノ目的ヲ達セントスルニハ宜シク地稅臺帳
 登記ノ法ヲ以テスヘキナリ

第九十二章

納稅義務者ノ申立ヲ待タスシテ經濟上ノ稅源ニ就キ財政上ノ課稅物
 ヲ知悉セント欲セハ一定ノ原位(ヨツホ)「ターグウエル」(ヘクトール)
(土地ノ面)ヲ基トシテ土地ノ面積ヲ測量シ而シテ後其ノ一原位ニ相
 當スル收獲ノ高ヲ定ムルノ外他ニ其ノ道ナシ

地稅臺帳ハ稅額評定ノ準繩トナス爲土地ノ位地形狀等ノ事項ハ勿論
 其ノ廣狹善惡ヲ詳細ニ記載スルモノナリ故ニ地稅臺帳ヲ調製スルニ
 要スル行爲ニ於テ技術的經濟的ノ二種アリ
 技術的ノ行爲ハ尙類別シテ左ノ二種トス

第一 三角法ノ規則ニ從ヒ實行スヘキ土地測量

第二 測量ノ成績ヲ載セ且一地方ノ土地ヲ以テ或ハ小農區ニ據リ或

ハ領地ニ據リテ分チ又其ノ位地及用法ヲ明ニシ之ニ彩色ヲ施

シタル地圖ノ調製

經濟的ノ行爲ハ各個ノ土地ノ收穫平均高ヲ調査シテ之ヲ確定スルニ成ルモノニシテ之ヲ確定スルニ間接直接ノ二法アリ

間接法ニ於テハ土地ノ買價又ハ小作料ヲ標準トス然レトモ買價ニ據リ收穫ノ多寡ヲ求ムルトキハ則充分満足スヘキ成績ヲ得ルコト稀レナリ蓋土地ノ賣買頻繁ナル時ニ於テ僅ニ土地ノ收穫ト其ノ買價ト止當ノ比例ヲナスコトアルノミ其ノ他ニ土地ノ買價ト收穫ト正比例ヲナスヘカラサルノ理由トナルモノ極メテ多シ例ヘハ其ノ土地ヲ殊異ニ野々ノ故ヲ以テ高價ヲ拂フカ如キ農產物ノ市價ニ變動アルカ如キ

一定ノ土地例ヘハ小農地ヲ好ム者ノ多キカ如キ皆買價ニ特別ノ影響ヲ來タサ、ルハナク或ハ賣買ノ稀ナルカ爲ニ其ノ買價ヲ全ク知ルヘカラサルコトナシトセス是ヲ以テ收穫ノ多寡ヲ定ムル小作料ニ據ルヲ以テ大ニ優ル所アリトス然レトモ是亦多ク土地ヲ小作ニ附シ且地主小作人ト相謀リテ詐僞ヲ構フルコトアラハ之ヲ嚴罰スヘキ制法アル所ノ國ニ於テスルコト勿論トス

直接法ニ於テハ土性、地勢、交通ノ便否、用法、耕作法、營業ノ方法及助成物等種々ナル事實ヲ調査シテ直接ニ土地ノ收穫ヲ評定シ以テ其ノ平均ノ收穫高ヲ求ムルモノコシテ右ノ事實ハ可及的綿密ニ之ヲ調査シ且平均ノ勉強、努力及智識アルモノト假定シテ之レニ據リ毎年豫期スヘキ收穫高ヲ確定スルモノナリ

農業ノ集約ニ趣クニ從ヒ各個ノ土地ノ收穫ヲ評定シ之ヲ他ノ土地ト

比較スルコト愈々難キヲ加ルハ免ルヘキ事ナルノ事實ナリ故ニ此ノ難事ヲ避クル爲土地ニ階級ヲ分チ其ノ標準トナスヘキ土地ヲ定メ之ニ據リテ各小農區ノ等級ヲ評定スルヲ通例トス而シテ之ヲ評定スルニ當タリ土地買價若ハ小作料ヲモ亦其ノ標準ノ一助トナストキハ大ニ利便ナリトス

收穫ヲ求ムルニハ概テ先ツ土地ノ總收穫平均高ヲ評定シ次ニ其ノ中ヨリ平均ノ生産費ヲ控除シ以テ其ノ課税スヘキ純收穫高ヲ得ルノ法ナリ而シテ生産費ノ多寡ヲ知ルニ於テ特ニ注目スヘキハ土地ノ所在ト農家及市場トノ距離日雇及金利ノ高低土地ノ用法等ナリトス總收穫高ヲ確定スルノミヲ以テ足レリトナス税法モ間之レアリ而シテ此ノ法ハ簡單ニシテ手數及費用ヲ要スルコトモ亦自ラ少ナシト雖土地ノ肥瘠及用法ノ如何等ニ由リ總收穫同一ナルモ其ノ純收穫ニ至

リテ大ニ之ヲ異ニスルコトアルカ故ニ其ノ定方タルヤ極メテ不確實ナリ但種子ノ爲ニ要セシ額及一二副産物ノ收穫ニ課税セスシテ總收穫税ノ苛酷ナルヲ幾分カ寛緩ナラシムルモノ往々之レ有り土地ノ測量及收穫評定ニ據リテ確定シタル面積及土地ノ等級ヲ基礎トシ以テ各個義務者ノ納税高ヲ算定スルヲ則トス

第九十三章

前章述フル所ノ納税評定法ニ據ルトキハ夫ノリカルド氏ノ稱スル意義ヲ以テ謂フ所ノ純粹ナル土地ノ收益ノミニ限ラス其ノ他ノ泉源ニ生スル農者ノ所得ヲモ亦併セテ標準トナスコト常ナリ

今農者ノ所得ヲ解剖スルトキハ左ノ三原素アルヲ知ルヘシ
第一 國民經濟學ノ意義ヲ以テ所謂土地收益即土地其ノ物ヨリ生スル收穫

第二 土地ノ爲ニ使用シタル資本即土性改良ニ因リ永久土地ニ附着スル資本及農業ヲ營ムニ要スル農具及機械等ヨリ成ル資本一
生スル收穫

第三 農夫ノ勞力ニ生スル收穫

土地收益ト土性改良ニ要シタル資本ノ收穫トヲ合算スルトキハ所有者ノ所得高ヲ得ヘシ又營業資本及農業ニ要シタル勞力ノ收穫ヲ合算シ而シテ雇夫ノ賃錢ヲ控除スルトキハ營業益金ノ高ヲ得ヘシ
重ニ地主タル者ノ所得ニ歸スル收穫ニ課税シ營業收益ハ別ノ收穫税例ヘハ營業税ヲ課シ又ハ全ク直税ヲ免レシメントスル一二ノ税法ニナキニアラサレトモ地稅ニ關スル法律ノ最多數ハ斯ノ如ク本來ノ土地收益ト營業收益及金利トヲ區別スルヲ許サス總テノ原素ヨリ生ヘル農業ノ收穫ヲ一括シテ之ニ稅ヲ課スルナリ勿論之ヲ一括シ其ノ稅

ヲ課シ一方ニハ生産費ヲ減除スルトキハ此ノ稅ハ大ニ本來ナル所得稅ニ類スルニ至ルヘキナリ

第九十四章

地稅臺帳ニハ既ニ前ニモ云ヘルカ如ク測量及評定ノ成績ヲ載スヘシ加之納稅主ノ氏名及稅額ヲ記入シ且軍事用道路修築開造、土地抵當等ノ目的ニモ亦之ヲ利用スルヲ得ルモノナリ

地稅臺帳ヲ調製スルニ際シテハ可及的事實ニ適セル收穫高ヲ登記スルヲ以テ主眼トセサルヲ得ス抑地稅臺帳ナルモノハ其ノ性質上ヨリ論スルトキハ其ノ大要最前ノ儘永存スヘキ筈ナレトモ歲月ノ經過スルニ從ヒ其ノ所載ノ條項即地主又ハ土地ニ變更ヲ生シ之カ訂正ヲ施スニアラサレハ公正ヲ失スルコトナキヲ保スヘカラサルニ至ルコト常ナリ